



やないづの 家宝展

地域おこし協力隊が出会った やないづのたからもの

2021

協力・柳津町のみなさん



やないづの
家宝展
2021



協力・柳津町のみなさん

「やないづの家宝展2021」に
ご協力いただいた、すべてのみなさまに、
心より感謝申し上げます。



やないづの家宝展 2021 事業概要

実施期間 2021年1月7日—2022年4月10日

活動内容 町民への聞き取り調査（調査期間 2021年1月7日—2022年1月3日）

成果報告展「やないづの家宝展 2021」

（展示期間 2021年12月11日—2022年4月10日）

筑波大学による柳津町調査（調査期間 2021年9月4日—2021年10月10日）

筑波大学による制作作品展示（展示期間 2021年12月11日—2022年4月10日）

主催 やないづ町立斎藤清美術館

協力 柳津町民のみなさん

筑波大学

二〇一九年から始まった事業「やないづの家宝展」では、

齋藤清美術館の地域おこし協力隊が武蔵野美術大学や筑波大学の学生たちとともに柳津町の人々に取材を行い、当地に眠るたくさんの「宝物」を掘り起こしてきました。その取り組みは本年度で三年目を迎えます。

外部から柳津町を訪れた彼らは、いわば異郷人です。

しかし、実際に柳津町で暮らす私たち地域おこし協力隊の目に映るのは、観光客のそれとは違う、今この時を、この地で生きる人々のリアルな姿。

そこには、日々の生活があります。

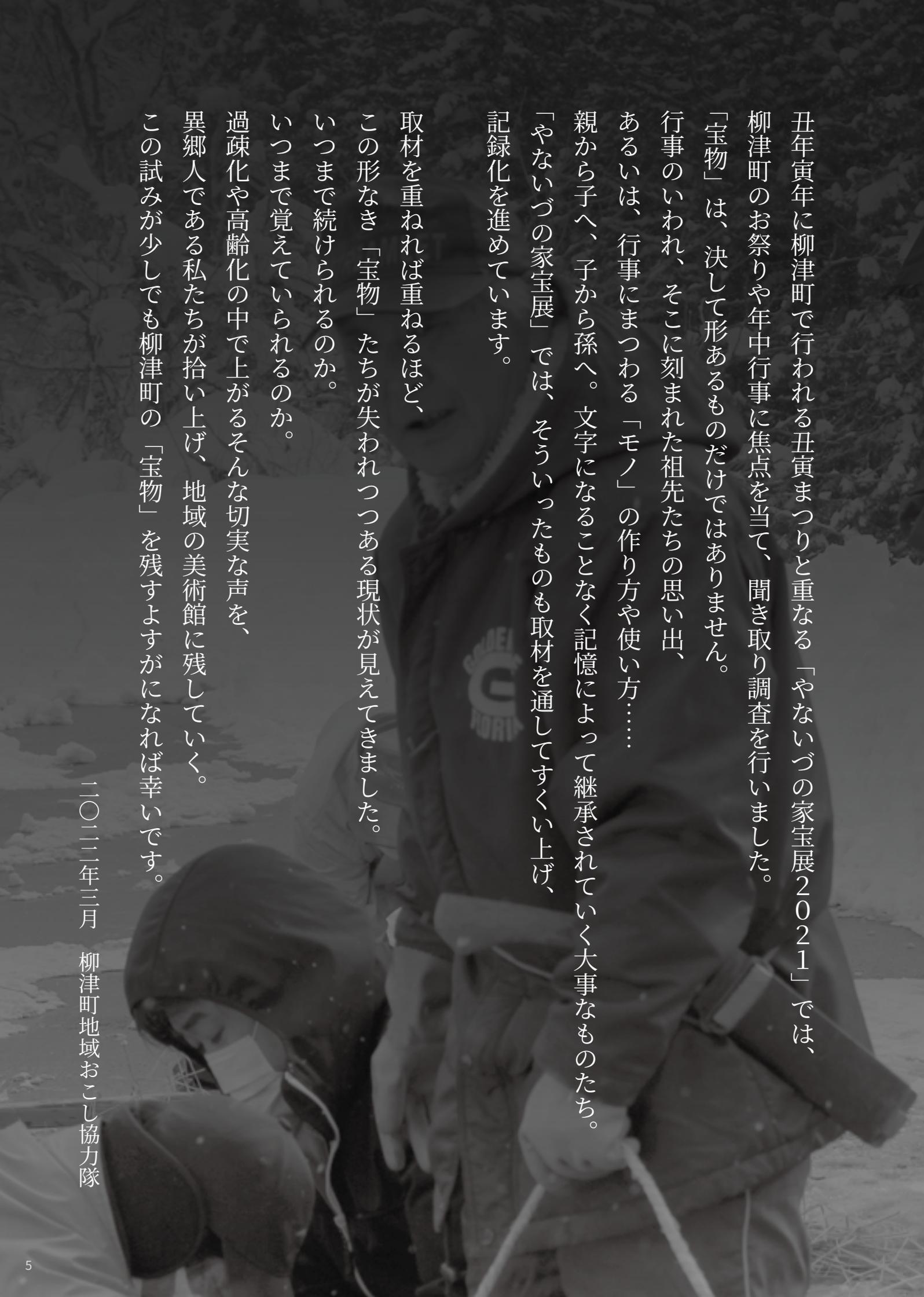
冬の終わりを喜ぶ春があります。

農作業に追われる夏があります。

収穫を祝いながらも、じきに訪れる厳しい冬に備える秋があります。

そして、耐え忍ぶ冬があり、冬を楽しむ人々の工夫と豊かさがあります。

齋藤清が描こうとした、雪国で生活する人々のひた向きの強さがあります。



丑年寅年に柳津町で行われる丑寅まつりと重なる「やないづの家宝展2021」では、柳津町のお祭りや年中行事に焦点を当て、聞き取り調査を行いました。

「宝物」は、決して形あるものだけではありません。

行事のいわれ、そこに刻まれた祖先たちの思い出、

あるいは、行事にまつわる「モノ」の作り方や使い方……

親から子へ、子から孫へ。文字になることなく記憶によって継承されていく大事なものたち。

「やないづの家宝展」では、そういったものも取材を通してすくい上げ、

記録化を進めています。

取材を重ねれば重ねるほど、

この形なき「宝物」たちが失われつつある現状が見えてきました。

いつまで続けられるのか。

いつまで覚えていられるのか。

過疎化や高齢化の中で上がるそんな切実な声を、

異郷人である私たちが拾い上げ、地域の美術館に残していく。

この試みが少しでも柳津町の「宝物」を残すよすがになれば幸いです。

二〇二三年三月

柳津町地域おこし協力隊

やないづの家宝展2021 目次

「あいさつ」

「やないづの家宝展」について

■地域おこし協力隊による取材記録・成果展示

町民への取材記録

一月三日

安久津地区

「綱打ち講中」

10

□寄稿 『想いを残すために』 柳津町地域おこし協力隊 我妻泉香

一月七日

小池勇一さん

「七日堂裸詣り」

12

一月十三日

舩木キミ子さん

「団子さし」

18

□寄稿 『家宝展が呼び起こす記憶』 柳津町地域おこし協力隊 谷野しずか

一月十五日

檀ノ浦地区

「歳の神」

24

二月二日

冑中地区

「ニンギョウマンギョウ」

30

四月四日

小巻地区

「大般若会」

38

□寄稿 『お祭りの取材を通して感じたこと』 柳津町地域おこし協力隊 塚原有季

七月八日

新井田順一さん

「豆ぶっつけ（小巻の婚礼行事）」

44

七月十五日

寺家町地区

「大日如来尊大祭」

46

一王町地区

「熊野神社大祭」

48

七月二十三日 門前町地区 もんぜんまち
九月三十日 柳津観光協会
十月二十三日 砂子原地区 すなこはら

□寄稿 『熊野神社の由緒』 一王町地区在住 山名定喜
「愛宕神社大祭」 あたご
「九月堂おこもり」
「センドムシ(センドモウシ)」

成果展示

やないづの家宝展2021

□柳津町年中行事一覧表

筑波大学×斎藤清美術館地域おこし協力隊協同事業

「祈晴柳津鳥瞰図」制作記録

学生による柳津町調査と制作記録

リモート調査 菊地義隆さん「あっただよ」／あかべこ語りの会「昔語り」／武田幹雄さん「町巡り」

柳津町来訪 筑波大学×斎藤清美術館「進捗報告と作品案」／金子勝之さん「水と暮らす」／

天野俊彦さん「善波命と千石太郎」／武田幹雄さん「柳津町の郷土料理」

筑波大学制作作品「祈晴柳津鳥瞰図」

□寄稿 『やないづの家宝展2021』 事業についての「意見、ご感想」 筑波大学芸術系村上史明

□寄稿 『やないづの家宝展2021』 事業についての「意見、ご感想」 筑波大学芸術系学生

103

102

96

86

76

70

68

64

56

54

52

51

地域おこし協力隊による取材活動記録

柳津町の美しい四季と、

それと共に流れる人々の自然な生活。

その中には、今も、

暮らしに寄り添うお祭りや年中行事が

多く残されています。

強い想いを胸に、

過疎化やコロナ禍にあっても

欠かさずに続けられてきた行事たち。

これは、そんな柳津町の「宝物」を、

当地に暮らす地域おこし協力隊員が

取材した記録です。



たにの
谷野 しずか

東京都豊島区出身
日本大学芸術学部
美術学科絵画コース卒業
2019年9月柳津町地域おこし協力隊着任



あづま みか
我妻 泉香

東京都港区出身
武蔵野美術大学造形学部
工芸工業デザイン学科陶磁専攻卒業
2019年5月柳津町地域おこし協力隊着任



つかはら ゆき
塚原 有季

埼玉県嵐山町出身
武蔵野美術大学造形学部
視覚伝達デザイン学科卒業
2021年5月柳津町地域おこし協力隊着任

一月三日 綱打ち講中

一月七日 七日堂裸詣り

一月十三日 団子さし

一月十五日 歳の神

二月二日 ニンギョウマンギョウ

四月四日 大般若会

豆ぶっつけ(小巻の婚礼行事)

七月八日 大日如来尊大祭

七月十五日 熊野神社大祭

七月二十三日 愛宕神社大祭

九月三十日 九月堂おこもり

十月二十三日 センドムシ

あぐつ 安久津地区

「綱打ち講中」

つなぶ

こうちゅう

この「綱打ち講中」では、もともとは圓藏寺で行われる「七日堂裸詣り（一月七日）」（※1）のために綱を作っていました。雪の夜、圓藏寺の本堂を目指す男たち。彼らが凍てつく石段で足を滑らせぬよう、手すりになる丈夫で長い、立派な縄が必要だったのです。

現在、鉄製の手すりが出てからは、圓藏寺の仁王門に三本、地区の鎮守様の鳥居に一本、しめ飾りとして納められるようになりました。

三人で一本ずつ作った藁を持ち、掛け声と共にリズムカルにねじって太い綱に仕上げている様子は、それ自体がお祭りのような雰囲気。綱作りの場に生まれる「コミュニケーション」を求めて参加している人もいるのかもしれませんが。

■取材日時

二〇二二年一月三日（月）

■場所

柳津町安久津地区

■インタビュイー

安久津地区町民「町」

■インタビュアー

我妻 泉香 「我」

目黒 清志 「目」

地域おこし協力隊
斎藤清美術館係長、
安久津地区在住



「町」 せえの、よいしょ！よいしょ！よいしょ！よいしょ！よいしょ！……はい、オーケー。

「目」 太くすんの？

「町」 いやいや、伸ばすだけで良い。長さがねえから、長さが欲しいんだよ、長さが。この辺まで。見た目も大切だからな。あとで修正しようと思ってもできねえから（笑）。

もつと雪がすごかったのよ

「我」 毎年欠かさず作ってるんですか？いつからとかはもう、わからない？

「町」 たぶん七日堂のときの綱、手すりに。二月だべ？ほら。七日堂も昔はほら、みな旧のあれだから、旧暦だと二月になつから。物事はみんな旧だから。そうだから、もつと雪

がすごかったのよ。裸足で登って、綱が欲しかった。それなくなつたから、これになったの。ほら、手すりできたから。

「我」 手すり代わりだったんだ。

「町」 そう、その代わりに、これな。しめ縄じゃなかったんだ。だから綱っていうんだ、縄繙い（なわな）ってね。だから本来であれば十二月前にさ、しめ縄飾るわけだったけど。本当はさ。七日堂に合わせてのあれだったから。

「目」 これ納めてんのは安久津だけなんですか？他の地区ではやってない？

「町」 やってない。だから安久津はほら、御祈禱料がタダなんだぞ。これ納めることによって、御祈禱しますよって、安久津地区はって。御開帳のときに、お金出さなくてもやってあげますよって。やっぱり村の近くでさ、百姓さやっているとこなんか、藁のあつこはなあ、寺家町とかあつちらへんはないから。あんななあ。安久津のほうが百姓してる。

村の人から伝えられたんだ



「我」 これはお父様とかに教えていただいて？

「町」 いや、これはやっぱ村の人から伝えら

れたんだ。うちの中ではあんまり関係ねえことだから。うちではこれはやらないから。

「我」 教えてもらつてすぐできるようなものじゃないですよ？

「町」 そうだなあ。やっぱ、やってみねえと動きがなかなか。

子どもたちが、男と女が交代で



「町」 昔、安久津では、下の役場の前に藁師様と鎮守様を子どもたちが、男と女が交代で、日曜日の朝、宮掃除。毎週、一週間交代で。宮掃除って、こころへんの杉葉掃いたりして。そんでその後で遊んで歩いたんだ、この辺。かくれんぼなんておめえ、安久津集落中だから。缶蹴りだって、安久津集落中だから。そのうち終わって、鬼になつたつてみんな帰っちゃう。見つけようねえだから（笑）。

※1 七日堂裸詣り…p. 125

想いを残すために

柳津町地域おこし協力隊 我妻泉香

私は神さまのいない街で育ちました。東京の臨海部、埋め立て地である出生地には、無味乾燥なコンクリートのビルが立ち並び、古くからの神社もお寺もありません。子どもの時分、親に連れられて、商業施設の屋上に勧請されたというピカピカの神社を訪ねてみたことはありますが、電子音の鈴の音を聞きながら、幼心にありがたみを感じることはついぞありませんでした。

そんな私にとって、年中行事やお祭りはまったく馴染みのないものです。なにか神秘的ですてきなもの、という印象だけがあり、どんなに本を読んで知った気になっても、実感をもたず理解できたことはありませんでした。なぜ行事を行うのか。なぜ神さまに祈るのか。その根幹が私の中にはなかったのです。

地域おこし協力隊として柳津町にやって来た一年目の秋。そのとき、私は初めて本当のお祭りに出会いました。この年はちょうど「やないづの家宝展」が開始したころです。その手探りで始めたばかりの取材の中で、私たち地域おこし協力隊は、西山地域の砂子原地区で「ティールーム山ねこ」を営む金子勝之さんと知り合うことになりました。私たちのたどった正しい取材にもこやかに答えてくれるこの気さくなご主人は、その後「やないづの家宝展」のキーパーソンとなっていくます。その金子勝之さんからお誘いで、当時私の先輩地域おこし協力隊員で「やないづの家宝展」の発案者である金盛郁子さんと一緒に、砂子原地区のセンドムシを見せてもらえることになりました。

初めてセンドムシを見た夜は、夢中でカメラのシャッターを切ったことを覚えています。帰ったあと、散々友人に自慢したことを覚えています。本やネットでセンドムシについて調べて、まったく情報が出てこないことに驚愕したことも、覚えています。間近で見る本物のお祭りの熱に当てられて、私はその日、ひどく衝撃を受けました。

それから二年後、「やないづの家宝展2021」で柳津町のお祭りや年中行事を取材することになって、あの夜の感動は度々繰り返されることになりました。異郷人で、神仏に馴染みのない私にとって、神さまや祈りが生活に根付いた柳津町と出会える「やないづの家宝展2021」の聞き取り調査は、何度となく繰り返しても、そのどれもが新鮮で、貴重な体験でした。出生地の冷たいコンクリートの神社にはいなかった、あたたかな神さまの存在を、この町では人々の想いを通じて確かに感じることができま

そうした取材の中で、町の人々のお話を聞いていくうちに見えてきたのは、今までの行事に対する「なにか神秘的ですてきなもの」という捉えようのないイメージを覆すものでした。先人がつないできた行事を地区で協力して、欠かさずに続けていく。昔と今を、人と人をつなぐために——柳津町の行事では、いつも老若男女のあたたかな笑い声が響きます。「みんなと話せるのが楽しい」と、燃え盛る歳の神の傍らで御神酒を酌み交わしながら、話してくださる町民の方もいました。行事は、純粹な神さまへの祈りがつなく、人々の交流の場だったのです。そして、そのかけがえのない交流の場が存続の危機にあることも、お話を聞けば聞くほどに、切実に感ぜられました。地域に広がる過疎化と、それに追い打ちをかけるかのように訪れたコロナ禍。令和三年もたくさんのお祭りや年中行事が中止、縮小となりました。それでも、なんとか行事を続けようと尽力する人たちがいます。「やめてしまうのは簡単だから」。今にも途絶えそうなこのつながりは、今、人々の強い思いだけでやっと続いているのです。

そんな現状を目の当たりにした私たち地域おこし協力隊が、地域の美術館でできることはなんなのか。実際に柳津町で暮らす私たち地域おこし協力隊は、町の人々のそばでその声を聴き、想いをすくい上げることが出来ます。美術館は、その目に見えない声や想いを形にして、伝えることができます。その試みが、「やないづの家宝展2021」の成果展示であり、当報告書です。

柳津町は役場がある柳津地域から、三島町をはさんで山深くに位置する西山地域まで広がり、この広大な町は多種多様な地区と、伝統や文化を有しています。町外はもろろん、町内でも、他の地区でなにをやっているのか、そこにどんな想いがあるのか、知られていないことが多いのではないのでしょうか。私はそんな町の中の人にこそ、この土地にある「やないづの家宝」たちを知ってほしいと思っています。

知るだけでは、なにも変わらないかもしれません。しかし、知らなければ、このかけがえのない「宝物」たちは、人知れず失われてしまうかもしれません。今まで神さまを知らなかった私は、この柳津に来て初めて神さまと、それに集う人々の祈りや想いに触れ、それらを残したいと強く思うようになりました。この「知る、伝える」という行為が、大切な地域の「宝物」を残す一歩になれば、と願ってやみません。

小池勇一さん

「七日堂裸詣り」



「七日堂裸詣り」は、一月七日に福満虚空蔵菩薩圓藏寺で行われる年中行事。柳津町の数ある祭祀行事の中でも、最も有名な一つかもしれません。

七日の晩、柳津町の各地の旅館やお店から、下帯を締めた大勢の男たちが雪の中を駆けていきます。冷たい石段を裸足で踏みしめ、お堂の中を熱気で満たし、大声で競い合いながら、大鯨口を目指して綱をよじ登る裸の男たちの姿は大迫力。

なぜこの日、柳津町の男たちはこんなことをするのか。実は、一年で一番静かな晩を狙って宝照の玉を取り返しに来るといわれている龍神を脅かして、追いつくためなのです。宝照の玉はその昔、村にはびこる疫病や不作を退けるために、弥生姫という人物が只見川に住む龍神から手に入れたもの。この地に再びその災禍が訪れないように。そんな願いから「七日堂裸詣り」は続けられてきました。



裸になって参加した信者たちには、悪魔退散・幸福来訪・無病息災を表す三百六十五本の「牛王の矢」が授けられます。

また、この「七日堂裸詣り」で旦那さんが使った「下帯」を奥さんの腹帯にすると、安産になるといふ言い伝えが。

「七日堂裸詣り」は、まさに息災を願う柳津町の人々にとって重要な行事なのです。

柳津名物のあわまんじゅうで有名な小池菓子舗の勇一さんも、半世紀以上ずっと「七日堂裸詣り」に参加し続けています。コロナ禍となった令和三年も、「自分一人でも参加する」と強い男気を胸に下帯を締め、雪の参道へと向かいました。中止にするのではなく、どうしたら続けられるのか。新型コロナ対策の一環で、たったの十人で行われた「七日堂裸詣り」ですが、そこに込められた想いや願いはひと際強かったのではないのでしょうか。





■取材日時

二〇二一年一月七日(木)

■場所

柳津町岩坂地区

■インタビュイー

小池 勇一 「小」 岩坂地区在住

タニさん 「タ」 新潟からの参拝者

勇一さんのお孫さん「孫」

柳津観光協会員 「観」

■インタビュアー

我妻 泉香 「我」 地域おこし協力隊

虚空藏様つちゅうのが 盛り上がってればね

「小」うちの孫も、男二人、それも去年は一人出て。あと甥っ子もだし。だいたい去年はね、うちから二十四、五人か？毎年、みんなやってるんだけど。子どもがね、去年は五、六人いたの。だけど、今年はない……このご時世だから。やっぱりね、肅々とね、町内だけで限定になったので。それはそれで私、良いと思う。こういうご時世の中で、続けてやるんだってということ。まあ、賑やかでなくても、それにはその意味があるのかなあっていう風に思うし。私もそれこそ約……五十年か、半世紀だな！歳わかちまうけど(笑)。半世紀、ずーっと続けてっから。

「我」欠かさずに毎年？出てらっしゃる？

「小」欠かさず、そう。何年前までは、私

も観光協会の会長やってたりした。やっぱり、

七日堂裸詣り、それに虚空藏様つちゅうのが盛り上がってればね。虚空藏様の行事で賑やかになれば、我々も良くなるしね。そう思った思いでね、絶えずやっております。今年はこのようにコロナ禍の中でこれを続けてやるっていうことが、一番私、大事なことだと思う。

だから、人数の多い少ないにかかわらず、続けてやるっていうことが意味のあることだと思う。まあ、お寺としては、ずーっと例年通りやるんですけどというのがあってね。ただね、それに参加するしないは、個々の意志であるね……まあ色々、みんな観光協会中心になって、色々したんだけど。そんなときにね、「私は一人だって参加します！」って言ったら、

今あの、山内観光協会会長さんが、「いやあ……私、小池さん出るんだったら、私も出ます」って。だから、人数はどうであれ、今の山内会長と、二人だって良いんじゃないのって(笑)。そういう中であったり。観光協会はコロナ対策しっかりした中で、その中で続けてやるんですよ。私も二週間前から、検温して。そうして、ふんどしと、下帯で。手拭いと、マスクつけて。

「我」それ(下帯)はご自分で締める？

「小」これね、いつもタニさんって方が新潟から。あの方もね、もう約十年以上になるか

な？二十年近くになるかな？うちから、何年前までは一緒に、裸になって参加してやってたんだけど。

「我」え！？新潟からわざわざ？すごい……

「小」そうだよ。この七日堂裸詣りって、新潟……山形？とか、その辺から来るお客さんが多いんだよ。お客さんっていうか、まあ信者だべな。地元の町内の人だけっていうんじゃないくて、会津、福島周辺のね、そのお詣りにね、多いんです。そういうあれがね、昔からあんだよ。去年もね、二十四、五人、全部ひとりでね、ふんどし締めるんだよ。もう大汗でね(笑)。今頃……もうちょっと前からやらないとね。

「我」そうですよね、間に合わない。

「小」七時頃からやんねえと、一番鐘が八時か？八時半。今回は特別に八時五十分が一番鐘。私も四十五分頃。

「小」信仰心でね、山形の人もいれば……昔、講中つつうのがあってね。柳津の福満虚空藏尊の講中に入ってる新潟、山形の人がみんな来るってこと。で、私たちの子どもころ、ウン十年前はね？昔は本当にね、夜中の十二時くらいからはじめる。七日の、今日の十二時。それが本当の時間帯なの。七日堂裸詣りのいわれってわかる？

「我」あの龍を追いつ出すための？

「小」そうそうそう。宝照の玉を守ってる。よって、その柳津で、まあ一番静かなときは、寝静まった一番静かな日はって聞いたんだな。それで、答えたのが一月七日の十二時くらい、まあ夜中だということ。で、そのときに龍が来る前に、裸になってみんなだわっしょいわっしょいやって、そして玉を守ってるっていうのが、本来の七日堂の姿なだけ。まあ、何年前から、八時半からっていうことになって。

「我」そうなんです。当初は本当に真夜中にやって？

「小」真夜中にやって、人がどしどし来るから。見に行きたいよな？みんなわっしょいわっしょいやってるから。そしたら親にさ、「子どもがいると、潰されるから行くな」って怒られたの。

「我」そうですよね、人がいっぱいだから……

「小」いっぱい。昔のは、お堂の中裸の人が多いの。見る人は外から見ただ。

「我」見る人が入れない状態？

「小」そのくらいいっぱい。今はあれ、例年、去年あたりもそうなんだけど、二百五十、六十名か？去年参加したの。で、それと見物客いれて、ちようどいっぱいになるから。だからね、昔は五、六百人いたんじゃないかなあと思うよ、私。裸の人がね。もつといたかなあとは思っただけ。そのくらいいであれだったから、「危ないから行くな」っていうような親からの教えであつたんだよな。それでもさ、見に行きてえからさ。隠れてずーっと行って

「小」信仰心でね、山形の人もいれば……昔、講中つつうのがあってね。柳津の福満虚空藏尊の講中に入ってる新潟、山形の人がみんな来るってこと。で、私たちの子どもころ、ウン十年前はね？昔は本当にね、夜中の十二時くらいからはじめる。七日の、今日の十二時。それが本当の時間帯なの。七日堂裸詣りのいわれってわかる？

「我」あの龍を追いつ出すための？

「小」そうだよ。この七日堂裸詣りって、新潟……山形？とか、その辺から来るお客さんが多いんだよ。お客さんっていうか、まあ信者だべな。地元の町内の人だけっていうんじゃないくて、会津、福島周辺のね、そのお詣りにね、多いんです。そういうあれがね、昔からあんだよ。去年もね、二十四、五人、全部ひとりでね、ふんどし締めるんだよ。もう大汗でね(笑)。今頃……もうちょっと前からやらないとね。

「我」そうですよね、間に合わない。

「小」七時頃からやんねえと、一番鐘が八時か？八時半。今回は特別に八時五十分が一番鐘。私も四十五分頃。

「小」信仰心でね、山形の人もいれば……昔、講中つつうのがあってね。柳津の福満虚空藏尊の講中に入ってる新潟、山形の人がみんな来るってこと。で、私たちの子どもころ、ウン十年前はね？昔は本当にね、夜中の十二時くらいからはじめる。七日の、今日の十二時。それが本当の時間帯なの。七日堂裸詣りのいわれってわかる？

「我」あの龍を追いつ出すための？

「小」そうだよ。この七日堂裸詣りって、新潟……山形？とか、その辺から来るお客さんが多いんだよ。お客さんっていうか、まあ信者だべな。地元の町内の人だけっていうんじゃないくて、会津、福島周辺のね、そのお詣りにね、多いんです。そういうあれがね、昔からあんだよ。去年もね、二十四、五人、全部ひとりでね、ふんどし締めるんだよ。もう大汗でね(笑)。今頃……もうちょっと前からやらないとね。

「我」そうですよね、間に合わない。

「小」七時頃からやんねえと、一番鐘が八時か？八時半。今回は特別に八時五十分が一番鐘。私も四十五分頃。

「小」信仰心でね、山形の人もいれば……昔、講中つつうのがあってね。柳津の福満虚空藏尊の講中に入ってる新潟、山形の人がみんな来るってこと。で、私たちの子どもころ、ウン十年前はね？昔は本当にね、夜中の十二時くらいからはじめる。七日の、今日の十二時。それが本当の時間帯なの。七日堂裸詣りのいわれってわかる？

「我」あの龍を追いつ出すための？

「小」そうだよ。この七日堂裸詣りって、新潟……山形？とか、その辺から来るお客さんが多いんだよ。お客さんっていうか、まあ信者だべな。地元の町内の人だけっていうんじゃないくて、会津、福島周辺のね、そのお詣りにね、多いんです。そういうあれがね、昔からあんだよ。去年もね、二十四、五人、全部ひとりでね、ふんどし締めるんだよ。もう大汗でね(笑)。今頃……もうちょっと前からやらないとね。

「我」そうですよね、間に合わない。

「小」七時頃からやんねえと、一番鐘が八時か？八時半。今回は特別に八時五十分が一番鐘。私も四十五分頃。

いつもタニさんって方が 新潟から

さ。見て、「ああ、すごいなあ」なんてところから。子どものころ、そういう風に思ってた。「おっきくなったら、俺も参加しよう」って。そういうな、そういう思いがあつて。ずっと、五十年以上になつて思う。半世紀以上からずーっと、して。今ウン十歳にもなつたけれど、今日あたり、こんな寒い中ね。

「我」そうですよ、吹雪の中……

「小」吹雪の中！ふんどし一本で行くべつていうんだから。そういう気持ちになれるってことは、やっぱり、そういうことかなあと私は思う。

私ね、それこそ 丑年なんですよ

「小」そしてあとは、柳津の福満虚空藏尊。お寺さんへの、そういうたね、思いをね……私ね、それこそ丑年なんですよ。丑年だから、

そしてまた、丑寅まつりだから。私、この丑寅まつりってのは思い入れがありまして。前回の十二年前の丑寅まつりの実行委員長だったの。だから今回は、今年はもう、コロナ禍の中でも「私一人だつて参加します！」っていう思いで言ったんです。それからこう、始めて。十人、参加する。人から強制されて誘われて、参加するもんでなくて。やっぱり自分の心からっていうような、そういう気持ちになるのが大事ななあと思う。この歳になつてもね、そういうなんというかね、気持ちだけはね、なんとか若い人に負けないように。

息抜きでね、やるんですけども。やっぱりね、この歳になつてくつとね。世の中、色々こうね、見えてくるの。見えてくると、残りの自分の人生のこと考えつと、今？今が大事なんだ。自分の体を守りながらっていうかね。

「我」そうですね、それが一番。

「小」そう。子どもたちが一人前になつてね、それまで。まあ、私の夢はね、孫と一緒に出張販売、あちこちいつも行ってんだけど。孫と一緒に出張販売、やれたら良いなあって。それまで、孫が育つまで。頑張つてやろうかなあって。そんな思いでいるし。そしてまた、今日みたいな七日堂裸詣りも、ちゃんと、参加して。今年ね、丑年だからね。なんでかんでつうことで、覚悟しました(笑)。

祭りじゃない やっぱりお詣りな

「小」あとはね、福満虚空藏尊の歴史ある行事をつなげていきたいなあっていう思いです。それで今、どこも中止になつてつべつた？その中で、やっぱりこれ、少人数でも続けてやるつうことに、私はその信仰心の意味があるんじゃないかなあって。ある程度ね、わっしょいわっしょいわつてき、綱に上つてさ、やるのも、それも一つの七日堂の姿かなあと思う。十人だからさ、その辺を昼間、山内会長と話したんだけど。会長ね、まあ上になつても、綱上になつても、お賽銭のお詣りでね、広いところあるのよ。そこで、

みんな輪になつてわっしょいわっしょいと、回ってるだけでも良いんじゃないのって。「そうしますか」なんつって(笑)。

「我」騒がしくすれば良いんですもんね？

「小」そうそうそう。賑やかにすれば良いんだから。そして、あそこで守ってれば良いわけだから。あとは、観客っていうか見る人が何人来つかわかんないけども。みんなそれぞれに、観光協会も役員さんも、このご時世の中で対応策やつて。検温したり、リストバンドやつたり。そして、中止にするんじゃないかと、どうやつたら続けていかれつかつていうことを、やっぱりみんなだね、協議して考えて。で、特にこういう信仰的なものを続けていくべきだなんて私は思う。

「我」そうですね。続けることが大事。

「小」まあ、方丈様の理解があつてね。今年の丑寅、例年通り、いつもの通りやるんです。だから、そこで周りも参加する。毎年やることを、肅々と続けていくことが大事なんです。まあ、奇祭つうあれがついてんだけど、祭りじゃない。やっぱりお詣りな。そういう趣旨だから。十人しか今回参加しないけど、なんと報道関係は九社来る。九社。

「我」九社も来るんですか？ほとんど一人一社ずつきますね。

「小」マンツーマンだ。九社。どうすんだべな(笑)。テレビがね、五社くらいで、あと新聞が何社かな。賑やかになつてるところだけじゃなくて、こういうご時世の中で少人数でもこうやつて続けてやるんですよっていうこ

とが、そういうご報道してもらいっつち。かえつてそのほうがね、七日堂裸詣りっていうあれが伝わっていくんでねえかなあって私は思う。

「我」お祭りとしての面だけではなく、お詣りっていう面の。

「小」そうですね。それを続けていくんだつていう。まあ、どこもね、みな中止だからね。んだから、赤べこの発祥地の、赤べこもほら、今のコロナの、疫病の収束祈願が赤べこだったから。その丑年の年ですることを、圓藏寺さんは、続けてやるつてことにまた、意味があるんでねえのつて。そうして自分も丑年だしね。なおさら、私は一人だつて参加します！つて(笑)。

「我」かっこいい、男気が。

下帯かなあ。正装だから

「我」今回の裸詣りの、特徴というか魅力的なものなんでしょつていうのを聞きたいです。「小」そうですね。私ね、ずーつと七日堂裸詣りやったときから、元朝詣りとか初詣とかしてないの。七日にお詣りすつから。

「我」それは良い。特別な初詣ですね。

「小」そうそうそう。裸でお詣りするんだから(笑)。それはしなくて良いように、と思つて。そういう思いと……あれ、祭りではないね。ひとつ基本はお詣りだな。奇祭つていう、柳津のそれだつて言われてつけど。やっぱり、その勇壮な、裸で下帯つけて、でけでけ

でけってわっしょいわっしょいやる、さ。その、なんつうかな。気構えっていうか。そういう、男気があるような。そういうところに魅力を感じるかな。

「我」なるほど……男気が魅力。あれですね、下帯も下着って概念でなくて、あれが正装なんでもんね。そう聞きました。だから、ふんどしとは言わないって。

「小」まあ、ふんどしっていうよりは……下帯かなあ。正装だから。あれ、私締めつとね、ちよっと窮屈だけど。お尻のへんがくぼんじやって(笑)。だけど、ピリツとする。

「我」気が引き締まる？

「小」引き締まる。そうそう、そういうこと。

「我」結び方とかも決まってるんですか？

「小」決まってるし、まあ、さまざまだけど。うちは、ずーっと同じ。一応、あと十五分くらい過ぎたら締めつかなあ。中の二階で締めつから。いつも二十四、五人も締めつとさあ、もう時間かかるんだよ。その前に体清めてさ。そして、風呂入ってさ。そうしてから、行く。

「我」清めるってのは、お風呂入って、他になにかやるんですか？

「小」あと、塩。塩を、けがしないように体にすり込む。

うちから上がらっしえ

「小」この方が新潟で、タニさんっていつて、ふんどし締めてくれる。

「我」あ！タニさん。こんにちは。

「タ」今年は楽ですよ、人数少ないから。去年なんて二十何人締めて、汗びっちゃんこなっちゃった。

「小」もう……タニさん、何年あれだっけか？うちに来てずーっと。

「タ」私？私もう、十七年。

「小」ここ二、三年上がってねえけどな。

「タ」いや、うん、あの……心臓を、心筋梗塞やってからドクターストップかかって(笑)。

「小」で、もう一人の方は、ずっと前から、タニさんと同じころからかな？兵庫県の方。

「我」兵庫県から！？

「小」そう。兵庫県から毎年来てんだよ。毎年来て、最近は裸になって……最近はねえなあ。

「タ」ええ。前、裸になってカメラ回してたら、もう裸にカメラはだめって。

「小」その方も、偶然うち来て。じゃあどうぞっつって、もう十何年毎年。

「我」新潟と兵庫。そんな遠くから……

「小」まあ、色々いっぱいだよな？

「タ」そうですね。ここで知り合った人いっぱいいる。

「小」それでまあ……なんでタニさん。なんであの七日堂で裸になって行くんですかって。裸になって七日堂裸詣りに参加するって

いう、そういう気持ちになるつうことはどういうことっていうか。なにがそういう風にさせるかなって。やっぱり利益？

「タ」いや、利益っていうか、自分自身健康であり、家族が健康であり、まあ一つのお祈りのなものがあるのかなってという気はしますね。

「小」私もそれと同じようなことさっき言ったんだけど。

「タ」最初、出たでしょ。そしたらね、「あれは二年やんない」と利益ない」って。

「我」え！？そうなんですか？

「タ」「三年やんない」と利益ない」って。毎年そう言われて。もう十何年(笑)。

「小」本当にね、色んな方うちから。ちよっと来て、「七日堂どっから参加したら良いですか？」って。「じゃあ、うちから上がらっしえ」なんつって参加して、そういう人いっぱいいるの。ほんだら、色んな人いて。今も言ったように、三年続けて参加すると、願い事が叶うからさっつって。子どもできないって人も、三年続けてやったら、その次の年は子どもできたし。嫁さんほしいって人も、三年やったら結婚なさったし。そういうたね、思いついていうのはあるみたいよ。やっぱり、自分がこの寒い中、参加してさ、まあ言えば大変だよな？大変な思いの中を、そうやってやり遂げたっていうことはさ、自分のそういつた思いも叶うっていう、それにつながっているんでねえかなあ。自信がつくんだよな。

「我」確かに。あれがやれたんだから、なんでもできそうみたいいな。

「小」そうだと思う。だから、そういうのも一つの七日堂裸詣りが、まあ禅宗ではねえけど、禅の思いが……だから、やっぱりやり遂げるっていうね、ことが大事なかなと思う。

その役が私のほうに回ってきちゃった(笑)

「タ」昔ね、私の前の代で鈴木一朗さんって野球で有名な……と、同姓同名のじいちゃん。その方がね。私が参加してる時、私も締めてもらったの。

「我」鈴木一朗さんに？

「タ」そうそうそう。あの方が八十八でね、何年前だ？五年くらい前に亡くなられた。したらその役が私のほうに回ってきちゃった(笑)。一朗さん亡くなって、もう何年になります？八十八まで頑張られたんですよ？

「小」そうだよな。六、七年になっかな。

「タ」もうそんなになりますか？五年くらいなもんかな、と思つて。でもやっぱり八十八になるとね、最後キュツと締めるでしょ？力がないから。それをやってくれと言われて。

「我」じゃあ、そのときからもう引き継ぎ始めてた？

「タ」まあ、引継ぎっていうか。私も昔、子どもの時は新潟ですから。海で泳ぐときはふんどしで泳いだ。子どものころね。だから、ふんどしの締め方は知ってたから。で、かみさんは向島(※1)だから。あの三社のお祭り(※2)とかでね、ふんどしはもう、しよっちゃん締めてた。向島のお祭りでも三社のお祭りでも、みんなふんどしですから。あそこ……ほら。白のふんどしもあるけども、向島はね、町内会の市松模様のね。あそこはね、手拭い屋っていうか、染物屋が山ほどいるから。だから、

好きな色に町内ごとに染めてね。ふんどし見ると、この町内かってわかるわけよ。

「我」ふんどしにも染めがしてあるんですね。「夕」昔の小紋の柄とかね。そういうものを染め抜いてはっぴにするの。

「我」お洒落……良いですね。じゃあ、決まりはないんですね。白じゃないといけないとか。

「夕」決まりはない。向島は町内ごとで違うところでふんどし仕立てるから。ここはもう、白いふんどしでなきゃ。ね、会長？

「小」そう。「夕」色物のふんどしはダメ。柄も色もダメ。白だけ。

今の若い人なんて ふんどし締めたことない

「夕」今年は、たった一人で楽させてもらった。

「我」毎年二十何人も。

「夕」うん。もうだから二十何人も締め上げちゃうと、もうこっちも力果てちゃうって。

「我」そうですよね。本当にもう、こうグツて力いるから。

「夕」そうそう。で、あそこが緩んじやうと結局……ね？ポロリになるからね(笑)。

「我」結んだ人がポロリしたことはありませんか？

「夕」それはない。ギユウギユウに締め上げるもん。ギユウギユウに締め上げると、今の若い人なんてふんどし締めたことないから。「うっ、玉が潰れそう……」って。苦しいって(笑)。

「我」そうですよね。着物とかと違って、こ

ちが締まるんですもんね。普通、お腹が苦し

いってなるけど……

「夕」そうそうそう。お腹じゃない。股間が苦しい(笑)。

【一月七日午後八時半 着替え後】

「我」わあ、良いですね！すごい、かっこいい。

「小」ばんざーい、頑張るぞー！今年は頑張るぞー！

「我」これで、鉢巻きと……

「小」二重結びにしないと、途中で落ちちゃう……よし、と。あとはマスクをやって。

「我」で、完成ですね？タバコはそれでも持つんですね(笑)。

「小」タバコは持つ。

じゃあ、俺、先歩って行くぞ

「我」こんにちは。

「孫」なにしてんのかと思ったら、はだかんぼになつてきちゃった！きもい！

「我」じいじかっこいい？

「孫」じいじかっこよくないけど、俺もかっこ悪いよ。

「我」そんなこと！(笑) かっこいいよ。

「小」こっから、前にさ。御神酒と塩用意し

たけつど。それで塩をね、塩を体にすり込んで、それから行くの。例年の年だと、結構店

「我」お店の前でみんな集まっていますもんね。例年。

「小」九時から御祈禱始まって、二十分で終わってから……じゃあ、行きますか。こうやって行くとき、八時半だからまだ早いかなって言うんだけつじよ。結局みんなそこで裸になつと、「行くべえ、行くべえ」って。結局。

「夕」寒いからね。

「小」そう、行ったら誰も着いてないの。何回かあるよ。早すぎたってな。五分早すぎた。

「早かったべえ」って(笑)。

「我」ちょうどぴったりくらいに行かないと、きついですね。

「夕」ぴったりかちよつと遅れ気味。そうすつとあのお堂の中がね、人熱(ひといき)れであつたまってるから。

「我」でも今年は、人熱れないですもんね。

「夕」ないねえ。

「小」ねえ、なじよ(〓)どうなんだか。今年は、周りぐるぐる回つてんだ。じゃあ、行きま

しょう。

「夕」ま、ケガしないように。

「小」はい。大人しくしてます(笑)。

「我」勇一さん最後に、意気込みを一言お願いしても良いですか？

「小」うん？意気込みはなあ、はい。女は愛嬌、男は度胸！えい！

「我」ありがとうございます！

「小」じゃあ、俺、先歩って行くぞ。タニさん、旅先気をつけて。

「夕」会長も気をつけて。それじゃあ。

ご苦労さん。俺一人だ

「小」やっぱ降ってきたな。

「我」いやあ……コート着ても寒い。すごい、吹雪！前が見えない。

「小」ここをみんな、わっしょいわっしょいって行くんだだけよ。

「我」やっぱ人通りもいつもより全然少ないですよ。

「小」うん、この状況だもん。

「観」お疲れ様です。

「小」なんだ、ここ用意してたの？俺一人しかいねえべ。ご苦労さん。俺一人だ。

「観」さすがだ会長。男の中の男です、やっぱ尊敬する。

「小」お前も男だ、大丈夫だ。

「観」いやいやいや、本当は上がちいぐれえの気持ちだつてこと……すごいよ。会長、がんばって！本当、尊敬してつから。

「男衆」わっしょい！

「小」わっしょい！

「孫」わっしょい！

「客」がんばれ！

「孫」わっしょい！

「客」がんばれ！

※1 向島(むこうじま)……東京都墨田区向島

※2 三社祭……東京都台東区浅草の浅草神社で毎年五月に行われる例大祭のこと。

船木キミ子さん

「団子さし」



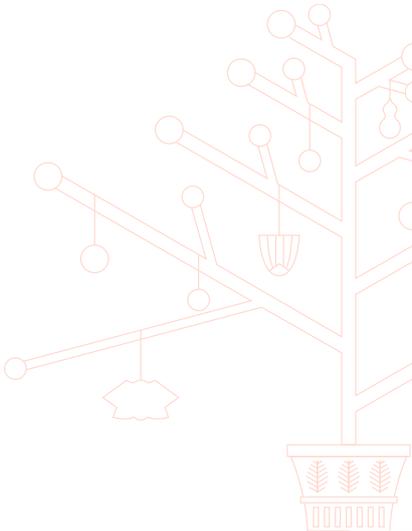
「団子さし」は、「団子の木」とも呼ばれるミズノキ(ミズキ)の枝に、団子や鯛や恵比須様、巾着などの色とりどりの最中飾りを吊るし、五穀豊穡や金運招福を祈願する小正月(一月十五日、または一月十五日を中日とする三日間)の行事です。

この行事に欠かせないミズノキは、枝先が美しく紅色に色づいており、その名の通り、早春の芽吹きときに土中から大量の水を吸い上げます。そのためにこのミズノキは、なんと火事になっても燃えにくいそうで、その枝を使うことには火伏の意味も込められているのです。

さらに、団子さしに使ったミズノキを竈(かまど)にくべて炊いたご飯を食べると受験に受かるという、学業成就の祈願にもなるんだとか。五穀豊穡、金運招福、火伏、学業成就……このたった一本の枝に、たくさんの願いが込められています。



団子をさした枝は、「二十日の風には当てるな」と言い伝えられており、十九日の夕方にはしまっけてしまいます。その後は団子汁などにしておいしくいただきます。



かつて斎藤清先生も訪れたことがあるという「そば処ふなき」のキミ子さんは、今年毎年十二月頃になると、自分の家の山に生えているミズノキから枝振りの良いものを手折ってきて、「団子さし」を行っています。



昔は、今よりもたくさんさんの団子をさしていたそうです。そして、キミ子さんは度々枝から団子をもいでは炙って、子どもたちの帰りを待っていました。この腹持ちの良い団子は、元気に遊びまわる子どもたちのおやつに最適だったのでしょう。



■取材日時

二〇二一年一月十三日(水)

■場所

柳津町安久津地区

■インタビュイー

船木キミ子 [船] 安久津地区在住

長谷川静江 [長] キミ子さんのご友人

■インタビュアー

我妻 泉香 [我] 地域おこし協力隊

谷野しずか [谷] 同上

団子の形も丸くだけじゃなくなってる

「我」これは何由来の行事なんですか？仏様とか、お寺関係なのか、神社関係なのか。何系なんですか？

「船」団子さして、もう今は簡素化になっただけだ。この団子の形も丸くだけじゃなくなってる五穀豊穣っていうか、作物の豊作祈願。きゅうりであったり、茄子であったり、その形を作るの。団子で。

「我」団子で？かわいい。

「船」巾着って行って、お金の財布。そんなの作ったり。お金貯まるようにとか、かぼちゃが良くなるように、とか。

「我」本当に好きな作っちゃうんですね。おもしろい。

「船」そうそう。色んな形を昔の人たちは作ってたんだけど、我々もう、めんどろくさくなっちゃってます。

みんな、家族が全部集まってる

「我」子どもたちが作るって聞いたんですけども、昔は子どもたちが家々を回って……

「船」そう。みんな、家族が全部集まって、そして手を出して、作ってたのな。だから今、保育所なんかは保育所なのあれで。ここさ今度は色んな食紅いれて団子に色つけて、まあ、うちあたりは後でこれ食べっから、そこまでしないで飾り物でその色はやってんだけっじよ。

「我」何年前からやってるんですか？生まれ代から？

「船」そうそう。もちろん、もちろん。

「我」もっと前の代から？

「船」前からやってるよな。それがもうだんだんだんだん……年寄りも少なくなってる、みんな勤めになって忙しくなったから、もう簡素化で。勤めの人は難しい、都会の人とか、忙しいから。でも、無理にさせるものでもないから。私たちは農家やって、今は店やって、家にいてできるけど。続けてほしいとは思うけどね。

「我」みなさん、この日にやられるんですか？

「船」そうだな。そしてまあ、そこによって昨日やるうちもあつけども、二十日の朝飯前にとっしてしまえっていうな。二十日の風には当てんなっていう、どういう意味かわかんねんだけども、昔からそうやって言われてんだよな。二十日まで飾っても、置かないっていう。

「我」この十三日から十九日の期間でないのダメなんですか？

「船」十三日にやんなきゃなんねえから。日曜にやるってのもな、難しいからな。小正月っていうのか？十三日にやって、二十日の風に当てんなっていうから。十九日とかにはしまっちゃう、団子汁にする。

「長」女正月なんてもいうけどね。

「我」女正月？

「長」年末からずっと女の忙しいから、その日はなにもしないで、座ってご馳走出るの待って良いっていう日。やってもらったこととはないけど(笑)。

「我」二十日ってなんなんでしょうね？小正月って十五……？二十日まで？十九日にしまうなら、歳の神では燃やさせませんよね、他の正月飾りみたいに。

「船」団子の木は燃やさねえな。

「長」燃やさねえ。ミズノキっていうんだけど、これ、細かく切つてな。昔は電気とかガスじゃなくて竈でご飯炊いてたから。

「我」竈にくべて？

「船」ミズノキで炊いた米食べると、受験とかに受かるっていう。

「我」すごい、学問祈願まで……なんでもですね。

「船」んだな、五穀豊穣とな。だから、団子の木を歳の神で燃やすってことはねえな。

「我」そっか、じゃあ歳の神で燃やすのお餅は団子の木関係ないんですね。鏡開きのお餅とか……？

「船」鏡開きの餅は硬くて焼いて食わね。

「長」んだな、油で揚げるとかな、水餅とかかな。

「我」水餅？

「長」水につけて、ずっとそのうち柔らかくなるからそれ食うの。まあ、いるよ？鏡開きの餅ストーブで焼いて、ガリガリッて煎餅みたいに食べる人もな。好き好きだな、若い人ならな。

農家だけの行事だ

「我」これは毎年欠かさずやりますか？

「船」そう。

「我」すごい。大変ですよな。

「船」でも、この倍くらいの粉をやって作ってたんだよ。だんだん少なくなってる。

「我」もっと団子の木もおっきかった？

「船」うん。だから、食べ物いっぱい……昔は小屋とか蔵とか玄関口に一枝ずつ団子をして、飾っておいたんだよ。

「我」どこの家庭でも？

「船」そう。今はやってる人が本当に珍しくらい。やってついたら、飾り物だけで団子は結局やんねえで、飾り物だけ飾って、それで終わるくらいだから。こんな粉練って、団子作ってなんてのはあんまりやってないと思う。

「我」これは会津だけではないんですか？

「船」どうなんだべ、静江さん？子どものころやった？

「長」やんない。

「我」やんないんですか？

「長」違う。うちは農家じゃなかったから。

「船」農家だけの行事だ。

「長」うちは元々よそから来たもんだから、

その土地にずっといたもんじゃなからわかんないんだけど。

「我」農家さんがやることなんです。

「船」そっだな、やっぱ五穀豊穡だな。だって、作るものがやっぱそういうあれだから。

よく昔の人たちは 作ってたよなあ

「船」(生地をこねながら) 団子の粉と米の粉を半々ずつ熱湯で練る。

「我」熱湯なんですね。

「船」だから面の皮と手の皮厚くなっちゃう(笑)。こうやってひとつの塊に作んのな。で、このこね方が固いと最後に仕上がった団子も固くって、柔らかいとまた、始末に困るだけですよ。

「我」それはお湯の加減？

「船」加減。

「我」いつもお一人くらいでやられるんですか？
「船」やっぱ量……普通、家庭はこんないっぱいやんないから。うちは商売だからいっぱいやっけども。

「我」わりとこねなきゃいけないですね、大変ですね。

「長」こねたほうがうまいから、後になっても。

「船」そっそう。あのほら、粉が半々ずつ入ってっから。米の粉と。

「我」均等に混ぜるように。菊練りっぽいですね。

「船」そう。蕎麦粉もこうやって練る。同じ

ようにやるのな。

「我」空気抜く感じで。

「船」そっそう。

「我」茹でたりは？

「船」茹でる、これから。耳たぶぐらいの柔らかさにして。うちは丸くばっかりしか。まあ、たまにインゲンのまねしたり。好きな動物であつたり、なんでも良いの、本当に。犬の形をやつたり。

「我」決まってるわけじゃない？そっいえば鶴とか亀作るのが多いって聞いたんですけど

「船」そっ。

「我」(猫の形を作りながら) あったかい！猫ちゃん……

「谷」猫ちゃんですか？

「船」粘土細工だわい(笑)。

「谷」わあ、すごい。二個同時に？

「長」(二個ずつ団子を丸めながら) めんどくさくなっちゃって(笑)。

「谷」こうやってちぎったものを丸めて……

「船」今度は丸めて、これを茹でてく。茹でないところは半分生だから。

「我」食べれない？

「船」うん、食べれない。

「我」(星形の団子を作ろうとして苦戦している)
「谷」なんか……どうなるんですかね、これ。難しそうですね。

「我」難しい……

「船」意外と難しいだよ。その作り物って。

「我」あんまこねても乾いてきちゃいますもんね。

「長」茹でっから、こんな角なんて……

「我」なくなっちゃう？

「長」だから、大雑把にだいたい形の形で良いの。
「我」(鶴の形を作ろうとしながら) 鶴って？鶴

自体が身近なものじゃないからわからない……

「船」なあ、本当に。よく昔の人たちは作ってたよなあ、色んなの。

「長」亀だつたら、この亀甲に作って、少し上に飾りやったらば。

「船」切り込みをハサミなんか使って。

「長」そういうので良いんだよな。自分でだいたい、あ、これ亀だと思えば良いんだよ、

鶴だつて思えば良いんだよなあ。

「我」じゃあ、これは鶴。

「谷」鳩ですね(笑)。

「船」我妻さん作ったなんて誰も言わないから(笑)。

「谷」いや、でもすごい。お団子の形とってきれいですね、さすが。

「船」なかなかまああるくって、な？できないんだよ、本当。あとで、十六団子拾うか？

「長」そのほうが良いか。

「我」十六？

「船」十六個だけ枝にさして、仏様にお供え。

「我」そうなんです。全部さすわけじゃないんです。

「船」そっそう。

「我」巾着、巾着……(巾着の形を作ろうとしている)

「谷」壺になってますよ(笑)。

「船」巾着はな、こう。こうやって……中に

入れんだ。(薄く広げた生地で玉にした生地を包む)

「我」あー、そういうことなんです。確かに、そしたらちゃんと巾着になる。

「船」そっそう。ここさくると、紐の形をやって。本当はおつきくやんなんねえんけんじよ。理屈はこういうわけ。

「我」そしたらちゃんと巾着になる！

「谷」確かにそのほうが、っぽいんですね。

「我」あとなんだろ？縁起の良いもの……なんか思いつきますか？

「谷」うーん、牛？

「我」そっか、牛か。牛……

「谷」まあ、なんか赤べこの頭だけとか……

「船」ほら、茄子。

「我」わあ、すごい、茄子だ！そういうふうを作るんですね。かわいい。

「谷」すごいですね、あつという間に。

「船」(ハサミで溝を入れて、かぼちゃの形を作りながら) そんな似てねえな(笑)。

「谷」いや、でもへたがすごい。

「我」かぼちゃだ。

「船」もっとおつきくすなんねえな。やっつきはやっぱこの団子の大きさではちゅちええわい。まあ、丸くすっべ、あとは。そっだ、あと簡単にできるのはこれ。こういうふうにして、これは枝豆。

「谷」良いですね、すてき。

「我」枝豆はあれですか？子宝とか？そういうことではない？

「船」そっだべな、子孫繁栄だわな。

「我」(牛を作りながら)カピバラみたい……牛でーす。

「船」ああ、良い良い(笑)。牛、今年の干支だからね。

「我」もうだんだん(生地が)乾いてきてる。素早くやらなきゃいけない。ここらへん、小学校とかでもやったりするんですかね？

「船」小学校ではやんねえよな、保育所だな。この団子とかも全部、青だの黄色だのピンクだの色つけてな。それはそれで、きれいだけどな。今度はこれ終わって団子もいならば、その後、団子汁にして食うの。

「我・谷」おいしそう。

「船」削り節とお味噌で。

「我」絶対おいしい。聞いただけでおいしい。

仏様さ、十六団子

「船」足んなかったか？

「長」飾る分には十分だすべ？足りなかったらあとで足すから。

「船」十六分そっちで作っか。(別の生地をこね始める)

「谷」それは仏様の？

「船」仏様さ、十六団子。別に。でも、これ米の粉だけだから。

「我」十六団子は米の粉だけなんですか？

「船」いやいやいや、そうじゃないんだけども。いや、それで間に合うかなあとと思ったら、木

「我」十六って、本当におつきく。十六(から) 仏様用。私も丸めて平気ですか？

「船」どうぞどうぞ、丸めてください。

「我」仏様用だから。

「船」大事です。

「我」全然触り心地が違う。

「船」違う、うん。固い。米の粉ばかりだから。

「長」昔はこんなのでやってたんだべした。

「船」そっか、お団子の粉ってないから。

「我」そっか、お団子の粉ってないから。

「船」ない、今みてえな本当に。

団子の花が咲いたわい

「長」これ(茹でた団子)、水でやんの？

「船」うん、水でサッと。洗うと。

「谷」これ水に流すとツルツルに？

「長」表面の滑りが取れんの。あとはこれを、まだ熱いからちよつと冷まして、あとは木にさす。

「谷」なるほど……良い匂い。できたできた。

「我」わあ、(団子をさす木が)でかい。思ったより……

「船」この木っていうのは、ミズノキっていうの。ミズノキってのは、火事になっても燃えないんだって。ミズノキは。

「谷」へえ……なんだろう、ミズノキ。

「船」こっか、お団子を木にさしていく(熱いですか？)

「我」かわいい。

「船」そう、さしてみてください。

「谷」かわいい、良いなあ。すてき。

「我」昔、絵本で見た。モチモチの木？とかで見た、こっかいうの。すごい憧れました。あ、熱い。やつぱちよつと熱いですね。わりとギョツとさしちやつて良いんですか？

「船」そうそう、それでねえとストープ焚いてっから、乾燥して。

「谷」落ちちやいますよ、たぶん。

「船」そう。

「我」楽しい。クリスマスみたい。

「谷」確かに、飾りつけて感じが。すごいなあ、これ。きれい。

「我」なんかひな祭りみたい。

「船」取れちまった。すぐこの紙(団子飾りの紙紐)切れちまう。

「我」それは普通にスーパーとかで売ってるんですか？

「船」売ってるよ。かねか(町のスーパー)で。

「我」かねかに売ってるんだ！

「船」売ってる売ってる。

「谷」すごい。鯛となんだろう？ひょうたんとか……

「我」この平べったいの(団子飾り)なんですか？

「船」どれ？なんだろうな、これな。

「谷」桃と……なんだろう？

「船」なあ。巾着ではないし、UFOみたいな形の。

「我」銅鑼(どら)みたいな……あ、恵比須

様ですか？これ。

「長」そう、恵比須様とか色々あるでしょ。

「我」おめでたい。やつぱ飾りも食べられそうです。食べられそう見た目してる。

「長」そうだな。

「我」それまた違う飾りなんです、種類が。こっちは違う。張り子みたいな？

「長」そうそう。何年もあつから、何年も使ってたつから。色んなのがあるでしょ。

「我」飾りがカラフルだから、お団子が白くて良いですね。

「船」うん。だから団子白い。今はこの団子やらなくて、飾りだけで飾っておく家もあるだよな。団子はなかなか厄介だから。

「我」大変ですもんね。さす場所が……もうつける場所がなくなってきた。

「谷」わりと埋め尽くすくらいつけるものなんじゃないですか？

「我」この芽の部分は(団子をさすのは)ダメなんです。取るときにお餅に芽がくっついちゃうみたいです。

「船」団子の数より飾りの数のが多いわ。

「長」良いわよ。色つけることなかったわ。あと終わりだ。

「船」たくさん飾らった。本当に団子の花が咲いたわい。

「歳さいの神」



「歳さいの神（さいのかみ）」は、日本各地に伝わる伝統行事で、地域によって「塞さいの神」「どんど焼き」「左義長」など様々な呼び名があります。

小正月（一月十五日、または一月十五日を中日とする三日間）の行事ですが、地区によっては小正月に近い日の休日に行うなど、勤めの人が多くなった現代の生活に合わせ、無理のないように続けています。

行事の当日、山から芯材となる高い木を切り出し、その木に藁や茅（かや）、納豆づなどを束ねて歳さいの神の形を作りませす。

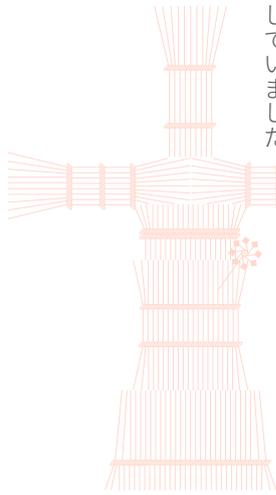
そこへ神棚、御幣（ごへい）、御札、門松、しめ縄などの正月飾りをつけ、夕方に点火し、豊作や豊漁、無病息災などを祈るのです。

また、厄年の人は献酒をしたり、歳さいの神へ最初に火をつけることで、厄祓いしとしていきます。さらに、この火災の方向によって今年の作柄を予想したり、また、この火で餅を焼いて食べると病気をしないという言い伝えもあります。



柳津町の中でも、円錐状に藁を束ねて作る地区、男女二体の人形を作る地区など、地区ごとに歳さいの神の形や行い方にはバリエーションがあります。

今回取材を行った檀ノ浦地区は、柳津町でも町営住宅が立ち並ぶ場所ですが、山深く伝統行事が盛んである西山地域からの移住者も多く、人々は手際良く歳さいの神を立てていきます。できあがった歳さいの神は、腕を広げて立つ人のような特徴的な形をしたもので、迫力のある大きさです。作り上げた地区の人々は、「これが一番かっこいい」と、誇らしげに話していました。



かつては数十人の子どもたちが参加し、賑わいを見せていた檀ノ浦地区の歳さいの神も、少しずつ参加者が減り、新型コロナウイルスの影響や雪の状況もあって中止にすることがありました。

しかし、そんな時も「歳さいの神、次はいつやるんですか」と、歳さいの神の開催を待ち望む人々がいました。

そんな声に応え、二年ぶりに開催された歳さいの神には、柳津町出身者だけではなく、柳津町に来たばかりの移住者や地域おこし協力隊も多く参加します。歳さいの神は、初めて柳津町にやってきた人々が、その文化や人々のあたたかさに触れる貴重な場なのかもしれません。

歳さいの神の日の夜、御神酒をいただきながら、あたたかな炎のかたわらで人々は語り、交流を深めていきます。地区は遅くまで賑わい、笑い声に包まれていました。





■取材日時

二〇二一年一月十五日(金)

■場所

柳津町檀ノ浦地区

■インタビュイー

檀ノ浦地区町民「町」

■インタビュアー

我妻 泉香 「我」 地域おこし協力隊

谷野しずか 「谷」 同上

【二月十五日 午前七時 歳の神作り】

三十年以上になる

「谷」檀ノ浦の歳の神ってずっと、この場所
でやって？

「町」ここで作ってるみたいですね。入居
僕たぶん……二十五年くらい。三十年以上
なる。三十五年くらい。

「谷」こんなと真ん中でやるとは。

「町」たぶん。そこ、燃えかすが……

「谷」流せるからか。

「町」畑の中でやると、やっぱりちゃんと後
片づけね。

農家生まれの人多いから

「我」去年はできなかったんですけどすもんね。そ
れ以外はもう毎年欠かさず？

「町」はい。

「我」これは「実家でも……おうちのほうで、

元々やってた？

「町」ああ、うん。みんな農家生まれの人多
いから。実家ではやってたんじゃないの。もっ
と大きく盛大に、やってたと思う。今、最近
やるとこなくなっただけ。あと、集落によつて
は歳の神って昔は茅(かや)屋根だったから。
それが移って、集落が火事になったとか。そ
れ以来やらないところもある。

「我」そうですね。茅葺きだと燃えちゃう……

要はかっこいいからっていう

「谷」歳の神のこの形ってなんですかね？

「町」色んな形があるみたいだけど。人だとか。

「谷」人？なんか十字架みたいに見える。

「町」人じゃねえの？もつと本格的に作れる
ところ取材すればよかったのに。

「谷」え、でも、これ本格的なほうじゃない
んですか？

「町」これは大きいですね。一王町とかもつ
と大きいですよ。

「町」ここは人形にするんですよ。うちの
(実家の)ほうはもつ、ドーンって。

「我」やっぱり形が違う？

「町」一個の木にちゃんとストーンと、円錐
形に。で、男女のね。子孫繁栄も祈ってるか
ら。あんまり言いたくないけど、要するにポー
ルがついてたり。奥のほうはそういうの守っ
てるんじゃないですか。奥っていうかあの、
農村の。うちの実家なんか西山地区で、先週
やりましたけど。ちょっと小っちゃかったけ

ど、元々はもつとおつきやっていた。代々ちや

んとこう、なんですか。火をつける人もね、
厄年の人とか。あと神社のこう……なんて
いうのあれ？ひらひらっていう(御幣のこと)
……あれを切る家も決まっていたりね。代々、
神主さんはいないけど、神社の近くのお家の
人で。代々その……梵天(ぼんでん※1)と
かいうんだけどね、さしたり。で、燃えてくると
落ちてくるじゃない？それを拾って。で、受
験のときとかにそれでご飯を炊いて。朝、お
赤飯とか食べて行くと、合格祈願みたいなね。

「町」色々あるんですよ。民俗学みたいな。

「我」人型にはなにか意味があるんですか？

「町」ああ。人型ってその、ところによって
形違うよね？あとは真っ直ぐ三角に作るこ
もあるよね。

「我」見たことあります。ここは人型？

「町」人型。要はかっこいいからっていう。

「谷」(笑)

「町」なんか本当は意味があるんじゃないか
な。人間に……型とってね、厄を払ったとか。
なんか。わかかんえけど。本当は、あの先に
幣束ついていてあのほら、神様、あの太夫様
(神職や御祈禱師=御師のこと) 拜むとき、
パサパサッてるあるでしょ。あれ、本当は飾
んなきゃなんないの。

「谷」そうなんですな。

「町」うん。誰も作れる人、今いないから。

「我」作るものなんですな。自分たちで。

「町」神様だから、それもやって。本当は。

「我」この藁を作るのとかやり方とかは、親

から教えてもらう感じなんですか？

「町」親っていうか、先輩たちがやってたの
を見よう見まねで、覚えて。

「我」技を盗んで。じゃあ、みんなわりと見
てた人たちは誰でもできるんですか？

「町」うん、でも……誰でも今はできなくなっ
たね。藁も結べなくなっただけ。藁って
か縄の結び方っていうかね、解けない。俺く
らいまでじゃないかな？俺も今六十六なんだ
けど。あとはできないんじゃないかなあ。

苦いだ。昔、胃の薬に

「我」これはなんの木なんですか？

「町」これはあれじゃねえかな、キワダ(キ
ハダ)かな。昔は胃の薬だなんて、真つ黄色
いの。切り口が。皮干して、そうしてすって。
うん、真つ黄色くなんだ。そうだ、キワダだ。
昔、水に浸しておいて。なんか薬みたくして
やってたなあ。苦いだ。昔、胃の薬に。おら
子どものころ飲まれた。病院なかつたから。

「我」良薬……効くんですか？

「町」うん。

「我」お正月飾りですか？それは。

縁起もんだから

「町」そうそう。去年は中止で、できなかつ
たんで。だから、一年分。普通のごみに投げ
られないの。

「我」溜まっちゃいますよね。

「谷」溜まっちゃいますよね。

「我」溜まっちゃいますよね。

「我」溜まっちゃいますよね。

「町」今年、歳の神やるってんで。門松ね。御札もあるし。

「我」これからまだ、どんどんお飾り来るんですけどもね。意外とみなさんお正月飾りちゃんと飾られるんですか？

「町」人よってばね。やっぱみんな縁起もんだから。御札受けてる人もいるし。だからみんな、その処分に困るっていうの。「ミとして捨てるわけにもいかないし。だからそのため、この歳の神やって。

毎年決まったメンバーで

「町」本当にちっちゃいんだよ。今は杉の木一本でやらねえで……

「町」杉の木一本だべ。んで村から、一束ずつだけ集めて、藁。藁がなくてな、今。

「谷」ここで、炎をやるのか……

「我」でも、景色がすごい良いですよ。これは、毎年決まったメンバーでやるんですか？

「町」毎年決まったメンバーで。

「町」いくよ。せーの、せーの。もう一回。
「町」おかしいな、これ左側だな。なんか頭に食わねえな。曲がって。がっかりしてお辞儀してんだ。

「我」難しい……

「町」せーの、せーの、せーの。もう一回。

「町」オッケーじゃないですか？

「我」すごい真っ直ぐになってる。

「町」若干、もうちよつと左なのかな？向かって右側のほうにもう一束つけると格好良いで

すかね？そうそう、そんな感じ。良いんじゃないですか？首んこギョツと締めるのちよつと良いかもしない。燃やすとこれ、あれだな。煙がたぶん……藁がももんももんもんもん。

「我」でも、これもつ立ってちゃったら、濡らしてばなしになっちゃいますよね。

「町」そうそう。本当は雪降れば良い。

すげえカッコいいよ

「町」大体良いだべ？

「町」はい。格好は大丈夫。あと首んこちよつと締めつつカッコいいかもしないす。根っこ。良いと思います。相撲取りの回しみたいな感じですね、お相撲さんの(笑)。あれは土橋君(町民)のアレンジです。たぶん。

「我」そうなんですか？

「町」代々そんなことしてるんです。

「我」アレンジが入って(笑)。かわいい。お正月飾り飾っていくんですね。だ、だるままで！？

「町」うん。去年やんなかったから、二年もカッコいいじゃないすか、すげえカッコいいよ。カッコいい。プロポジションが。

「我」完成ですか？カッコいい。

「町」はい。どうもお疲れさまでした。では、六時に点火しましょう。

「町」四十二の厄年なのでお酒を奉納したいなって。持って来ても良いですか？午後にも。

「町」ああ、ああ、置いといても良い。

「町」うん、すみません。

【一月十五日 午後六時 点火】

子どものお祭りだった

「町」昔は子どもがこの団地で、もつといたんだよね。二、三十人いたんじゃないかな？

「我」昔は歳の神も、子どもが楽しんだ行事？

「町」そうそう、子どもが楽しみで。

「我」スルメとかお餅とか？

「町」だって火い、ぼんぼん燃えんだもん。

子どもはおもしろいわけだわな。

「我」火遊びだけで楽しいすもんね。

「町」そう、火遊び。で、みんな餅焼いたり。

子どものお祭りだった。

「我」そうですよね。でも、今の子はそんなに火遊び楽しくないのかな。どうなんでしょう？

「町」昔の子みたいにでてこないしね。

「我」やっぱ、ゲームのほうがってなっちゃう。

みんな来るのかなあ

「町」あら。(正月飾りが)なんか少なくなない？少ないよねえ。

「我」いつももつと多いんですか？

「町」いや、いつもっていうかたぶん近年少ないんだと思うよ。

「谷」二年分溜まってるはずなんですけどね。

「町」みんな来るのかなあ。昔はすこくみんな、ね。来てたけど最近少ないんだね。

「我」(歳の神にささった正月飾りを見ながら)ほお……風車。

「町」あれは十日市のあるか？風車。

「我」歳の神のとき、これ、熱風でくるくる回っ

てかわいいですよ。良いなあと思ってた。(人々が集まり始め、正月飾りが増えていく)

「町」これほら、御札。これいっぱいだなあ。なんだっていっぱいなこと。去年もやったよなあ？え？去年やんねかった？雪ねえから？

あ、そうだったか。あ、だから溜まってんだ、みんな。二年分。

「我」すごい豪華(笑)。

「町」冬まつりも、向こうで処理してんの。

向こうもやんねかったから。

そこで親交図ったりなんか、やったんだよね

「町」雨降ったけど、燃えんのかなあ。

「町」大丈夫だ。濡れても燃える。(町営住宅に)来る前からやってる、みんな経験者ばかりだから大丈夫だ。うん。濡れたほうが良いよ、かえって。長持ちするから。本当は濡

れて、で、できるだけ中、乾燥してるところに火を点けて。できるだけ時間かけて本当は燃やさなきゃならない。で、それを作るときもこんなもつと、大変なんだけど。本当は縄

でぐるぐる縛ってなるべく燃えないように。みんな、長時間いれるようにして。そこで親交図ったりなんか、やったんだよね。

「我」そうなんですね。じゃあ、それは濡れてちよつとよかった？

「町」うん。だって昔はなにもなかったから、酒飲むのが楽しみだったんだもん。みんな集まって(笑)。

「我」確かに。楽しいですよ、これは。
「町」どぶろくで。

昔は茅でやってたんですよ

「町」いやあ、歳の神も今年コロナだから、どうしようかなあって迷ってたんですけど。だって、「区長さん、いつやんだあ、いつやんだあ」なんて言われたから。藁は用意してただけよな。

「我」藁も手に入り難くなってきましたよな。

「町」藁、今、機械で刈るから。なかなか手に入らないですよ。でもだ、農家やってる人は藁使うから。この人はバインダーっていう機械が、最初から藁にする機械でやってるから。束になって、きれいになってるけど。そこから買わせてもらったんだけど。本当は、昔は茅でやってたんですよ。

「我」藁じゃなかったんですか？

「町」茅はもつと長いから、茅で。まあ、藁も使うけど。茅はなんていうの、パチパチパチパチ燃えて、音が良いっていうから。

「我」茅でやってたんだ。その茅は、屋根に使ったものかそういう感じですか？

「町」うん。俺たち子どもころは茅でやってただけよ、そうやって夫婦(めおと)でね、二つ作って。

「我」本当にニギヨウマンギヨウ(※)みたいですね。

「町」そんなことして昔はやってたんだけど。今はこうやって真っ直ぐ立てるのも大変だか

らって。人がいなくて年寄りが多いから。みんな藁だけ立ててまどめてやってるみたいです。杉の木一本立ててやるのが本当なだけよ。

「我」栗城さん(檀ノ浦地区長)はこれ、もうちっちゃいころからずーっと関わってきて？

「町」うん。俺は違う集落から、西山のほうの集落なだけよ。ここにいる人みんな、そういう他の集まりばっかりだから。そういう歳の神やるとこの集落の人が結構多いのね。

「我」そうなんですよ。これはわりと西山風な感じですか？

「町」そうだね。みんな集まるのがなかったから、そういうのが楽しみだったんじゃないの。

「我」そうですね。夜に明るいななんてあんまないから、楽しい。

やっぱり地区によって違うんだ

「町」西山のほうはズドンで。これが男性っていうシンボルであって、そんで。上にまあるい杉の木、よくお酒作ったときにあの、丸い、ぶら下がってるでしょ。ああいう風に藁で丸くボール作って。で、ボールぶら下げて、紙をこう……

「町」やっぱり地区によって違うんだ。

「町」うん、違う。もつとすごいところは、まあこんなこと言っとんだだけよ。木の根っこの先のほう、土の中にドンツと埋める。雪の中に埋める。

「町」それ燃える？最後。

「町」いや、木は燃えないけど。軸の部分は

男性のシンボルみたいなのをわざわざ削って。作り方には、女性が入っちゃいけないっていう。

「我」そうなんですか？

「町」そういう習慣。

酒いっぱい飲んでたいから、燃やすな、早く燃やすなって

「町」始めつか？どうもみなさん、お晩でございませう。今日あの、初めて会う人もいるんで、本年もよろしく願います。それでは、歳の神に着火したいと思うんですけど。点火お願いします。

「町」じゃあ、燃やします。

「町」はい、ありがとうございます。あ、バーナー？おお、さすが。バーナーだ。

「町」酒いっぱい飲んでたいから、燃やすな、早く燃やすなって。

「我」うわあ、煙がすごい。すごい、あつたかいですね。

スルメと昆布は必ずつきもん

「我」こんばんは。ああ！スルメとお餅。

「町」どうぞ、取ってください。どうぞ、良かったら。

「我」すこい、でっかい。ありがとうございます。ます。こういう風にスルメ挟むんですね。

「町」うん、スルメ。今、回して食べてもらいます。

「我」これで焼くんですよ。すこい。

「町」焼いたスルメのほうが良いよ。焼き

ましよう、スルメ。焼いたほうが良いから。

「我」どうしてスルメ焼くんですか？

「町」どうしてっていうのかなあ。あの……御神酒には昔からスルメって決まってたみたいで。そのいわれはわかんないけど。

「我」食べると厄払いになる？

「町」うん。やっぱりなんか、神様関係あるみたいね。

「我」確かになんか、スルメあげますもんね。神棚とか。

「町」神になんかお祓いすつときでもなんでも、スルメと昆布は必ずつきもんだもんね。

「我」そっか。昆布もなんですよ。

「町」スルメだけはね、昔から。

一年の始まり

「谷」歳の神ってなんで「歳(とし)の神」って書くか誰か知ってますか？

「町」とし。まあ、としの神。

「我」あれですか、新年にやるから？

「町」そう。一年の始まり。本当は十五日に昔はやってたの。

「我」ああ、小正月の。

「町」大きい集落はやっぱりね。農家の人たちとか、時間自由に使ってる人たちは十五日にやってるんだね。

酔っぱらって火の中に入ったり

「我」こんなに焼けるの早いんですね。もうこんなになっちゃった。

「町」そう。焼けないように、なるだけ、縄でぐるぐる巻いて本当はやるんだけど。めんどうくさいから(笑)。

「我」昔はそうやると何時間くらいもったんですか？

「町」三時間くらいは。大きさも違うけど。

「我」これは何時くらいまでもつんですか？

「町」普通はほら、燃えるようにこうやってばらすんだけど。固まったら三十分くらいは持つかない。中に空気入れないと、燃えないから。「我」長く燃えてたほうがお酒ずつと飲んでられますもんね。

「町」飲まれる。あとはほら、お餅とかスルメとか焼いて。持ち帰って食べつつか、ここで食べたりする。藁の火力はすごいよね。瞬間火力っていうのかな？

「我」熾火(おきび)になってから、わりと長持ちしますね。これで昔から、お酒を一晚中飲んでたわけですね？

「町」そうそう。酔っぱらって火の中に入ったり(笑)。

「我」胴突きとかってするんですか？

「町」うん、昔はやったのね。厄年の方、そのころは。ここは住宅街だから、こんな場所です。普通は田んぼとかなんかでしょ？広いところで。雪もものすごい、一番降るときだったから。厄年の人だと、みんな

で抱えて雪の中にドーンツ(笑)。

「我」なるほど。(初めて聞いたときは)冗談かと思いましたが……本当にやるんですね。

「町」そうそう。俺、子どものころはやったの。よく覚えある。あのころは清酒なんてなかったから、どぶろくで。厄年とか年男の人はみんな「胴突きやんぞー」ってみんな追いかけて回して。

「我」逃げるんですね、おもしろい(笑)。

「町」やっぱ雪降らないとできないねえ、こういうのは。あと、なんていうの。中に生竹を入れてね。そうすつと熱もつと竹の節でパアアア、花火みたいに。

「我」花火みたいになるんですか？

「町」そうそう、前は俺も爆竹を入れてやってたんだけど。そうすつと破裂してポオオオって音してね。それが楽しみで。

「我」それは楽しい。火遊びなんてなかなかできないし。

「町」あと、爛もね、竹とつてやって。こん中に酒入れておけば、すぐ爛になる。あつたかい。これはおいしいですよ。竹の香りして。今思い出した。今日やればできないこともないけどね。

昔は食べるものないから

「町」団子さして見たことないですか？

「我」団子さし、この前取材させていただいたんですよ！すごい、団子のなる木。

「町」ミズノキっていつて場所によっては檜(なら)の木でやるとこもあるけど。

「我」ここでも団子さしやるんですか？

「町」みんな家でやってる人は持って来て、団子も昔は焼いてたけど。俺も団子の木山から切ってきて、やってたけど。

「我」お団子ここで焼くんですか？

「町」そうそう。歳の神で焼いて食べたらしい。

「我」良いですね、お正月。楽しい。

「町」昔は食べるものないから、そんなことしかなかった。

「我」いやいやいや、楽しいですよ。本当に。昔の人は楽しみ方を知ってた。

「町」そうだよ、うん。今の子どもら食べないもん。やっただけ。

「我」そっか……ええ、おいしいのになあ。他にケーキとか色々あるからなんですかね。

灰まみれになるから

「町」今度、藁の灰飛ぶでしょ？酒持つてつと、酒にいっぱい積もるんだね。それが厄、あれだつて飲んでた。

「我」灰を入れて？

「町」灰が飛んだのをそのまま飲んでた。

「我」へえ、別においしいわけじゃないんですよ？

「町」おいしいって別に害になるものじゃないから。これは縁起が良いなんて飲んでたの。風がないときは良いけど、あるときは灰まみれになるから。黒い灰が。たぶん今日は見えないけど、車に飛んでっから。

「我」終わった後、車黒くなったり？

「町」みんな文句言うんだから。縁起もんだから我慢しろーなんて(笑)。

みんなと話せるのが楽しい

「我」この歳の神の魅力っていったら一番はなんですかね？

「町」魅力はやっぱり作る人とみんなと、和気あいあいと。普段この集落、集まりもの人ばかりだからね。みんなと話せるのが楽しいですよ。冗談言いながら。

「我」みんなでお酒飲んで。楽しいですよ、それが一番。

「町」普段なんて、会ったつて挨拶もしないんだから、みんな。気まずいからね。こういうときは酒飲んで、和気あいあいと話せるけど。やっぱそれが楽しみだね。あと、こういうのを残しておきたいっていうのも頭にあるけど。誰かやないと、やっぱりやんないから。だから、この檀ノ浦地区ではずーつとやっていきたいですね。

※1 梵天飾り・棒の先から御幣を垂れ下げた飾りのこと。

※2 胄中地区のニンギョウマンギョウウ：p.305

胃中地区

「ニンギョウウマンギョウ」

会津柳津駅から車で三十分ほど、柳津町の山間部に位置する西山地域。センドムシ(※1)が行われる砂子原地区よりさらに山奥へと入ったところに、胃中地区はあります。そこで毎年二月二日に行われるのが「ニンギョウウマンギョウ(ニンニョウウマンニョウとも)」。



二月二日に一番近い休日、地区では総出で男女対になった大きな藁人形を作ります。そして当日の二日の晩には小豆ご飯を食べ、そのときに使った箸を各自藁人形にさして燃やすのです。この箸をさす部分は自分の体の悪いところで、無病息災や家内安全の願いが込められているのだとか。

コンバインなどの農業機械の導入により、「ニンギョウウマンギョウ」で使える藁が手に入りにくくなってきた現代。それでも、「ニンギョウウマンギョウ」を絶やしたくないという地区内外の人たちの協力によって、なんとか藁を確保できています。

一方で、昔もまた違う意味で「藁は貴重品だった」と地区の人々は語ります。ゲンベイ(藁靴)に蓑(みの)、編み笠、踏み俵、縄……生活用品を作るために、防寒や強度に優れた藁は必要不可欠でした。そのため、昔は納豆作りに使った「藁つと」を使って藁人形を作っていたのだとか。十二月中に作って、お正月のあいだに食べる節(せち)納豆。その藁を各家で保管しておいて、「ニンギョウウマンギョウ」の藁人形を作るときには子どもたちが集めて回ったそうです。



みなさんの作業を見ていて気がついたのは、鬼の顔、弓矢、刀、局部と、それぞれ作る担当が決まっているということ。地区の人に聞いてみたところ、これは誰が決めたわけでもなく、みなさん自然とその役割を担ってきたそうです。先人たちの背中を見ながら、幾代にも渡ってゆるやかに継がれてきた技術と知識。少しずつ形を変えながらも、祖先たちの記憶は確かに残されていくのです。

※1 砂子原地区のセンドムシ：p. 56



■取材日時

ニンギョウ制作 二〇二二年一月二十日(日)

行事当日 二〇二二年二月二日(火)

■場所

柳津町胄中地区

■インタビューー

胄中地区町民 [町]

金子 勝之 [金] 砂子原地区在住

■インタビューアー

我妻 泉香 [我] 地域おこし協力隊

谷野しずか [谷] 同上

伊藤たまき [伊] 斎藤清美術館学芸員

藤田 絵美 [藤] 柳津町役場職員

【二月三十一日午後一時 ニンギョウ制作】

厄除けだからな

[町] 十字(芯棒)のこっち(横)が腕なの。こっちが男で、こっちが女。

[我] こんなに藁使うんですね。すごい。どれくらいでできるんですか？

[町] まあ、三時間には終わる。二時半過ぎまでかな、寒いし。



「イボ結び」っていうんだよ

[町] 本場に縛結びはできねえだ。今のみんな若い人はわかんねえだ。

[谷] 結び方が…これに相応しい結び方があるんですよ？

[町] 同じほうから縛つと(結び目が偏ると)、こうなっちゃう(倒れてしまう)から。

[谷] 引っ張り合うような結び方じゃないと。

[伊] 互い違いというか、ずらしていくんだ。

[町] こころへんでは「イボ結び」っていうんだよ。これはよく、炭焼きなんかやると俵縛ったり、あと、米俵縛るときに使うの。絶対にほどけない。簡単なようで難しい。昔はね、稲なんか干す「さで」っていうけど。藤のツルで縛ってた。炭焼きでも炭俵縛るのに、藤使った。

[谷] やっぱりギョウギョウに縛るんですね。あ、すごい。縛った時の感じが全然違う！すごいキュッとしてますよね。

[伊] 普通に使うてる結び方なんだよね。



[谷] 胴体ができたんですね、すごい。

[伊] 作るの男の人なんだね。短刀っていうの、あれ？持ってるってところかっさいよね。腰のね、これ。

[谷] すこい。ナタがいつでも出せるように。やっぱ男のほうがちょっと太いんですかね？

女性はやっぱり細いんですね、ウエストが。あ、御神木切っちゃうんだ。

[伊] 長いとこ切っちゃうんだ。

[谷] 胴長になっちゃうんですね…大変だ。御神木はなんの木なんですか？

[町] なんでも良い。



「溺れる者は藁をも掴むぞや

[伊] この地区ってどれくらいから、このニンギョウマンギョウ始めたんですか？

[町] だいたい二百五十年前になると思っんですね。今は亡くなっちゃった先生から聞いた話。非常にこういうことを詳しく研究していた方で、柳津町誌の編集員でもあったの。

[伊] ちなみになんていう方なんですか？

[町] 羽賀十市(ハガジユウイチ)さん。その人から聞いた話によると、だいたい二百五十年前くらい。はっきりしたことはね、資料がないんで。

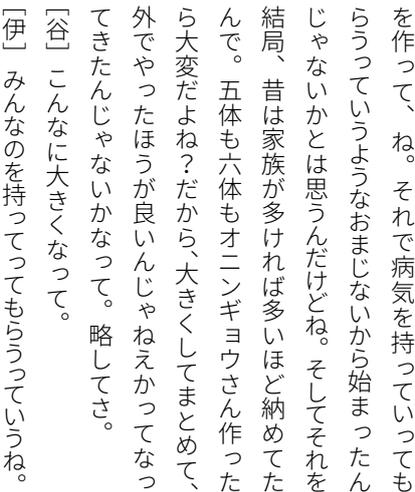
[谷] ニンギョウマンギョウってどうして始めたのかとかってご存知ですか？

[町] まあひとつ、民間信仰だけど。昔からこのニンギョウでやってたのが、あるいは歳の神形式でやってたのか、ちょっとそれは定かではねえんだけど。疫病が流行って、今の日本みてえにさ、「口ナみたいにさ。それでまあ、「溺れる者は藁をも掴む」でさ。ニンギョウさんを作って、ね。それで病気を持っていても

らうっていうようなおまじないから始まったんじゃないかとは思っただけだね。そしてそれを結局、昔は家族が多ければ多いほど納めてたんで。五体も六体もオニンギョウさん作ったら大変だよな？だから、大きくしてまとめて、外でやったほうが良いんじゃないかってなってきたんじゃないかなって。略してさ。

[谷] こんなに大きくなって。

[伊] みんなのを持ってもらうっていうね。



「町」 一体だけ作ってるのはあんのな。男と女二体作ってるところはないってね。そしてまあ、夕ご飯は小豆ご飯を炊いて。そして、

食べたご飯、箸使うでしょ？それを持ってきて、自分の体の調子の悪いところに刺して、ニンギョウさんを燃やして、そんな風習だな。昔は、萩なんての秋のうちに取っておいてね。山の萩っていう木。真っ直ぐの。箸を作るのは萩だったの。今、あんまし採集されてなくなってるけど。

「谷」 萩の木で作られたお箸を？

「町」 今はもう割り箸だけだね。今はもうなくなっちゃってるから。

「谷」 赤飯じゃなくて小豆飯なんですよ。

「伊」 小豆飯であることにも意味があつて。赤っていうのがね、疫病退散というか、だからそれを食べることに意味があるっていう。

「谷」 疫病にスポットの当たったあれですね。

「伊」 男女作ると言うのが不思議なんだよね。男女作ると、豊穣みたいなあれになっ

てくるからね。

「町」 昔は大人の人がね、炭焼きやる帰りにこのニンギョウ作る場所、この上なんです。この上で、平らなところあるんです。南原っていうんだけど。そこで作って、男はこちへ置いて、女は村の下さ担いでって。それで歩いてきたの。

「伊」 場所にも意味があつたんですかね？

「町」 お寺あつて、その下広くなつてんですよ。でも、今はみんな道路があつたり畑があつたり、住宅も増えだし、ここで焼くけど。

朝、作ろうと思ったら 白がないんだよ

「町」 今は村もね、行事少なくなつたけどね、昔は「白隠し」っていうのがあつたよ。餅を作る白を隠すの。たいていは貧乏人が金持ちに對してだな。そういうのがあつたの。そうだなあ……昭和十五年頃までやってたかな。本当に白を隠してたよ。朝、作ろうと思つたら白がないんだよ。お正月の十六日。

「谷」 困つたりしますよね？

「町」 杵を隠したり、白を隠したり。そういう風習があつたの。村の決め事で、金持ちが贅沢してんのを、やっかむわけだよ。困らせてやれっていう。

「谷」 そういう、ちよつと悪い感じの？

「町」 そして、困つちまつて仕方ないから、村の人たちにお願ひに行くしかない。手ぶらじゃいけないの。酒、肴持たなきゃいけない。今度はそれをみんなで飲み食いして。そういう風習があつたの。

「谷」 ひどい……そんな恐ろしい風習が(笑)。それはこの胃中地区だけですか？

「町」 柳津町では胃中だけ。よく鳥追いとか虫送りとかはどこの集落でもあつたけども、白隠しだけは胃中しかない。

藁って非常にね、 農家にとって貴重品だった

「谷」 藁を束ねるのは昔から女性のお仕事だっ

たんですか？

「町」 昔は藁つうのは使わなかつたの。藁って非常に貴重品でしょ？農家にとっては。だから昔はね、藁は使えない。納豆を寝せた、納豆づっこ(納豆づつこ)をね。これをね、こころへんを編むんですよ。そして納豆を作る。それをお正月に食べんですよ。その殻を捨てないで、みんなうちで保管してたの。それを村の子どもたちが一軒一軒回って、集めて。そしてニンギョウ作るときは、この状態だとまだ茅(かや)です。その上さ藁で作つた納豆づつこを、ここの編みであるから、化粧する。

「谷」 茅の上に納豆の藁を巻いて？

「町」 化粧するわけだな。そうしてやつたの。藁って非常にね、農家にとって貴重品だった。縄なわなんねえ、履物は作んなくちゃならない。ね？

「谷」 もうなんにでも使えますもんね。

「町」 最近になつて。ニンギョウ、藁だけで作つたのは。茅はなかなか今、刈って保管できないからね。この藁もね、よその村さ頼んどいて。今みんな機械でやつちゃうけど。だから、ないんですよ。

「谷」 じゃあ昔、その茅をこつこつに編んで？

「町」 だいたいは、中は茅で。全部。その上藁で、納豆のづつこで絡む。正装してた、着物着せてたわけだ。そうすつと編み目が出てきれいだった。

「谷」 その納豆でやつたのも見てみたかったなあ。じゃあ昔は、これに着せられるくらい

納豆を食べてたつてことなんですか？

「町」 そう。節納豆って言って、お正月前に、十二月に寝せるの。大豆は自給自足で納豆が最高の栄養であるし、ご馳走だったの。納豆のづつこつてのが本場に、貴重品だったの。捨てるんにかつたの。

「谷」 茅をやめたのつていつぐらいからになるんですか？

「町」 そうね……藁になつたのは、もう昭和もすつと後ですよ。

「谷」 結構最近なんですね。

「町」 昔はなんでかんで、藁、そんなに使っちゃいけないから。

「谷」 じゃあこの形もわりと最近なんだ。

結わいてみる？

「谷」 我妻さんお手伝いしてきました？

「我」 してきました！やつと、一把。お姉さんたちポンポン作ってるけど……

「谷」 やつと一把？結構大変なんですね。これ、まとめるだけにしか見えないけど、そんなことないんですね。



〔谷〕結構本格的に描いてらっしゃる。
〔町〕みなさんいるから(笑)。ちょっと様になったな。

〔我〕それをくつつける……どうやってくつつけるんですか？

〔町〕(竹に切り込みを入れる。)

〔伊〕挟むのか。

〔町〕やるのがだいたいわかっただでしょ？

〔我〕おー！できた。かっこいい。弓矢作られる方は毎年決まってらっしゃるんですか？

〔町〕いや……去年は俺だったけど、別に誰がやるって決まってるじゃないよな。俺らは小学校のころからこれ作ってたの。見よう見まねで覚えて。

〔我〕今度は槍？

〔谷〕薙刀(なぎなた)じゃないですか？

〔伊〕どっちも武器を持つのか。やっぱりだから退散なんだね。

〔我〕魔除けの。

〔谷〕木で薙刀作るんだ……これ薙刀ですか？

〔町〕そうです。

〔伊〕薙刀は女性像が持つんですか？

〔町〕そう。

〔谷〕弓矢は男性。薙刀も木で一から作るんですね。歳の神より遥かに難しそうですよな。

〔伊〕だって、ちゃんと形作るんだもん、藁で束ねてさ。一對のあれ作るわけだから大変だよ。

〔我〕(男女の)大事な部分は女性が作るって決まってるんですか？

〔町〕いや別に決まってるじゃないけども。

〔我〕誰でも良いんだ。

〔谷〕自然とこういう役割分担になってたっところか。

〔町〕そうそう。「おれやっペー」とか言って。

〔伊〕本体作るのは男性なんですよな？女性に触られないっていう。そっか、別にそうなんだ……不思議だね。本体は女性触れないの

にね。ちょっと私はそこが結構気になる。だって、ある意味象徴的なものですよ。そこは良いんだ……

〔我〕単純に力仕事だから？

〔伊〕でも、女性が触っちゃいけないっていうのはよくある禁忌じゃん。タブーじゃん。そういうところが胃中の特徴なのかもしれないし。

〔谷〕これ杉ですか？

〔伊〕これはどこに？

〔町〕陰毛。

〔伊〕あー！なるほど。

〔町〕これさ、こうやってきんぶく(陰囊)

だ(笑)。



中指より薬指は短くしなきゃね

〔伊〕今なにを作ってるらっしゃるんですか？

〔町〕指作ってるの。

〔伊〕五本指作るんだ。



〔伊〕難しい……できた。

〔谷〕すごい！

〔町〕(雪で手を湿らせてよる)

〔伊〕縄って湿り気を与えてやると、ああやってまとまるんだな。

〔谷〕たぶん滑りすぎるとぶれちゃうんじゃないですか？

〔伊〕あれ？待って、もしかして……足も指作るんだ！それは足の指ってことですよな？

〔我〕すごい、細部まで！細かい。リアルに作るんですね。

〔町〕そう。中指より薬指は短くしなきゃね。

〔谷〕そこまで(笑)。

〔伊〕一、二、三、四……あと五。

〔町〕やめつか？

〔伊〕いやいや、ここまで！

〔谷〕あと一本です！

〔町〕これ、ヤクザのおかみさんだって(笑)。

納豆づーっこおーくれよー

〔町〕今から五十年前は、大人二、三人であとは子どもばっかで作ってたよな。

〔伊〕昔は子どもが主役だったんだ。

〔町〕俺らのころが最後かもしれんねえ。この上でやっただよ。最初は。女は下のほうさ担いでくの。男はこの上で燃やしたけど。村はずれまで担いでった。

〔我〕すごい大変ですね。

〔町〕昔はもつとでかかったから。「にーんによまんによー(ニンギョウマンギョウ)

おーくれよー納豆づーっこおーくれよー」って担いでたからよ。

〔我〕歌いながら。

〔町〕虫送りは「なーがむしおーくれよ」。同じ節だからな。

今日はご苦労様って

〔伊〕いよいよ立ちますか。

〔我〕こんなにカッコイイのできちゃうと燃やすのもったいない。でも、燃やしちゃうんですもんね。すごいなあ。

〔谷〕どんどん人間に……

【伊】男はおつきくたく作る。

【我】体にも差があるんですね。

【伊】リアルだよ。だから。

【町】せーのっ(四人で女性のニンギョウを立ち上げる)。

【伊】大きいね、やっぱり。すごい。これはすごい。やっぱり背が高いね。(男性器を)つけてる……(笑)。できた!

【我】すごい迫力!こんなににおつきいんですね。毎年このくらいのおつきいなんですか?

【町】だいたいね、だいたい。

【伊】はい、以上でございました。

【我】いやあ、これはよかったです。

【我】ありがとうございます!

【町】(御神酒をいただいている)

【我】完成後も、御神酒を。これを燃やしちゃうの本当……燃やしちゃうのかあ。

【伊】最後はお酒を飲んで完成を祝うんですか?

【町】いや別に、今日はご苦労様って(笑)。

【二月二日午後六時 行事当日】

今日箸持ってきた?

【我】(お正月飾りのついたニンギョウを指して)あれだ!団子さしのあれですよ。

【谷】本当だ、団子さしの飾りだ。

【我】燃やすんだ。割り箸刺さってる、いっさい。

【町】今日箸持ってきた?

【我】箸忘れちゃったんですよ……

【谷】小豆も食べてないしなあ。

【町】恋の悩みだったら胸だぞ。

【我】そうなんですか!?

【藤】胃腸が弱いのでお腹にさしておきます。ここか?腸のほう。お願いします。

【我】割り箸持ってくれば良かった……

【谷】私も腸が悪いので、藤田さんのところに祈りを込めて。

(ニンギョウに火が点けられる)

【谷】おー!これ難しそうですね。火が消えちゃう。どうですか?

【町】灯油。

【谷】わーすごい!全然違う、勢いが。すごいすごい、すごい燃える。

(水蒸気が立ち上る。)

【藤】すごいな。水気があるのかな。

【谷】やっぱり雪がついてたからじゃないですかね?

【藤】消火と燃焼が一緒になっちゃってる。これはこれですごい。

【谷】すごいな……煙が大きくなって。

歳の神はやってないね

【谷】胃中は歳の神ってやるんですか?

【町】いや、やらない。これがその代わりみたいなもの。この近隣はみんなやってるんですけど。

【我】そつなんですね。胃中だけ?

【町】やらない。(歳の神は)一月十四とか

十五ですね。土曜日とか休みの日やることもあるんです。

【金】砂子原はその代わり秋にやる。火遊びをやる。

【我】元から歳の神じゃなくて、ニンギョウマンギョウなんですか?

【町】そうね、歳の神はやってないね。まあ同じようなね、薫燃やすっていう。

【金】芋小屋(※2)では昔から大きくやってたんだ。

傑作の指がまだ燃えてねえ

【谷】ああ、もう跡形もないな、わりと……

【町】なかなか燃えねえぞ。

【我】普通だったらもつと燃えてるんですか?

【町】普通だったらもう半分ぐらいは、燃えている。失敗だあ。なかなか燃えねえな。コ口ナウイルスみてえだな。

【谷】上のほうが燃えてないですよ。頭と手が全然。

【町】傑作の指がまだ燃えてねえ。

【谷】苦労して作られてましたよね。もう頭もだいぶ……でも、腕が残ってますよね。

【町】腕はもうダメだあ、ああなったら。いやあ、腕しぶごいな。

【町】縄がね、なかなか燃えないから。

【我】解けたら。

小学生とか、先生いたんですね

【我】子どもたちの行事だったんですね。

【町】小学生とか、先生いたんですね。子どもたちだけじゃできないんで。大人の二人か三人くらい。燃やすのは大人だな。子どもがだんだん少なくなったんで、大人がやるようになった。

【我】そういうことなんだ。じゃあ、最初のほうは本当に子どもで?

【町】虫送りとかも。

来年は箸持ってきたね

【町】終わりだね。来年は箸持ってきたね。

【我】そうだ。悪いところ直さなきゃ。

【町】頭はダメだべ。

【我】頭ダメなんですか!?バ力につける薬はない?

【町】そうそうそう。

【谷】本当ですか、それ(笑)。

※1 モワダ・シナノキとも。樹皮は繊維が強く、縄やかごなどの材料になる。

※2 芋小屋(いもこや)……胃中地区の南に位置する地区



こまき
小巻地区

「大般若会」

大般若会とは、大般若経を読み上げ、五穀豊穰や無病息災など、幸せで平穏な生活を祈願する法会(ほうえ)です。お祓いの行事でもあり、経本を読み終えると「降伏一切大魔最勝成就(こうぶくいつさいだいまさいしゅうじょうじゅ)〓すべての悪を取り祓い、人々の願いを成就させてください」と唱えます。

大般若経は、「西遊記」で有名な三蔵法師が訳した経典であると言われ、その量はなんと約五百万字。六百巻にまとめられた、仏教経典の中でも最も長いものです。



六百巻を全て一日で読み上げることはできないので、経本を振り上げてパラパラとめくり、お経の一部だけを読むことで全体を読んだことにする、「転読」という方法を使って一気に読み上げていきます。

今回取材させていただいた小巻地区の大般若会では、三人のご住職が一人百巻転読する大般若会を二年間行うことで、六百巻としていきます。

一般的に大般若会は年始に行われることが多いようですが、小巻地区では雪深い一月は避け、四月、春の訪れとともに行われます。

かつては、隣地区である野老沢(ところざわ)地区の月光寺から小巻会館まで、六百巻の経本を背負って、歩いて地区の若者が運んでいました。そして、ご住職は十六善神(※1)と理趣分(※2)を持って、地区の家一軒一軒の仏壇にお経をあげて回っていたのです。各家ではお酒が振る舞われることもあり、何十軒も回ったご住職は泥酔してしまうことも。お寺と小巻地区の人々が近い関係にあったことがうかがい知れます。



そして、小巻地区ならではの、読経の合間に、一斉にお賽銭を投げること。厳粛な空気が一変して、バラバラとお賽銭のぶつかる賑やかな音が響きます。子どもたちはご住職や鐘を狙い、時折、カーンッと甲高い鐘の音が響くことも。大人たちは気遣って、隅の方へお賽銭を投げます。「死角から飛んでくるお賽銭は怖いよ」と、ご住職の方々も笑いながら話してくださいました。



毎年、欠かさずに行われてきた小巻地区の大般若会。令和三年は新型コロナウイルスの影響で縮小となりましたが、本来であれば最後に直会(なおらい)を行い、地区の親睦を深めるのだとか。

地区の人々にとっては春一番の行事で、冬が終わってやっとみんなで楽しく過ごせる大切な交流の場。過疎化で行事の存続が危ぶまれる中、「記録することが大般若会を未来へ残すことに繋がるんじゃないか」、そんな想いから、今回の取材へ応じてくださいました。

※1 十六善神(じゅうろくぜんしん)：大般若経を守るべきとされる十六尊の神々のこと。

※2 理趣分(りしゆぶん)：大般若六百巻のうち、五七八巻。全六百巻の核心であり、特に功德が高いとされる。理趣分のみ転読せず、導師が実際に読む。



■取材日時
二〇二一年四月四日(日)

■場所

柳津町小巻地区

■インタビュイー

高森 正純 「住」 坂下町定林寺のご住職

他数名のご住職「住2」

小巻地区町民 「町」

■インタビュアー

我妻 泉香 「我」 地域おこし協力隊

谷野 しずか 「谷」 同上



【四月四日午後一時 行事開始前 ご住職への取材】

困難を乗り越えて 持ってきたお経だから

「我」 これはどういったことを……？ 経典を運ぶとか色々お聞きしたんですけど。

「住」 お祓いの行事だと思ってます、大きく、西遊記知ってる？ 三蔵法師がインドに行って持ってきたお経のひとつなんですよ。

「我」 大般若のお経？

「住」 うん。で、当時はインドから国外にそういったお経を輸出するってことをしなくて、インドだけで行ってきたやつを勉強したくて、三蔵法師さんが渡りますね？ で、そこで、それを行かせないために邪魔に入ったりしたのが西遊記のお話なんです。おもしろく表現したのが、色々邪魔に入るでしょ？ 毎回、お話で。あれがそういう昔の盗賊だった。インドの人たちが言われて阻止するため、邪魔してただけで、それ乗り越えてインドに渡って。で、入ってからはその一生懸命さを認められて、そのお経をこっちに、中国に持ち帰ることができた。で、翻訳に何年もかけて、そして出来たひとつが六百巻の大般若経ってお経。

「我」 そのうちのひとつなんですな。

「住」 そうそうそう。色々なお経がある中の種類のひとつが大般若経。で、そういった困難を乗り越えて持ってきたお経だから、お

祓いに力があるっていうような意味合いでね。で、その六百巻を普通は読むでしょ？

で、六百巻あるから読まないで、振って読んだことにして、それを六百回。六百巻だから。ここは三人なんで、百ずつの三百で二年で六百ってなるんだけど、まあ同じ意味合いで行っています。だから一人百巻ずつ振る。

「我」 そういうことなんですな。六百巻、これはどっかから運んでくるってお聞きしたんですけど。

「住」 昔はお寺に六百巻が、百ずつ箱に入っていて。それを背負ってきたんだっけ？ 昔は歩いて持ってきたんだっけ？

「町」 そうです、そうです。背負って。

「住」 野老沢のお寺から、ここに背負って持ってきて、村の……これは村の人に聞いたほうが良いかな？ もともとの、やってたの。

「町」 はい。十六善神を持って、チリンチリンチリンと村一軒ずつ和尚さんが回って、仏壇に一回一回をお経あげて、それが終わってからここで、大般若会が始まったわけ。

「我」 一軒一軒回る？

「住」 昔はそういう流れだったみたいです。回って終わって最後、もう会館ですかね。会館で、今やった法要をやる。

「我」 何年前ぐらいからこれは？

「町」 ちょっとわかりません(笑)。生まれたころはどっくにやりましたから。まあ、戦前からやってたんじゃないかなあ。

とにかく春一番の行事だから

「我」 この行事の魅力とかがってどのようになっているか？ 魅力とか、特徴的なこととか、他にはないようなことってありますか？ この地区でしかやってない、みたいな特別な……

「住」 魅力があ。

「町」 二つの宗派が、臨済宗と曹洞宗が一緒にやってんだな。普通だったら別々なんだけど、まあ同じ禅宗ですからね。一緒にやってもおかしくないだろうって。檀家さんも、村の人、まあ村が大事だったことで宗派を超えて、ここにとにかく春一番の行事だからそれ集まって厄祓いをして、厄祓いも終わってから直会(なおりい)をやるってそういうのが、親睦を深めるひとつの行事ですよ。

「住」 ここ、三十軒くらいあって、で、野老沢の曹洞宗のお寺と、あと奥之院さんの臨済宗のお寺の檀家さんが両方いるわけ。どっちかに固まってないから、同じ法要をやるのに片っぱのお寺だけじゃなくて、宗派を超えて二つの宗派のお坊さんが一緒に法要をやるっていう。

「我」 へえ、それは珍しいことですよな？

「住」 あんまりないね。全然なくはないけど、でも、だいたいはどっちかひとつの宗派で法要を行うので。その辺はちょっと通常と少し変わってるところです。

記録に残しておいてもらおうと 今後に役立つんじゃないかな

「我」これは昔から毎年欠かさずに行っている行事ってことですよな？

「町」欠かしたことはないです。毎年やってます。

「我」すごい。これからも続けていく上で、どのようにしたら残っていくかなって思われませんか？

「町」もう私は。人が減ってるっていうことで、存続が……だいたいほら、村見れば、あそこ跡取りいねえなあとかってビジョンが見えちまうのね。何年か後にはあの人もいなくなんだろうなってなっちゃつと、これが果たしてその人数でできっかどうかっていうのを考えるわけ。だから今回取材していただいて、こんなもんだっていうようなことを、記録に残しておいてもらおうと今後に役立つんじゃないかなと思ってお願いした。まあ、どこもね、どの地区も同じようなもんですよえ。

これが小巻の伝統だから

「我」この行事について、若い人とか町の外の人とかに知っていただきたいなと思うようなことってありますか？

「町」さっき言ったように、過疎でね。だんだんもうなくなるところもあるわけですよ。若い人がいなくなっちゃったから。そういう風になる可能性も小巻もないわけではな

いんで、まあ、できるだけ、やれるだけ続けていきたいなって気持ちです。まだ大丈夫だけど、将来ちょっと不安があっから続けていきたいなっていう、はい。住職さま方にはお忙しいところ本来でもらって大変なんですけど、これが小巻の伝統だからぜひともお願いして、続けていきたいなって。

「住」一番大事なやつあるんじゃないですか？お賽銭投げるあれ……あれは他のところないんじゃないですか(笑)。お経振り始めたらみんなでうしろからお賽銭投げるんです。

「我」えっ？他(の地区)にないですよ？

「住」他ないな、あんまりな。ないですよ？

「住2」いや、うちはやってただけ。

「住」やった？

「住2」やった。最近はおひねりだけ。

「住」おひねりだね、ひねってたね。

「町」いや、うちの場合は直接ですからね。

「我」当たったりしないですか？大丈夫なんですか？

「住」当たる当たる。

「我」当たる！？

「町」虚空蔵様でも御開帳ってやるのね。地区ごとに御開帳やんだ。

「我」あー、聞いたことがあります。

「町」そのときも、お賽銭バアーツと投げんのは小巻の人ばかりだから(笑)。

赤飯ふかして

【四月四日午後一時半 行事開始前 準備】

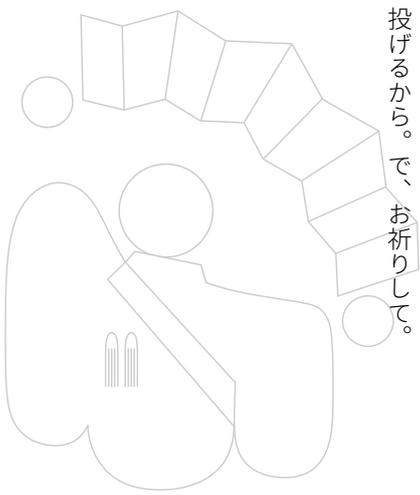
「町」今日の当番。

「我」当番？これは一つのおうち？

「町」四軒で、小巻が下村と上村があつて、下村二軒、順番で。上村二軒。あと区長さん。二軒二軒とあと区長さんで、前の日から、もち米。今日赤飯炊いたので、前の日にもち米をうるかして、で、当日赤飯ふかして、小っちゃなバックに盛って、今上にお供えしてあります。全部みんなに、最後はね、配るようにして。で、普通であれば大般若会終わったら、直会(なおり)っていつて、お食事会あるんだけど、今回コロナだから、直会、飲み会はしないで、折りを願って、これもまた配る。大般若は初めて？

「谷」初めてです。

「町」じゃあ、あれですね。もうびっくりするから。大般若っていうお経本広げて、お金投げるから。で、お祈りして。



【四月四日午後三時 行事終了後 再びご住職へ取材】

怖いよ。死角からくるから

「我」大迫力でした。

「住」初めて見るよな。

「我」あの、お経をこうやるのは、あれは練習なさるんですか？すごいきれいに。

「住」慣れればね。

「我」あれはよくやるやり方なんですか？読まずにバアーツやってっていうのは……？

「住」あの法要だけ。

「我」本当に珍しいやり方。

「谷」六百巻全部やるとして、どれくらい時間かかるんですか？

「住」だいたい初めから終わりまでやって一時間くらい。

「谷」大変ですね……

「住」お坊さんをいっぱいおけば、割るから。少なくなるということだね。

「我」毎年このくらいの人数でされて？

「住」ここは四人だね。

「町」まあ、昔から六百巻やってたけど。今の倍。一人二箱ずつ。一人一箱分になってから、十段だよ。

「我」全部で六箱あるんですか？

「町」全部で六箱。毎年、偶数奇数で半分ずつこれやってる。

「我」昔からもう、あのやり方なんですか？やり方は変わらさず？

「住」たぶん変わらないでしょうね。年配の人も同じようにやっているの。

「我」何年前からとかもわからないんですけどね。ずっと……

「住」あのね、日本で最初についていうなら五百何年とか。

「我」大般若会自体は各地でやられてるもの？

「住」そうですね。

「我」福島だと珍しいとか、そういうことはないですか？

「住」お寺に、お経のセットがあるところはわりと。あるお寺はやってる。ないお寺はやってなかったりということですかね。

「我」ちょっと気になったんですけど、木箱に目とか耳とか書かれているのは、あれはなんですか？

「住」んっとね、般若心経に、眼(げん)・耳(に)・鼻(び)・舌(ぜつ)・身(しん)・意(い)に、六つ言葉が出てくんの。五感(五感)を意味して。だから、六百あるので、百ずつってことで書いてある。

「我」そういうことなんですかね。

「谷」お養錢をこう、投げるじゃないですか。あれ……体に当たったりすると、「利益がある」とかそういうことはないですよ？

「住」怖いよ。死角からくるから。

「一回」(笑)

「谷」みなさん、あれはどこに向かって投げてるとかかってないんですか？ただ投げてる？

「住」それは投げてる人たちに。

「町」まあ、子どもなんかはね。おもしろがって、頭を狙ったり、鐘の中にお金を入れたり。まあ、大人の人は当たらないように、脇のほうにやりますけど。そんな形だと思います。頭さ当てたからって「利益がある」ってことではないですね。



新井田順一さん

「豆ぶつけ(小巻の婚礼行事)」

小巻地区の婚礼では、謡(うたい)(※1)や花嫁行列を行ったり、三三九度の盃を交わすなど、古くからの伝統的な形式が今も保たれています。



婚礼のお座敷には、家に代々伝わる島台が飾られます。この島台は、松竹梅、鶴亀などの縁起物や、新郎新婦が未永く添い遂げられるようにという願いを込めて、尉(じょう)と姥(うば)の人形が立てられたものです。



地区中の人々が見守る中、肅々と儀式は執り行われます。そして、謡曲が鳴り響く三三九度の最中、厳かな空気を破るかのよう
に突如加わるパラパラという乾いた音。これが小巻地区の婚礼行事の最大の特徴です。この「豆ぶつけ」では、新婦に一升杓の豆をぶつけます。これには「一生マメで居たい(一升豆で痛い)」という願いが込められているのだとか。



地区中から集まった人々が、お座敷の中から外から、一斉に豆を投げる光景はまさに圧巻です。かつて豆をぶつけられたお嫁さんたち、すてきなお嫁さんをもたらした新郎を祝う気持ち半分やっかみ気持ち半分のご友人。みなさん、「待ってました」と言わんばかりの嬉々とした表情を見せて、腕を振りかぶりま

一見お嫁さんいびりのように感じるかもしれませんが、そんなことはありません。謡の練習やお座敷の準備、宴席のための蕎麦打ちなど、小巻地区の婚礼は地区中の人々が協力して、長い期間をかけて準備し、作り上げるもの。地区の人々の盛大な祝福を受けて、飛び交う豆を浴びながら新郎新婦も幸福そうな笑みを浮かべます。

今回の取材では、小巻地区在住の新井田順一さんに、親戚の方が挙式した際の映像を見せていただきながら、婚礼の様子をお聞きました。



※1 謡(うたい)・・・能楽の詞章。または、祝言では「高砂」などが多く謡われる。

■取材日時

二〇二一年七月二十二日(木)

■場所

柳津町小巻地区

■インタビュイー

新井田順一「新」小巻地区在住

■インタビュアー

我妻 泉香「我」地域おこし協力隊

ぴったり収まるように 謡い終わる

「新」ここは中宿(なかやど)ってあって、お嫁さんや親族が来るじゃない？一回このうちに入って休んで、それから行くの。この提灯持った人たちが始まりますよーって。

「我」提灯の人がお迎えに来る？

「新」そう。で、これで花嫁行列を作って行くわけだ。

「我」これはどういう唄を歌ってるんですか？

「新」これは長持唄。長持(ながもち)って衣装を入れる、一メートル五十くらいなの。それ、長持って言ったの。あれを後ろのみんなが担いで、昔は歩ったの。待謡(まちうたい)のときも、花嫁が席に着くまでに、ぴったり収まるように謡い終わるように、早くしたり遅くしたりして(笑)。調整して、だいたいみんな着いたときにちょうど「つきにけーりー」で終わんのね。

聞く年寄りも いなくなっちゃう

「新」昔、我々の若いころはこの謡曲っていうの、謡の本を、親父の代から。これとこれは覚えとけよって言われて。高砂にもいっぱいあって、結婚式のときはこれとか。それで流派があっからさ、これは。能と同じだから。観世流と宝生流。この近辺では宝生流がほとんどだから。若い者が夜集まって講習会をやって、謡いができる人に習って。

「我」今も覚えるような会が？

「新」もうやんねえなあ。先生がいなくなっちゃった。この地区でも六十くらいかな？若いかな(若いもの)、まあ若いって言っちゃなあ……それでも、その年代ができれば、もう少しは大丈夫なんだけど、もう新郎くらいになっちゃうとわかんねえからなあ。

「我」今のうちに習っとかないと。教わっておかないと、途絶えてしまう。

「新」そう、これがつながらなくなっちゃうからな。こういうDVDを残しておいて、やらないと。書いておくだけでもだめだし。文化が途絶えんのは、人口減少でかなりあっと思うんだよな。普通のお祭りだってやんなくなっちゃうた。そうすつと初めから、どうすんだべっていうと、聞く年寄りもいなくなっちゃうから。

「我」復活させるのも難しい。

おもしろいからみんな 新郎のほうへやってくる

「新」花婿が入場すんだけど、介添えのこの女の人は取り上げ婆さんって言って、昔は出産すつときに、近所の人が手伝って取り上げたのね。それをやった人に案内されて、新郎は来んだけど。今は病院だから、こんなのないけど。今は親戚の近い人がこういう役目をする。男の子と女の子が来て、三三九度の酒注ぎっていうのを子どもにやらせるんだよな。子どもの役目っていうか。これもなかなか今、少子化で子どもがいねえから。ぴったりの子がいねえと、どこから借りてくるしかねえ。

「我」(豆を)投げてるんですか？そこから？

「新」音がすごい！家の外に集まっている人も投げるんですね。あれはお嫁さんに向かってみんな投げてる？

「新」そうそう。本当はね、嫁さんにやるわけなんだけど、おもしろいからみんな新郎のほうへやってくる(笑)。

一生マメでいたいって

「新」一升だから、一升枧に豆を炒ったやつをな。いっしょう、自分の一生、生涯。マメで、ぶつかっから痛いって。一生マメでいたいって。

「我」その「いたい」(笑)。痛いが必要なんです。

「新」そういういわれを込めて。だから痛ければ痛いほど、お嫁さんはマメでいるよって。

「我」みんなで一升をひとつ？

「新」みんなで分け合って、手に持って待ってるわけ。

「我」外に集まっている方は、豆を投げるために集まっているんですか？

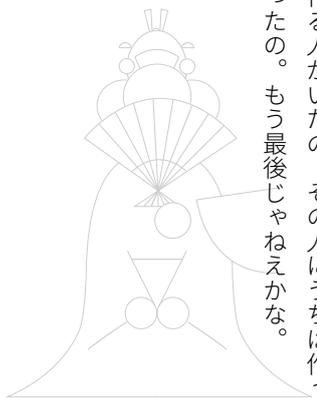
「新」そうそう。古い嫁さんはやられてたから。仕返し。豆は小っちゃいほうが良いの。こまめでいたっていう。マメで気がきくっていうよね。

作る人が いなくなっちゃったなあ

「新」この島台だって、うちぐらいしかなくなっちゃったよ。新調してあつけども。作る人がいなくなっちゃったなあ。作る人もあそこになんだよ、安久津ってあんだ、あそこの自転車屋さんの学校寄りの岩佐さんという、これを作る人がいたんだ。

「我」これだけ？専門なんですか？

「新」人形から……鶴、亀、松の木なんかもみんな作る人がいたの。その人にうちは作ってもらったの。もう最後じゃねえかな。



じけまち
寺家町地区

「大日如来尊大祭」



大日如来尊の大祭は、柳津町の寺家町で七月八日に行われます。参拝者は地区内外から集い、岩腹に奉られている大日如来様にお参りをした後、御護符や御神酒をいただき、寺家町内に並んだ出店を楽しみます。

浴衣を着て走り回る子どもたち、商店街を照らす提灯の光。このお祭りは、寺家町地区のみなさんにとって夏一番の楽しみ。

コロナ禍以前は町中にある観光案内所の駐車場を貸し切って、焼きそばや焼き鳥、金魚すくい、屋台など多くの出店を立てて賑わいを見せていました。

令和三年の大祭は密集を避け、一つの駐車場に集めていた出店を分散させながら、地区内にある「あかべこ通り商店街」を活用した新しい形に。通りにそって立ち並ぶたくさんのお店や、赤べこの絵柄のついた提灯が商店街を彩り、夏祭りらしい風情ある光景となりました。



ただ中止にしたり、規模を縮小するだけでなく、よりみんなが楽しめる、商店街らしいお祭りにする。そんな寺家町地区の人々の創意工夫がうかがえます。

こうして毎年、絶やさず繋がれてきた商店街を彩る夏の風物詩への想いを、お祭りの準備に関わる観光協会会長の山内拓也さんと「花ホテル滝のや」の塩田恵介さんが語ってくださいました。



■取材日時

二〇二二年七月八日(木)

■場所

柳津町寺家町地区

■インタビュー

塩田 恵介「塩」 「花ホテル滝のや」支配人、

寺家町地区在住

山内 拓也「山」 柳津観光協会会長、

寺家町地区在住

■インタビュー

我妻 泉香「我」 地域おこし協力隊

中止はやりたくない

「我」 小さなころから関わってやってらした？

「塩」 祭りはあったんだけど、こういう風な縁日みたいにはしなかった。七月八日にお参りするっていうのはあった。大日如来の日って感じだね。これはそれぞれ、虚空藏さんでもそうなんですけど御本尊があるじゃないですか。大日如来の御本尊のお祭りの日っていうのを年に一回、日を決めてお参りするんですが。

「我」 七月八日って決まってる？

「塩」 なんで七月の八日だかはわかんないんだよ。こんな風になったのいつだったけ？

「山」 約三十年かな？その時から今の祭礼みたいな、縁日みたいなことをやり始めるようになった。

「塩」 去年と今年はコロナの関係で、商店街を活かした縁日にしようって提案が町内であって。去年までは観光案内所の駐車場全

部使って集約して。そこで色々焼き物とか金魚すくいとか食べ物、一緒にやってみましたね。去年はコロナだったんで、たくさんの人来てくださいね、とは言いにくかったです。中止はやりたくないじゃないですか、お寺の祭礼なんて。どうやってやりましようかって話し合いになって、商店街使って、じゃあ縁日的な感じでやりましようって。もちろん指揮とってるのは(山内)会長ですけど。今年は特に歩行者天国にして、まあ「もんでん」(※1)と合わせたような形でやりますかって。

岩に大日如来の面影

「山」大日様のあれはわかってるんでしょ？その岩に出てくるみたいな。

「我」大日様の……？

「山」岩があるんですよ。そこに似たような形が、彫ってあるんじゃないんだけど、自然にそういう風に見えるっていうのが大日如来なの。虚空藏菩薩の下に大日如来ってあるんだけど、普通は大日如来様が一番上なの。その下が虚空藏菩薩なんですけど、ここは逆なんだけど。その岩に大日如来の面影っていうのかな？像が岩に浮き出てるみたいな。それがあるって、そこにやぐらみたいな立って、奉るみたいな形になってるの。

「塩」そういう風に小さいころから。

「山」だからあそこ下から見ると、大日如来が浮き出てるように見えんべ、見えんべって言われるけど、俺は(笑)。

「塩」心が綺麗な人には見える(笑)。

みんな待ち望んでる

「塩」いつのころからか、これは夏祭りの一番早いお祭りみたいに。柳津町でもね。だから子どもたちも結構楽しみにしてて、浴衣を着てくるとかね。初めてかき氷を食べるとか、そんなイメージでみんな待ち望んでるような雰囲気がありますね。あまり今、他になくなっちゃってるので。

「我」夏の楽しみっていう感じ？

「塩」大人は生ビール解禁だ、みたいな感じですよ。あとは焼き鳥とかね。いっぱいあります。あとは焼き鳥とかね。いっぱいあります。そんな感じですかね。あとみんなお土産に持って帰る人が多いですね、焼き鳥とか。

雨降ってもやる

「我」これはどれくらい時間で準備されるんですか？

「塩」みんな慣れてきて、今年は多分一日。

「山」話は一か月くらい前から。準備は当日。

「我」中止した年とかはない？

「山」それはない。

「塩」雨降ってもやるもんね。だってこれ延期にならないから。大雨降ったから明日ってわけにはいかないんで。多少の雨でも、小雨決行ですね。雨降るってわかっている場合はもう全部テント張って。

「我」みんな楽しみにしてますもんね。夏の楽しみっていうのが続ける原動力なんです。今までお二人はお祭りの中心的な立場で関わってきた？

「塩」いやいや。代々上の人たちがいて、今ちょうど、たまたま山内会長あたりが観光協会の会長をやってもらってるので、我々の年代の上の人たちもいるから。その上の人たちも手伝いに来て。まあ、歴代の区長さんたちが。私も区長やったし、みんな区長やってるからみんなでお手伝いして。これはやっぱりみんな区長経験してるから、みんな手伝いましようってなるんでしょね。

「山」一人ではできないから。まあ、町内をひとつにまとめるっていうのもあるんじゃないの。「塩」他の町内はどうなってるのかあれですけど、我々の町内は二年ごとに区長さんが交代して。みんな二年ごと。だから十年やってれば五人の区長さんがいるし。二十年やってれば……

「我」どんどん増えてくる(笑)。「塩」区長さん経験者はみんな一緒に手伝ってくれるので。

「我」人手が足りなくなるってことはない？

「塩」まあ足りないけど、実はね。

守んねえとダメだって

「山」昔やめようかっていう時があったんだけど、重鎮の人がいて、「絶対ダメだ」って。亡くなっちゃったけど、すずや食堂あっべね。

その旦那さんが重鎮。守んねえとダメだっていう。そういうのを見ると我々の世代でやめるわけにはいかないよな。

「我」今までずっと守ってきたものを……バチが当たりそう。

「山」毎年同じことをやってないと、嫌じゃない？七日堂(※2)もそうなんだけど、毎年こう……三が日御開帳(※3)やって、四日堂(※4)やって、七日堂があって、同じ流れで一年をやらないと、なんか嫌なんだよね。

「我」落ち着かないみたいなの？

「山」そうそう。

「塩」やるっていう決断もあったのかも。しないけど。そういう簡単な……今年みたいなさ、当然ながらやるっていう可能性もイベントって考えるならやるで良いんだけど、会長始めお寺の関係者もみんなただのイベントだと思ってるから。何百年も続いてくる行事をねえ。

※1 もんでん・柳津町内で行われる歩行者天国イベントのこと。

※2 七日堂裸詣り…p. 125

※3 御開帳…寺の厨子のとばりを開いて、本尊や秘仏を衆人に拜ませること。ここでは福満虚空藏菩薩圓藏寺の御開帳をさす。

※4 四日堂・福満虚空藏菩薩圓藏寺で一月四日に行われる行事。三百六十五枚の般若札が大鰐口からまかれ、これを拾うと良い一年が過ごせるといわれている。

一王町地区

「熊野神社大祭」

柳津町の一王町地区にある熊野神社。その歴史は古く、享保の時代に山名家が建立したものだとも伝えられています。火事や洪水が起きた際には、地区の人々は自分たちの家よりも先に神社の再建に心血を注いだほど、深く捧まれ、信仰されてきました。



そして一王町の子もたちが、かくれんぼや鬼ごっこをしたり、学校の宿題をしたり。熊野神社の主祭神である権現様に見守られながら、のびのびと育ってきた場所でもありました。一王町地区の人々にとって、権現様は非常に近く、親しみ深い存在なのです。そうして権現様のもとで育った子どもたちはやがて大人になり、今では熊野神社大祭の主力となっています。



毎年七月十五日に大祭が行われ、蕎麦や焼き鳥など種々の出店が立ち並んでは大勢の人で賑わう、大忙しの熊野神社。自分たちを育ててくれた熊野神社を守り、さらに次の世代を育てていくために、地区の人々がこの夏祭りを欠かしたことは一度もないのだそうです。

コロナ禍となった令和三年も、御護符や子どもたちへのお菓子を留意し、対策を立てながら大祭は行われました。境内に響く鈴の音と人々の笑い声。出店の賑わいはなくても、地区の人々が途切れることなく熊野神社を訪れ、朗らかに言葉を交わし、権現様にお詣りをしていきます。



ご先祖様が熊野神社の勧請に関わったといわれる山名定喜さんも、熊野神社に見守られ育った子どもたちの一人でした。山名さんにとって、熊野神社はお願い事をしに行く場所ではありません。自分たちを育ててくれた権現様にご挨拶をして、日々の報告をしに行くのだと、権現様への想いを語ってくださいました。

■取材日時

山名定喜さんへの取材（二〇二二年七月七日）（水）

祭礼当日（二〇二二年七月十五日）（木）

■場所

柳津町一王町地区

■インタビュイー

山名 定喜 「山」 一王町地区在住

一王町地区町民「町」

■インタビュアー

我妻 泉香 「我」 地域おこし協力隊

谷野しずか 「谷」 同上

【七月七日午後二時 山名定喜さんへの取材】

安泰を願うってことで 先祖は建てたと思うんだ

「山」 もともと私の家、山名家ってというのは、豊臣秀吉の家臣だったの。大阪夏の陣で大阪城が落城するときに、会津若松の上杉景勝を頼って、越後のほうからずーっと歩いて来たわけ。その人が、山名十郎左衛門維亮（やまなじゅうろうざえもんこれあき）といわれる方なの。それから何代も経って。今から三百三十年前頃。熊野神社を勧請して。うちの繁栄と、安泰を願うってことで先祖は建てたと思うんだ。ところが、明治二十二年頃になつて、町の人たちには拝むところがないから、町の方に寄進したと。二、三年前までは、祈祷が終わったら直会（なおらい）すんべつていうところがあったけども、古くなって。

壊して今の形になつてるわけ。熊野神社も、

大きな火災に二回ほど遭つてね、町の人たちが心血を注いで、協力し合つて自分の家を建てるよりも早く、その鎮守様である、権現様を創建したという記録が残つてる。それだけ町の人たちには、尊い建物だったんだろなと思えます。

「我」 大事にしてて。

「山」 で、なにやつてるかという。旧暦で八月の二十三日に、お祭りをしよう。そして燃えて、新たに建てて。今度は田植えが終わつたところに、みなさんと熊野神社様に感謝して、そこで飲んだり食べたりしましょうってことで、六月十五日になつたわけ。で、現代は七月十五日になつてる。

育て上げられた、 場所だつたんだよ

「山」 我々小さいころ、テレビもない、ラジオもない。たまにくるのは回覧板くらいのもんだから、あそこ（熊野神社）が遊び場になつてたわけ。かくれんぼしたり、屋根に登つたり、お堂の中でどんちゃん騒ぎして、窓からなにからぶち壊してね。暴れ放題でみんなやつて。夏になると夏休みの宿題とかね、勉強もしたり。今考えると変だと思つるのは、キリスト教の牧師が来て。

「我」 えー？

「山」 で、俺らは子どものころだから、行くとか駄玉もらつたりするから、行って。牧師が

神社の中でキリストの話するわけよ（笑）。

「我」 心が広い……

「山」 うん。神様は怒りもしないしなにもしないしさ。そうやってね、小さいころから中学生くらいまでは、子ども同士の連帯感とかね。上級生は下級生を、下級生はまた下の人たちを、順番にめんどろ見てね。みんなこつから巣立つてきた人ばっかやんね。何年たつても、今の年になつてもね。ここから出た人は、権現様っていうものを言えばすぐに、「ああ、あのころあややつて遊んだわいな」って、思い出すに違いないの。それだけ、我々が遊んで、育て上げられた。悪いことも良いこともね、しながら育て上げられた、場所だつたんだよ。

「我」 良いなあ、そういうの。

「山」 だから、あれだけぶつ壊したつてバチもなにも当たらないってことは、神っていうのは、民衆のために願いを叶えたりすることはない。神ってのは、自然だから。自然の恐ろしさを鎮めてくださいって、お願いするところなんだよ。人間つつうのはね、欲深いもんだから、宝くじ当ててくんつえなんてやつもいるけども（笑）。

【七月十五日午後五時 熊野神社大祭当日】

最低限度でも、 用意してやろうって

「我」 このお米（御護符）はどうやって食べるとか……？

「町」 朝ごはんと一緒に混ぜて。

「我」 スルメは縁起物的な感じですか？

「町」 そうですね。お堂の一番奥に、色々上がつてんでしょ？野菜とか。十一時から神主さんが御祈祷に来てくれて、あげたものを小袋に入れたりして、お詣りした人に渡す。

「我」 毎年この、七月十五日に？

「町」 この十四、十五。と、あそこ（小学校方面）あたりから、先の、共栄橋つてあるんです。通行止めにして、テーブル並べて。蕎麦とか、焼き鳥。

「我」 そうだったんですね！今年見れないの残念……去年もそうですよね。

「町」 だから……上り旗も、こつちの通りがメインで、町中の通りは、立てないようにすつて。

「我」 人をあんまり、集めちゃいけないですもんね。

「町」 あんまね。（以前は）子どもさんたち集めてそつちの庭で、花火打ち上げたり。あとここでポップコーンだの、かき氷。ね？あとなんだけ。

「町」 ヨーヨーボールすくいみたいなの……ちつちやいプールで。

「町」結構いっぱい回しながら、若い奥さんとかみんな手伝って。他の地区からも……

「我」連れ立って？

「町」うん。毎年ね。

「町」嫁に行った方とかが、お祭りだからって、子ども連れてきて。それが多いですよ。

「町」多いよなあ。もうてんでこ舞いでもんね？受付な。

「我」そうなんだ。できないのは、悲しい……

「町」悲しい。しょうがねえ。これはどこもみんな中止だものね。

「我」毎年じゃあ、もっと、人がいっぱい？

「町」そうなの。もう、花火大会も、花火、子どもさんのために買って、あの一角で、やりすつと、子どもたちも、そろそろ六時頃になると、ザワザワと集まる。子どもたち来ると、親も来るからね。

「我」一緒についてきてくださいますね。そうなんだ。でも、縮小してもこれだけできるのは、良いですよ。

「町」最低限度でも、用意してやろうって。

「我」中止になったことはない？

「町」ないね。水害あったって、やってたもんな。

「我」すっ……

ここがほんと子どもの遊び場

「我」子どものころから、ここのお祭りはありましたか？

「町」やってきましたよ。ここが遊園地って感

じで。平屋があって、この地区の集会所代わりに使ってました。ここは……色んな催し、やってたんだよな。ここがほんと子どもの遊び場。ここで、鬼ごっこやって。そのころはほら、車もそんなになかったから。フリーな感じだったんだよね。

「谷」今は閉まってますよね……？

「町」普段はね。みんな遊ぶものが増えたから。

だからわかんねえだ、諸説は

「町」熊野本山に行ったときに、三千本の弓矢を飛ばしたことから、あっちこっちに熊野神社ってのがあらしい。

「我」矢が当たった場所に……？

「町」今日の宮司の話だね。熊野神社のっていうと、色んな話があつて。圓藏寺の先代の水野住職に言わせつと、うちのほうで佛寺を揃えたときに、土地を貸し与えたっていう話もされて。山名君のご先祖が勧請したっていう話もあんだよ。だからわかんねえだ、諸説は。

「我」何個か説があるんですね。

天気を賭けて、勝負事をしてたんだって

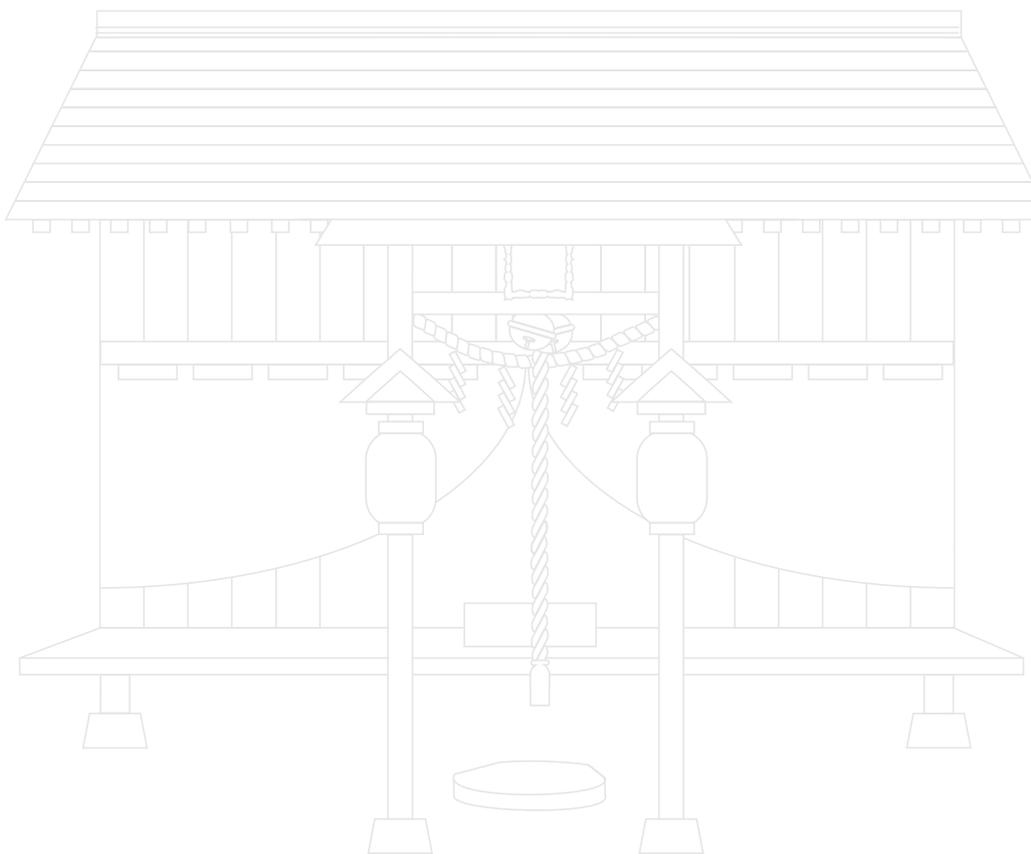
「山」大日如来あんだろ？あれと権現様はさ、七月で天気を賭けて、勝負事をしてたんだって。(大祭の日に)雨が降ったら負け。晴れたら勝ちって。

「町」梅雨時だから、雨降りやすいべ？

「山」今年は、権現様の大勝ちです。

「我」確かに！

「町」(大日如来尊大祭の日)急に降ってきたもんなあ。生ビール半分なくなったのをこいうやって(ジョッキをあげて雨で量を増やし飲む仕事)。雨に負けず頑張ってただ(笑)。



熊野神社の由緒

一王町地区在住 山名定喜

熊野神社（一王町権現様）と山名家の關係の由緒は私が子供の頃親父から聞いた記憶によるものです。この父親は人は良いんですが調子の良い所も多いにあつてちょっと怖い人でした。

いつも晩酌をし気分が良くなると「オイ、ここに座れ」と時々話を始めます。「良く聞け我が山名家は大阪夏の陣で豊臣方に味方した秀吉の家臣であつたのだ。くしくも戦に敗れ大阪城が落城と同時に当時徳川と敵対していた会津の上杉景勝を頼り東海道をさけ、北陸、越後を通じて会津に来たのだ」その祖先が初代の山名十郎左衛門維亮という武士である。と膝を強くたたき、私はいつも嘘だべと思ひながらこの親父よくもまああることないこと自慢げに話すもんだと我慢して聞かされたもんでしたよ。友達なんかに話せませんよ。誰も聞く耳持たないしね。

更に話は続いて3代目の維時という人が農業の外に商売を始めて店の名前を大阪屋とし染物業から屋号を「そめや」としたのだぞ。その時代享保年代（1716年）山名家守護神として敷地内に熊野神社を勧進した。徐々に町内の信仰者が増え明治22年山名家より一王町に譲渡したと記してある。「だから今は家が多少貧しくとも誇りを忘れるな。わかつたか」と声を大きくする。するとおふくろが顔を出し「そうだぞ父ちゃんの言っていること良く見て聞いとけ間違いないのだぞ。お前も大人になって社会に出て他人様と酒をくみかわす時はグズグズ言ったり訳のわからん事言うなよ。嫌われっからな」私はこれはまずい来るなど思つた途端「やかしいわい、このオカメあっちに行つて偉そうにバカタレが」と叫ぶ。こうなつた最後犬も猫も逃げます。それにしても自分の女房をオカメはないんじゃない、じゃ親父は何だ秋田のなまはげでないかいとは思つても言えませんがね。

私は又思う「それは、あなたが多少の稼ぎで酒ばっかりしつかり飲んでるから貧しいんじゃないの」とは言えませんが。とても。私は悪口を言っているのではなく批判しているだけです。山名家と熊野神社の由緒はだいたいこのような事のようにです。

それでも以前は6月15日の例大祭には各商店の outlet や見世物小屋、芝居小屋なども掛けられ夜遅くまで賑わつたと記録が記してある。現在では7月15日が例大祭となつてそれなりに賑やかに続けていますよ。

熊野神社と一王町々民の温かい信仰を物語る史実もあるんですよ。柳津町は古より天変地異が多く発生し、その中でも特に火災が多かつたと町誌などに記してある。ひとたび火災が発生するとその町村はほぼ全焼する大火となる。

一王町も明治、大正と2回大火になり4〜5家残してほぼ全焼する事態があり熊野神社も例外なく焼失した記録がある。その都度町内の祖先は自分の家の再建より神社の再建を最優先し心の拠り所を失わなかつた並々ならぬ努力があつたそうです。本当に先人の方々には頭が下がりますです。

そして昭和、平成の現代。今考えてみると我々後世の子供達はどういいますと、そんな尊い苦勞も知らず神社で毎日遊び大勢で屋根に上り、天井にかくれ、神前で暴れまわり、戸板などこわしても一向に気にしない罰当たりな子供達でしたね。どこの町村の神社もおおよそそういう所だったので。夢中で遊んでいると夕方には必ずどこかの親父が来ては大声で「コラーいつまで遊んでやがんだ早く帰って風呂の水汲めつうんだコノヤロメラ」と怒鳴られ蜘蛛の子散らすよう消えていなくなる有様でしたから。

まあこんな具合でしたが権現様はいつも見守つて育ててくれたんだと思いますわ。当時は子供同士の連帯感や絆があり上級生、下級生面倒はお互い良く見たものです。この町から巣立って都会に出た人達だつて権現様の話題になると皆特別な気持ちになると言ってます。故郷の光輝く大切な場所、故郷そのものなのでしょう。

熊野神社は宝クジ当たりますように、血圧が下がりますように、長生きしますようになど祈願する所ではない。神様が喜ぶような報告が出来る場所なのだ。人智を越えた力を持ちながらもそういう願いは叶いません。熊野神社（権現様）はそういう神社なのです。質問は都合により受け付けておりません。

門前町地区

「愛宕神社大祭」

門前町地区の鎮守社として愛宕山の頂上にそびえ立つ愛宕神社。圓藏寺のほうを向くように建っていることや、大日堂建立や奥之院再建と同時期の建立であることから、圓藏寺となんらかの関係があったと言われています。

この愛宕神社で七月二十三日に行われるのが「愛宕神社大祭」。前日である宵祭では、梅雨明けの夏草で覆われた参道を地区の人々で協力してきれいに刈っていきます。

そして当日の本祭り。社内の掃除が終わると、地区の安全を祈り、月光寺と奥之院の住職がお経を読み上げます。



読経後の直会（なおりい）で、社の中に集まって語り合うみなさんの表情はなんとも楽しげ。朝早くから険しい山を登り、神様のそばで御神酒を汲み交しては地区の交流を深める。人々の信仰心の深さや、神様との距離の近さを感じるお祭りです。

■取材日時
二〇二二年七月二十三日(金)

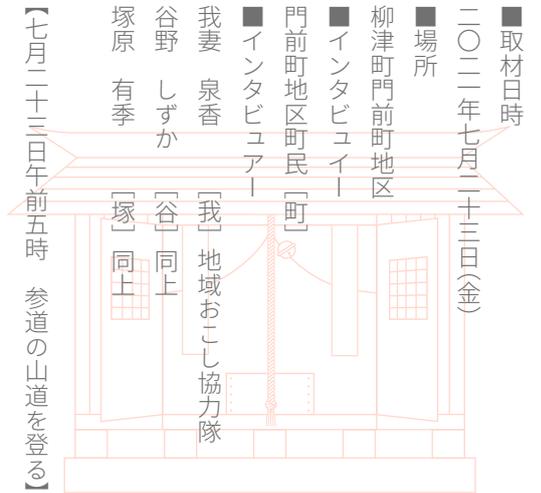
■場所
柳津町門前町地区

■インタビュイー
門前町地区町民

■インタビュアー
我妻 泉香

谷野 しずか
塚原 有季

【七月二十三日午前五時 参道の山道を登る】



こんなに過酷なんですね

「塚」 鎌持ってる。

「我」 草とか刈りつつ行くんじゃないですか？
熊鈴が……熊注意の看板ありましたね。

「町」 大丈夫ですか？普通のスニーカー？
「塚」 はい……

「我」 すでにめっちゃ息上がってる……すごい……こんなに過酷なんですね。

「塚」 休みたい……喉乾いた……
「我」 本音が（笑）。すごいですね、こんなに本当の登山だとは……すごい獣臭い。

（十五分後）

「我」 はあ、はあ……え？もう一回休憩しません？後ろの人が来て、追い越して行ったらそれに着いて行きましょう。

「塚」 はい！そうしましょう。なんか先頭私たちは不安ですよ。



「我」 すみません、先にお願います。

「町」 はい。足痛くなんね？大丈夫？

「我」 ありがとうございませ。

「町」 ダメだ。登れねえ。

「我」 すごいですね、これ……

「谷」 よいしょ……いけるいける。

「我」 なんか飛んでる……うわあ、でかい。なんだろ。アプですか？

「町」 蜂がいますから気をつけてください。スズメバチだから。

「町」 今八合目。

「我」 今八合目？ありがとうございませ！あと一合……（景色を見ながら）わあ、きれい……

【七月二十三日午前五時半 登頂 愛宕神社】

【我】 ああ、すごい……お疲れ様です。寒い寒い。汗が冷えてきて……寒くないですか？

【谷・塚】 まだ暑い……

【我】 今日は一回帰らないとですね。風邪ひきそう、本当に。谷野さんの周り（蚊が）すごいですよ、座ってるからか。煙浴びたほうが良い。あれ、すごい良い匂いしますね。

【塚】 なに燃やしてるんだろ。

【我】 これはずっと火を焚いてないといけませんですか？

【町】 いや、別に（笑）。趣味の問題だよ。蚊除け。

火と泥棒が来ねえように

【塚】（幟の字を見ながら）「火盜潜消」ってこういう意味だろ？

【我】 あの、火を盗むみたいなのってどう読むんですか？

【町】 「かとうせんしょう」って読むよ。火と泥棒が来ねえようにってことだな。火の神様。火と鎮まるように。愛宕そのものが火の神様だから。

【町】 奉納のお酒持ってきた人？

【我】 すみません持ってきてないです……

【町】 うそー？信じらんねえ！来年も来てもらわなんね！（笑）

六十でない人がほとんどいねえから

【我】（お地藏様の前掛けの字を見ながら）ここに書かれてる矢部さんというのは？

【町】 最高齢のおばさま。八十過ぎだそうですよ。

【我】 さっきお話しした方？全然見えない。六十几つぐらいいかなあって思ったんですけど……

【町】 そんなゴマすつても（笑）。六十でない人がほとんどいねえから。女の三人以外は六十以下の人は四人しかいない。

【七月二十三日午前六時半 読経後の直会】

やっかあなんて集まって

【我】 おいしい。御護符？紅白まんじゅうかな。

これは御護符ですか？

【町】 まあ、似たようなもん。お供えしたのだから。はいどうぞ。中入って。

【我】 枝豆！すごい、朝からこんなに……すみません。じゃあ、失礼します。

【谷】 神様のいるところで宴会してるっていうのがすごく新鮮な気持ち。

【町】 最近は大入りだから（笑）。昔は御神酒一升持って来てたの。俺たちが若い、十年も前だけど、やっかあなんて集まって、御神酒

足りなくなってる。当時の平田区長が「じゃあ、酒もう一回取りさ行く」って酒取りに行ってる。

【我】 すい。往復して？

【町】 で、お昼前頃まで이었다。

【町】 あと、ハルオさん区長の時に、大間のマグロなんて持って来たよな。で、ここでマグロさつまみに。

【我】 マグロ！？ここまでマグロを？

【町】 戦後、俺たちの親の時代は、ここで博打やってたの。花札やって遊んでた。

【我】 神社で花札！（笑）

【七月二十三日午前七時半 下山（反対側のゆるやかな参道から）】

歩いて、登って、お詣りしてたんだよ

【町】 登ってくるとき、きつくなかった？

【我】 きつかったです……こんなに本格的な登山だとは思わなかったです（笑）。

【町】 こっちは散歩道みたいなもんだけど、途中でやっぱ高い低いがあるから。

【我】 でも、今のところすごい歩きやすいです。

【町】 昔は結構この道通ってお詣り来る人いっぱいいたんだよ、町内中に。

【我】 そうなんです。愛宕神社に？確かに、さっきの急な道を通ってくるのは……

【町】 なかなか大変だから。

【我】 すい。みなさん毎年、あの登山をやられてるんですもんね。

【町】 うん。来年は登れるかどうかかわかんないや。歳だから。

【我】 いや……でも、私たちでもだいたいぎつかったですもん。運動不足で。いやあ、恥ずかし

い（笑）。この愛宕神社のお祭りは、何年ぐらい前から続いているんですか？

【町】 むかしっからだよな。俺らが生まれる前からだよ。

【我】 じゃあ子どものころから登山して？

【町】 うーん……子どものころは愛宕山なんっていうのは、あんまり関係なかった。大人になっってからだよ。

【我】 愛宕神社のお祭りは毎年欠かさず？

【町】 そうだね。百年以上になるんだっけな。

【我】 そっか。みなさん、生まれる前からっておっしゃってましたもんね。雨とかが降ってもやるんですか？

【町】 やる。今はお詣りする人もあんまりいなくなっただけ、昔は女の人たちが若いときは、みんな森林公園のほうから歩いて、登って、お詣りしてたんだよ。

【我】 そうなんです。やっぱり森林公園側から行った方が少しは楽？

【町】 やっぱあの坂登るよりは、楽は楽だよな。

【我】 お祭りのときは、急な坂を登るのが欠かせないものですか？みなさん頑張ってる……

【町】 そうそう（笑）。

【我】 愛宕神社も百年ぐらい前からあるってことですか？

【町】 百年以上じゃないかな。

【我】 誰が作ったとかは残ってないですよ？

【町】 いや、残ってるよ。あの（お堂の）中にちゃんと書いてあるから。どこが誰がなんぼ出したとかさ。

柳津町観光協会

「九月堂おこもり」

九月堂おこもりは圓藏寺の祭祀行事の一つで、九月三十日に行われます。もともとは圓藏寺に大勢の信者が集い、菩薩と共に一夜を徹して、福徳円満開運招福を祈願したことから始まったものだそうです。

かつての九月堂おこもりでは、夜通しお経や和讃を献じるほか、出店や茶屋が立ったりと、全国各地から信者たちが集まり、柳津町は大いに賑わいを見せていました。昭和の時代には町内を練り歩く奉納仮装踊りもありましたが、昭和天皇のご崩御の際に、喪に服して全国のお祭りが中止になった時から途絶えてしまったのだとか。



昔から受け継がれてきた、お寺の行事である九月堂おこもりの伝統を残したい。そんな思いから、今も柳津観光協会では毎年、奉納仮装踊りや念仏太鼓を行事として行っています。令和三年は新型コロナウイルスの影響で、圓藏寺でご祈祷のみが行われましたが、今回の取材では、柳津観光協会の金坂富巴子さんにお話をお聞きすることができました。

■取材日時

二〇二一年十月十五日(金)

■場所

柳津観光協会

■インタビュイー

金坂富巴子 「金」 柳津観光協会事務局員

■インタビュアー

我妻 泉香 「我」 地域おこし協力隊

どんちゃん騒いだんだって ことなんです

「金」 九月堂おこもりっていうのは、お寺の行事として、昔はあそこのお寺にこもって、ね。大昔はお祭りもなにもなくて、楽しみがなにもなくて、そこでどんちゃん騒いだんだってことなんです。まあ、なんていうんですか？ 本来は菩薩と共に一夜を徹して、福徳円満開運招福を、祈願しましたよっていうのがこちらの始まりなんですけれども。どんなことするのって言うと、奉納仮装踊りっていうのをおこもりの、行事としてずっとやってたんですね。それがこの観光案内所のこと、道路半分まで、道路の許可を取って、まあるく円を置いて。トラックの上にやぐらを立てて。

「我」 すぐそこ、駐車場で？

「金」 ーこです。そのために、トラック専用のやぐらを作るんです。お囃子(はやし)保存会の人にお囃子してもらって、仮装して奉納踊りとして、会津磐梯山を踊るんです。で、商工会の女性部さんが念仏太鼓っていうのを

ね、復活させたので。その日、圓藏寺でこの念仏太鼓の奉納もするんですね。その後、大平、岩坂、寺家町、諏訪町、一王町と町内五か所。巡るんです。で、今度巡るときに、これがコロナで去年今年はやってない、一連のおこもりの行事になります。観光協会のおこもりで、このやぐらを積んだトラックで、私が各町内を案内して回ります。「町内のみなさま、これから念仏太鼓奉納がありますので、どうぞご覧ください」っていうことで回って。そうすると当時、商工会女性部の会長だった武田会長が今、念仏太鼓の保存会やってらっしゃって。口上を、するんです。えっとね。「あららいさーこららいさー」っていうのがあるんですよ。



「我」 かつこいいい!

「金」 「来たぞー来たぞー」とかって。ぜひ聞いていただきたいんですけども、これをやりながらこの人たちが舞うんですけど、前の列の人が太鼓をくるくるしながら叩いて、後ろの人たちは踊るんですよ。

茶屋が立ったんですって

「金」 明治大正のころだったと思うんですが……夜通し祈願して、お経とか和讃をして、和讃の会の人たちもいるんですけど、圓藏寺で、「山ねこ」と評した、茶屋が立ったんですって。昔は。本当に随分昔だったんですけど、で、講中の人とかが泊まりに来ていて。ここに、おこもりの次の日の朝ってというのは、年に二回しかないお寺のご開帳があつて。あの全般若(※1)があるんですよ、朝四時に。信仰がある方々、講中の人たちは、そのため泊まられたり、内田屋(※2)さんとか、あちこちに泊まられて。朝の御祈祷(※3)ご開帳、全般若を受ける。普通の御祈祷って大体二十分から三十分なんですけど、これは四十五分ぐらい。色んなお坊さまたち来られて。お経をバラバラってやるのをやって。

誰だかわからないのが 良いんだと思います(笑)

「金」 昭和になって、私たちの子どもころに、

どんなことをやってたかという、奉納の衣装があつたんです。こういうふうには。

「我」 わあ、かわいい。

「金」 各町内が出し物をして、トラックを出して。歩いていくわけなんです、テーマがあつて。

「我」 この時のテーマはなんなんですか?

「金」 これ、どこの地区ですかねえ。

「我」 あ、地区(※4)になんかあるんですか?

「金」 そうなんです。一王町、諏訪町、寺家町、岩坂、大平っていうふうには、各地区でテーマを決めて。この人たちはなんですか?ハワイアンですかね。

「我」 ハワイアンばいんですね(笑)。地区(※4)に違ふんですね。おもしろい。

「金」 これ、竜宮城、浦島太郎ですかね?こんな感じで、役者が揃って。なんか見たような人、おそろくいらつしやるかと思うんですけど。ねえ。ちよつと私にはわかりませんが……

「我」 見覚えがあるような気もしますが……

「金」 ねえ、あるような気もしますがね。こんな風にトラックに乗って練り歩くんですけど、誰だかわからないのが良いんだと思いますが(笑)。ちよつとわかりませんね。わかる人はわかるのかな?

「我」 すこい規模ですね。

「金」 そうなんです。こんなことをやっていたので、町内の子は九月三十日は小学校を午前中で帰れたんです。

「我」 なんて衣装なのかとかは?

「金」 菩薩様と一夜を過(※5)すっていうときに、誰だかわからなくても、誰でも受け入れるよ

うになのかなんのか、なにかあるかもしれないですよ。わからないけど、ずつと衣装なんですよ。唯一ですよ、柳津のこういつたやつで。

「我」 不思議。よくあるのは、神様とか幽霊たちと同じような格好をして一緒に楽しむとか、そういうのは外国とか日本でもありますがね。

「金」 そういうことなのかな?

「我」 神様をもてなしつつ、神様とも同じような……人ならざるものの格好をして楽しむ……というのかもしれないんですけど。

「金」 もしかしたらそうなのかもしれないんですが、昔のは、これありきで。そして、代々こういつた衣装から、こういうふうにしてきて。で、その上で演芸会をやるのは、その日にお寺さんもいらつしやるんですよ。夜も、身代わり本尊の会館(※3)があるじゃないですか。そこでお経が上げられるんですよ、お坊さまたちが。で、その後九時から、演芸会っていうのをやるんですね。

「我」 わりと遅めの時間なんですね。

「金」 その後のど自慢(※4)したりして。元々は有志でやってたそうなんですけど、私に代わったくらい(※5)のころから、観光協会で段取りをするようになって、賞品が瓶のぶどうジュースとかになつたりして。とつても昔ながらというか、それが楽しみで、みなさんいらつしやったりだとか。それも今途絶えて、なくなつて。夜九時過ぎにお寺に行つて、カラオケに行つて。民謡を聞くというのが時代的に人が集まらなくなつてきたというのはあると思うんですけど。

「我」 やつてたときは何時ぐらいまでやつたんですか?

「金」 私は十時には帰つてましたけど、十一時半ぐらいまではやつてたんじゃないですかね。

「我」 それもおこもりみたいですね。

「金」 おこもり演芸会っていう名前前で、演芸を楽しむ。そうすね、一種のおこもりですよ。全盛期は色んな人が来ていて、終わつたら汗をかいて上がつて、食堂もあつたんですよ。

「我」 食堂まで!

「金」 あつたんですよ、あそこ角のところがおでんとかビールとかラーメンとか出していたので。

「我」 あつたんですね。良いなあ。今も欲しい。

「金」 ねえ。その昔は行楽で来て、お弁当広げて、会館で食べられたり、芝生のところでもみなお弁当広げてご飯食べて、そうかと思えば団体さんぞろぞろ来て、このあづまやさん(※4)も、昼間は食堂(※5)だったんです。

※1 全般若会(たいはんにやえ)・p. 38

※2 旅館内田屋・圓藏寺付近の柳津温泉旅館のこと。

※3 圓藏寺会館・福満虚空藏菩薩の身代わり菩薩が安置されており、普段公開されてい御本尊の代わりにお参りすることが出来る。

※4 塔之坊 あづまや・圓藏寺付近の柳津温泉旅館のこと。

※5 塔之坊 あづまや・圓藏寺付近の柳津温泉旅館のこと。

砂子原地区

「センドムシ」センドモウシ」

「センドムシ」は柳津町の秘湯、西山温泉郷がある砂子原地区で晩秋の頃に行われる行事で、別名センドモウシ、センドウムシ、たいまつぶちとも呼ばれます。一般に行われる「千度詣で」との関連も考えられますが、砂子原のセンドムシは音だけが残り、その意味は失われています。

行事の日、たくさん燃え草を着せた巨大な御神木が、地区内にある熊野神社の境内に立てられます。藁やクマザサ、豆殻、竹……この種々の燃え草は単なる火種ではありません。交互に着せられた藁やクマザサによって御神木は美しく装われ、火がつけられると豆殻や竹はパチパチと音を立て、「センドムシ」の夜を賑やかに彩るのです。



燃え盛る御神木から、地区の人々は各々手に持った麻殻のたいまつにその神聖な火をいただいて、互いに打ち合って厄除けとします。やがて太鼓の合図で打ち合いを終えると、御神木が燃えたあとに残った炭を互いに顔へ塗り合います。これもまた厄除けになるのです。

砂子原の人々は、昔から杉を植えて生計を立てていました。今もその名残で、各家で何本か杉の木を持っています。センドムシで使われる御神木は毎年、厄年の人が持っている杉を切り倒して使いますが、昔は長さも太さも今の二倍はあったのだとか。燃え草も今よりもずっとたくさん必要で、地区の小学生たちが学校終わりに少しずつ、一週間かけて学校裏の山から運んで来たそうです。大変な力仕事ですが、「センドムシ」には子どもたちの楽しみも。今では翌日の朝には火を消しますが、昔は「センドムシ」の晩から一週間ほどは火が燃え残っていたそうです。学校の休み時間のたびに抜け出して、芋やムカゴをくべておやつにするのが楽しかった、と語ってくれる地区の方もいました。



時が経ち、その規模は変われど、「センドムシ」は二百年以上にもわたって連綿と続けられています。「何事があっても休まん」、地区の人々がそう言って続けるのには深いわけがあります。かつて一度だけ休んだ年の翌春に地区内で大火が起こり、神社を含め村のほとんどが焼けてしまったそうです。そのつらい記憶が「センドムシ」と共に受け継がれ、地区の安寧と息災を願う強い思いとなって、行事を行う人々の心の中に今も息づいているのです。



■取材日時

二〇二一年十月二十三日(土)

■場所

柳津町砂子原地区

■インタビュイー

砂子原地区町民 [町]

■インタビュアー

我妻 泉香 [我] 地域おこし協力隊

塚原 有季 [塚] 同上

【十月二十三日午前八時 熊野神社 準備】

五百年近くに なるんじゃないのかな

[我] センドムシは「千灯し」って聞いたんですけど。

[町] 千度燃す。

[我] 千度燃やす？

[町] 千度申しとも言ってたけど。

[我] 「燃やす」が変わったってことなんですね。(※1) このお祭りって何年前から行われてるんですか？

[町] どうだったかなあ(笑)。

[我] 百年以上……？

[町] 五百年近くになるんじゃないのかな。たぶん。

[我] 五百年前！？やっぱり長いんですね。それからずっと欠かさずに。

[町] たいまつ持って足打つっていうのもねえことやるのはここねえだよ。歳の神

はやらないから。

[我] 確かに、この時期に。足元に厄があるってことなんですかね？

[町] 前は全部に当ててたけど、今は危険だからってことで。

[我] 足だけで。

[町] 膝から下ぐらいだよ。俺ら小さいときは学校の先生来るからさ、そんなさ硬いにか入っというて。

[我] ええっ！？子どもが？日頃の恨みみたいな？(笑)

[町] 日頃の恨み(笑)。あとは焼き芋。ここの中に芋入れといて、食べながら帰る。

[我] 楽しいですね、やっぱり。そういうのができると。子どもたちも多かったですね。

[町] 多かったですね。

[我] 毎年この時期は寒いですか？

[町] いや。毎年はそんな。特別じゃないかな？

[我] そうなんですね。

[町] 旧暦でやってるんで、去年は十一月三日ぐらい。

[我] そんなに遅くなることも。

[町] 旧暦の九月十八日。

[我] その日はなにか由来があるんですか？

[町] わかんねえ(笑)。

[我] こっちじゃとんど焼きはやらない？

[町] ここはやらない。

[我] じゃあ、正月飾りもこの日に燃やすんですか？

[町] 古いお札とかそういうものは今日持ってきて、御神木にくくりつけて燃やす。

[我] ここだけですすよね、この時期にやるのは。

[町] 昔は、久保田って集落あんのな。そこと来るところに湯八木沢ってあったでしょ。

[我] そうなんですか？

[町] 久保田が山向かいであるから、そっちに火がつくと、じゃあおらほうでもつけんべっていうようなことやってたんだけど。

【たいまつ作り】

昔の人たちは うまあくやっただよ

[我] なにかお手伝いできることありますか？

[町] このくらいのやつを、藁で束ねるんだよな。

[我] これは素材なんなんですか？

[町] これ麻殻。昔、色々織物に必要な麻。皮を剥いで。皮を剥ぐまでは、取った生木を水に浸して、しばらく置いて、外の皮はいいで。そして、薄皮と中身のあれを分けるようにやるのな。それできれいにやって、真っ白なのが

が出てくんのな。

[我] こういうものなんですね。意外と丈夫

そうな。

[町] この麻殻を使ってやってるってことはもうないな。

[我] 結び方がありますか？難しそう。

[町] 藁をこう、くるくるっとして、挟む。

[我] ええっ！なんか見ると簡単そうに見えるけど、やると絶対できなさそう。ちよっとチャレンジしてみたい。

[町] 昔の人たちはうまあくやっただよ。色んなロープがあったり。

[我] ここに入れば良いんですね？難しい……二箇所ぐらい？

[町] 四箇所。合わせて。

[我] 合わせてよって？わあ、すごい。難しいな……結んでるのは藁なんですよな？

[町] 藁。四箇所やって。上は太くなつから。

[我] すごい、留まる。便利ですね。

[町] 平らにして、太いほう逆さにして。(たいまつ)の端を地面に打ちつけて揃えてみせる)

[我] 最後にトントン？確かに。これはちよっと直します。格好が悪い。

[町] これに火をつけて、膝から下を打ち合う。たいまつぶちって。

[我] これが……！これに火をつけるんですね！これはじゃあ、よく燃えるものなんですね。

[町] うん。無病息災。

[我] 叩かれるのが良い？あ、でもそんなに痛くない。

[町] (たいまつで頭を打ちながら)痛くないよ。

[我] なんかこれ楽しいですね、ずつとやっ

てると。

「町」初めておめたちやってっから楽しいんだよ。

「我」ずっとやってるとうんざりしちゃっう？

「町」やるうと思つとよ、今日みたいに雨降つてると出てくんの嫌だもん(笑)。本当は女の人もつとっぱい来てやってた。

「我」今日は小学校の……？(同日に小学校の文化祭が行われている。)

「町」雨だから。雨降ったからあんま来やん(笑)。

「我」そういうことなんですな。

「町」あっち(御神木を立てる仕事)は男の人たちがやる。

「我」力仕事は、男性がやる？決まってるんですな、役割が。このたいまつは人数分あるってことですか？

「町」ええ、たいまつは来た人に一本ずつ。そして一本では足りない人もいるので、燃え切ったらまたもらって。

「我」じゃあ、本当にいっぱい作らなきゃいけない。

「町」ここに火ついてぼうつとなつてからだから、十分くらいしかやる時間はないのね。そんな一時間もやってるわけじゃねえから(笑)。

「我」そっか。そんなすぐ燃えちゃうものなんですな。

「町」火が燃え上がっちゃまって、そうすつとたいまつもだんだんと。

「我」やっぱり参加できるのは砂子原の人だ

けなんですか？

「町」いや、そんなことはない。このために帰省して、混ざっていたり。見る人もたいまつで叩かれて(笑)。だから一緒にやったほうが。

「我」えつ、やりたい！良いですか？

「町」良いですよ。

「我」やったー！うれしい。

「町」なんぼ作つた？

「町」あと三束か四束。

「町」そろそろだな。(麻殻を)買いに行かななんねえな。

「町」折を見て。栃木だな。ここからちょうど南の角に中禅寺湖があるのね。中禅寺湖があつて、同じくらいの距離の先つちよにあるの。

「町」鹿沼。もう鹿沼しかねえだもん。昔はこの村で全部してたけど。

「町」作らんになつちやつた、大麻だから。

「我」そっか、麻。育てなきゃいけないんですもんね。

「町」麻は勝手に作らんにからな。

「我」そうですよ。怒られちゃっう。

「町」怒られるより罰則だ(笑)。

だいたい厄年の人があげる

「町」俺は山に行って、御神木切りを手伝ってくるから。

「我」それは誰かの御神木なんですか？

「町」そうそう。だいたい厄年の人があげるとか。そういう感じ。

「我」自分の御神木を……えっ切つちやた人はまた新しい御神木を育てるんですか？

「町」いや、それ昔はさ、常に植林して手入れしてたから、どの家にもあつただけだ。今、あんま杉植えてないじゃん？誰も。だからなかなか、ちよと良いのがないのよ。

「我」確かに。おつきいですもんね。

「町」こんな太いやつを切つて、上のほうだけ取ると、これがまた重くて大変だしさ。やっぱり十年十五年ぐらいのやつが。

「我」どなたの御神木なんですか？

「町」トモヒ口君。

「町」俺じゃないよ。俺の兄貴。

「町」(厄年が)重なつたとき、どうするんですか？

「町」そしたら、一番年上の。今回まだ取りやすいところだつたと思うよ。でも、もう細いのねえわ。これ用に植えとかんななんね。

御神木を立てるときに 緩まないように

「我」薪割つてる。薪ですよな？

「塚」すこい硬そう。

「町」御神木を立てるときに緩まないように。杭を作るの。それを両端に差し込んで傾かないように。

「我」へえ、大変。色んなことやらなきゃいけない。

「町」色々使いがあるの。

「我」そんなこともやらなきゃいけないんだ。……すこい。物自体はなんの木なんですか？

「町」これ、栗の木。栗の実なんべ。

「我」ああ、硬い。そうなんだ。本当に色んな植物と色んな木使いますね。すこい。

「塚」掘つてあるんだ、下。重そう。

「我」(御神木を立てる穴を覗き込んで)そんなに深いんですか、その穴って！？

「町」一メートル三十くらいあるね。そのくらい深くしないと、立てたときに安定しないから。

昔はきれいだったの

「我」御神木、本当に丸々一本なんですな。すこい。藁とかをつけていくんですか？

「町」うん、藁をつけたり、豆殻とかね。よく燃えるように。

「我」あ、クマザサ！

「町」あれをすうつと(御神木の周りに)やって、それから藁やって。

「我」へえ、あれを使うんですな。すこい、色んな植物が必要ですね。藁と麻とクマザサと、杉と、豆殻とか。本当に色んなものを使う。

「町」ずるくなつて、こうやってやってつけど、昔は違つたの。稲藁のところがあつた。あそここのとこ全部(クマザサを)さしてた。

それが大変だった。人がいなくなつたから、今はまとめてやつちやう。だから、昔はきれいだったの。外に葉っぱだけこういうふうにな。

「我」やり方がちよと変わつてるんですな。

「町」笹の葉も、稲藁のはかま結んでるのあつて？ああいふふうにくるつと一周やって、そこにさすから葉っぱが段々に……

「我」 ああ、きれい！それは大変、でも。一晩で燃えちゃうものをすくく丁寧……

「町」 さつき竹入れたべした？途中でパアンツで音するから。爆竹の代わりみたいなもの。

「我」 すごい！豆殻もパチパチ弾ける？

「町」 まあ、燃え種だね。あと、じゅうねん(※2)の葉っぱとかあると良いだね。

「我」 それもよく燃える？

「町」 そうそう。

「町」 藁と笹をある程度やったらば、いっせーのせで立てる。立てるのが結局、はしごをみんなで作ってきても、かけてかけて、ちよつとずつ上げて。馬っていうの？馬を止めながら上げて、最終的にドンツで立ち上げるわけよ。それからああいう燃え草を、周りにくつつける。

「我」 手間がすこいですね。

「町」 最終的には四方向、東西南北で、中、洞(ほら)みたいな作って。そこに男の子たちがお詣りして、神聖な火を持ってきて、ヨーイドンで(御神木に火をつける)。そのときに、東が勝てばよくある豊作とか。米の値段来年は良いとかそういうような。

「我」 あるんですね。そこで男の子たちが競争する？

「町」 その男の子が最近少なくて。

一週間かけて運んだの

「町」 ちょっと短かったな。

「我」 これ短いんですか？

「町」 短いよ、今は。前はここ(熊野神社)

の階段の中ぐらいまであった。

「塚」 二十メートルくらい？

「町」 本当に俺たち子どもころから見ると、半分だもんな。御神木の太さだってこのくらいあったから。今年これだべ？

「我」 そうですね、ちよつと、細め……細めって言ったって、一本の木。これで、小さくなってるんですね……

「町」 小さい。だからこの今、子どもがいなくなつたから、この辺りにあった木(燃え草)あるじゃない？このやつだつて、俺たち子どもころは、中学生が切つて。小学生が学校の裏の山あるんだけど、片道、子どもの足で、二十分から三十分かかんの。一週間かけて運んだの。ここまで。

「我」 うわあ！子どもがそんなに頑張つてたんですね。

「町」 そう。それがもう、当たり前だと思つてたから。

「我」 すこいな……わりとじゃあ、子ども達の行事っていう感じだった？

「町」 いや、そうじゃなくて、子どもたちにも教えとこうつて。もう何百年も続いている行事だったから。だからそういうあれで、子どもころから。もう小学生三年生くらいからかな。うわあつつて。で、早く中学生になりたくて。中学生になつと……

木切つて、「おら！持つてけ！」つて。つていうだけで良かったから(笑)。

「我」 確かに(笑)。運ぶのが小学生は、大変

ですね。へえ……すこいなあ。

「町」 どういうあれだかわかんないけど、これ、神事のあれだべした？歳の神なんかと同じで、この西山地区では三箇所。町の公民館の話だと、三箇所しかやってないんだけど。この木も、子どものころは百八本は運んでたわけ。

「我」 百八本！？

何事あつてももう、休まん

「町」 このやつは、一時テレビが入つたりなんかしてたのな。だけど、やめようつていうことになつて。やつぱりあの……この地区の、行事で。観光にやるやつじゃないから。だから大きくしないで、細く長く、続けていこうつて言うことで。だから、二三年……来たかな。で、カメランときに、ライトつけんじゃん？

「塚」 明るくなつちゃう。

「町」 だから、ダメだつていうことで。

「我」 そうですよ。人を呼ぶためのものじゃないですもんね。

「町」 そう。これは……村のためであつて。

「我」 確かに。村と神様に、捧げるもので。

「町」 うん。だから何百年続いてつか、それはつきりわかんない。この、今言つた、明治四十二年だか四十三年だかの時に(明治四十四年に砂子原の大火があつた)、都合悪くて一回休んだ次の春に、この上から、火が出ちゃつて。林に杉に燃え移つちゃうつて。こ

の辺も神社なんかも全部。

「我」 えっ！神社も？

「町」 神社も。こここの村も、六割位(※3)燃えちゃつたわけ。で、絶対やめちゃダメだつていうことで、それからずつと続けてるんだけど。何事あつてももう、休まん。

「我」 絶対にやる。

「町」 昔、茅(かや)屋根だつたの。こここの火さつて危ないときもあつた。

「我」 でも、火事まではいかなかつたんですもんね？

「町」 火事はなんない。やめたときだけ。二十年前くらいかな。町民運動会つていうのがあつたの。それがちよつと、今日の小学校(の文化祭みたいに、同じ日にあたつちゃうつて。で、しょうがないから、村の人たち半分、町民運動会に、半分は準備につて。やつたことは一回あるけど、それでもやめなかつた。

「我」 そんなことを！戦力を半分にしてまで。

「町」 そうそう。これだけは、必ず守つていかなくちやなんないつていうことで。

「我」 や、大事ですもんね、本当に。

「町」 平日でもなんでもやるんだから。わつと会社休んで。

「我」 センドムシだから。

「町」 ……みんな年とつちつたなあ。だから、御神木もだんだんちよつちよつなくなつてきて。

「我」 そうですよ。でも、やり方はやつぱ失わずに、続けて行きたいですよ。伝えたい。

「町」 そう。だいが……昔のあれつていうのは、消えちゃつてつけどな。昔は本当に、きれい

いに作ってたけど。

【我】 さっきのクマザサを、段々にさしてたとか。

【町】 そうそうそう。

【我】 いやでも、子どもたちも、参加してるから大人になったときに……

【町】 やっぱりこういう、行事を少しづつ……虫送りとか。鳥追いとか。そういうやつも、今から三十年前くらいに復活したのかな。

【我】 一時途絶えて……？

【町】 うん。二十年くらい。もう子どもが少なくなつて、無理だつていうことで。俺たち若いころに、復活させて。今も、小さいながらもやってるの。俺たちはどのくらい、こつやつてやつてられつかなあ、もう歳だからな(笑)。

【我】 本当に、だつて、力作業すごい……大変ですよ。重そう。

【御神木立て】

今年の出来は良いんでねえか

【町】 御神酒やんねえとダメだぞお！(御神木の根元に御神酒をかける)

【我】 へえ、そこにお酒をかけるんですね。

【町】 (御神木を立て始める)

【我】 あ、そのまんま行くんだ、すごい。これは人数要りますね。

【町】 ちよつと待って。こつちずれちまった。

【町】 上にあげて。

【町】 良いよー。ちよつと押してみて。

【町】 せーのっ！

【町】 もう一回あげられるか？

【町】 せーのっ！よいしょ！

【町】 川のほう押してください！

【町】 良いですかー、せーのっ、うわうわわ。

【町】 真ん中押して。

【町】 良いですかー？せーのっ！いよーっ！

【町】 良いか？

【町】 大丈夫だ。オッケー、オッケー。

【町】 この上にもう一段欲しいな、豆殻。やつか。

【町】 柴立てるべ。

【我】 すごい。今年の出来はどうですか？

【町】 今年の出来は良いんでねえか。良いほうだよ。

【我】 こんなに立派になるなんて。かっこいいですね。

【町】 これで終わります！

【我】 ありがとうございます。また夜も伺いたいです。

【町】 ちよつと後で、大変なことになるかもしれないので(笑)。

【我】 後で大変なことに……？

【町】 足元、ちゃんと長靴履いて。木綿とか、溶けないような素材のほうがいいな。

【我】 わかりました、ありがとうございます。

【町】 (参加の)お許しが出たな。

【我】 出ました！

【町】 いやあ、良かったあ。良かった良かった。

【十月二十三日午後七時 点火】

昼間と夜とでは、 見る感じが違うよな

【我】 おお！明るい、お宮。夜に見ると雰囲気違いますね。

【町】 お詣りすつぞ。

【我】 お詣りします！よろしくお願いします。

【町】 完全武装してきました？

【我】 完全武装してきました！

【町】 今日は思いっきり叩いてやるからな！

【我】 怖い！(笑) あんなでっかいものが燃えること、なかなかないですよ。

【塚】 夜に見ると、やばいことが始まるんだつて感じがします……

【我】 やばいことが、始まるんですよ(笑)。

【町】 昼間と夜とでは、見る感じが違うよな。

【我】 なんか今のがやっぱ、ドキドキする。

【町】 だいたい集まったよな？

【町】 七時まで待ってくれよう！七時まで待ってくるー。

【塚】 早めに始めようとしてる。

【我】 もう始めたくて仕方がない(笑)。

【町】 絶対燃えるよ。

【塚】 絶対燃えるって言われた(笑)。

【町】 みんな期待してるから燃やしてあげるよ。

はい厄落とし！

【町】 おらあ、もらってけえ。おら、足元

くぞお！

【塚】 あ、ついたついた。オッケー。え、なにこれ？どうやって誰をぶつんだらう……怖いよー！

【町】 なんて怖いの(笑)。

【我】 すごい！(たいまつに火をもらいながら) あ、つい……つきましたよね？

【町】 (足をぶちなながら) 厄落とし。

【我】 わっ！？

【町】 厄落とし。なっ？

【我】 ありがとうございます！(笑)。

【町】 はい厄落とし！はいよー！

【町】 はいはいはい、何回も何回も！ありがとうございます！

【町】 はい、健康でー！はい、健康でー！

【我】 すい……！

【町】 だんだん怖くなってきたなあ(笑)。

【町】 火がない！火いちゃうだい！

【我】 あ、消えちゃった。

【町】 これ(たいまつを束ねてる藁)を解いてやつと燃えが広がるから、よく燃えます。

【我】 ありがとうございます！

【町】 そろそろ終わっぞ。

(終了の合図で太鼓が鳴らされる)

【塚】 暑い、暑い。

【我】 暑い。あつという間だった。

【町】 燃えが良いでしょー。今日は、やっぱり。

【塚】 控えめというかマナーある叩き方でした。

【我】 優しかった。厄落としって。

病氣しない、風邪ひかない

「町」御神酒いるか？あ、ジューズあるよ。

「我」じゃあ、ジューズいただきます、すみません。

「我」こんな一気に燃えるんですね！

「町」燃えますよー。今日はきれいに燃えてんべ？

「我」御神木も残らない？

「町」御神木は残ってる。あつたけえな。正月っばい。

「町」病氣しない、風邪ひかない。これ（御神木が燃えたあとの炭、おでこにちよっと塗って良いかな。ちよこつとだけな。

「我」あ、塗るんですね、それを？塗ってください、ぜひ。

「町」良いな？

「我」塗ってください、ぜひそれは。

「町」よしっ。でろーって。

「我」（笑）これが厄除け？なんですよ。

「町」厄除け。

「塚」初めてこのぐらいのサイズの火を見ました（笑）。

「我」確かに。普通に生きてたら、こんなサイズの火、見ない。

「塚」火って本当にあつたかいですね。

「我」あつたかいですね。寒くない。あれ、お母さん……餅焼いてます？

「町」あの、お宮さんに。

「塚」お供えもの？

「町」御護符。

「我」これが御護符！

「町」今年はよく燃えたよね。去年は悪かったけど。

「我」すごい勢いでしたね。すごい、煙。でも、あんなにおっきいものがこんな一瞬で……

「町」御護符、御護符。はいよ（焼いた餅を差し出して）。

「我」そんな！ありがとうございます。いただきます。

「塚」やったー！ありがとうございます。

「町」これで風邪ひかないぞ。

「我」はい。健康になれる！

「塚」直火ファイヤー餅。

「我」ファイヤー餅。おいしい！炭の味。

「町」ご苦労様です。ストレス解消になりました？

「我・塚」楽しかったです。

「町」楽しいは良いんだけど、ストレス解消になれば良いのかなあ、と思ったの、私は。ほら、ずーっと何年も、今はもう来てないんだけど、やっているとストレス解消にすんごくなるわけ。だから、みんなもそうならば良いなあって。私が楽しいだけじゃなくて（笑）。

「我」確かに。無礼講で、今日は。

「町」それは良かったです。

「我」（柳津町に来て）最初の年にお堂の上で見せていただいたんですけど、今日初めて参加して、絶対こっちのほう楽しい。

「町」それはそつだよ！こっちで（笑）。

「町」今日はこれで終わりです！はい、こ

苦勞さーん。

「我」本当に一瞬なんです。まだ遊んでいたい気が……

「塚」火遊び（笑）。

「我」お疲れ様です。ありがとうございます（顔を塗られる）た……うわあ！（顔に炭を塗られる）

「町」きれいになるように（笑）。

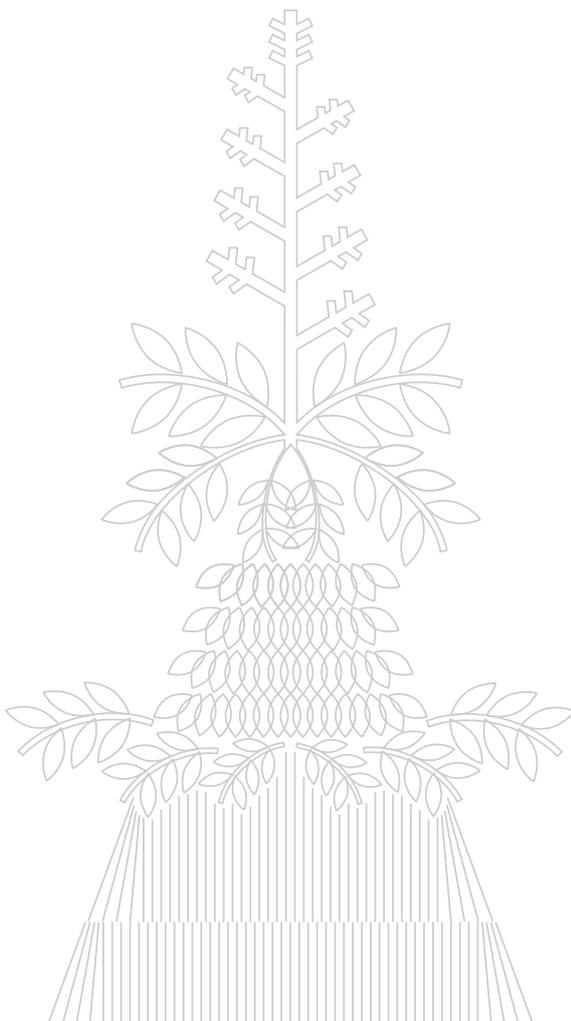
「我」ありがとうございます（笑）。

※1 センドムシの由来：「千度燃す」のほか、「千度申し」「千度詣で」が

変化したものだという説も。

※2 じゅうねん…エゴマの別称。

※3 この砂子原の大火では、住家二戸残り、住家三十三戸と非住家七戸、土蔵十一戸が焼けてしまった。





やないづの家宝展2021

——町民の想いを伝える——

町民のみなさんへの取材を通じて得た、膨大な記録たち。

町の外から来た地域おこし協力隊たちにとって、すべてが新鮮で、大切なやないづの宝物です。

その中から浮かび上がってきたのは、語られる言葉の端々に込められた町民の熱い、切なる想いでした。

先人が残してくれたものを絶やしたくない。地区の絆を失いたくない。

地域の過疎化やコロナ禍にあっても、決して諦めずに行事続けていく——

その想いに感動した私たちは、それこそを展示にしたいと考えました。

形なき想いを、どうやって見せるのか。

私たちは改めて無数の映像や写真を精査し、試行錯誤を重ねました。

「やないづの家宝展2021」は、私たち地域おこし協力隊の、

町民の想いを届けたいという祈りがこめられた展示なのです。

展示期間：2021年12月11日（土）～2022年4月10日（日）

展示場所：斎藤清美術館ライブラリーコーナー

協力：小池勇一 / 船木キミ子 / 胃中地区のみなさん / 砂子原地区のみなさん / 柳津観光協会

伝えるための「選択」

冬に連続して行われるお祭りの取材を終え、春に書き起こしを進め、そして七月。ついに家宝展の展示について考え始めました。そこで迫られたのは、幾つもの「選択」でした。

冬のお祭り

まずはお祭りを「選択」しました。取材を行ってきた全てのお祭りを展示することができない状況から、季節を絞って展示を行おうと考えたのです。その中でも、厳しい冬を耐え忍ぶだけでなく、楽しんで過ごそうという、柳津町の人々の強(したた)かさに惹かれたことから、冬のお祭りを中心に展示することにしました。

ほとんどの作り手が八十歳を超えながらも、力強く藁人形を作り上げていくニンギョウマンギョウ。一度火事に見舞われたことから、決して絶やさないといい想いを胸に、多大な労力と時間を費やして行い、行事中は大人も子どもも心の底から楽しむセンドムシ。

子どもたちと団子を作って飾り、飾った後は子どもたちのおやつにもするなど、冬を暖かく楽しむ姿勢がなによりも感じられる団子さし。

「口ナ禍で開催の危機に直面しながらも、たった十人の有志により、決行された七日堂裸詣り。

この四つのお祭りに絞られました。

協力隊の眼差し

次に、写真を「選択」しました。展示会場に

は、このお祭りたちを象徴する四つの写真があります。

お祭りそのものを象徴しつつ、町の中に入り込む協力隊の目線を感じさせる、ある意味主観的な写真を拾い上げていきました。例えば七日堂裸詣りの、下帯を締める写真。日頃から町民と関わってきた協力隊だからこそ、撮ることができた写真でした。そんな取材の日々に思いを馳せながら、協力隊の眼差しで切り取った写真を選んでいきました。

そのままの言葉

次に私たちが「選択」したのは、「言葉」でした。町民の思いを届けたいという志を抱いていた私たちは、町民の「言葉」に重きを置き、展示を構成していくことにしました。「言葉」を、できるだけ形を変えずに見せることで、そこに込められた町民の想いやリアリティが伝わるのではないかと考えたのです。

お祭りの根幹を表す一文や、その人の思いや人柄を表す一文を拾い上げていきます。そして意味が通るように、けれどその人らしさや、重要な言葉は削らないように、言葉を短く短くしていきました。そうして選ばれたのが「藁を掴む思いでさ」(ニンギョウマンギョウ)、「一回休んだ次の春にこの上から火が出ちゃって」(センドムシ)、「締めつとね、ピリッとする」(七日堂裸詣り)、「家に帰って、団子炙ったんだよーって」(団子さし)という、四つの言葉でした。それらを、写真に寄り添うように隣に配置します。そして心に浮かぶ言葉のように、主

張しすぎず、目に自然と入ってくるように、壁に直接文字を貼りつけ、柔らかな光をあてて展示しました。

目には見えないものを伝える、目に見える「もの」

私たちが「選択」したのはお祭りや写真、言葉だけではありません。お祭りに関わる「もの」たちにも注目していきました。

当初から、私たちはお祭りで使う「もの」を展示したいと考えていました。「もの」を展示することで、「もの」に込められた地区の人々の、目には見えない想いや、制作にかけられた時間が、実感を伴って来館者に伝わるのではないかと考えたのです。

しかし、お祭りが終わると大抵は燃やされてしまうことから、「もの」が手に入りにくい状況でした。

特に、行事の特異性もさることながら、圧倒的な存在感を誇るニンギョウマンギョウの藁人形。これをどうしても展示したいと思った私たちは、初めは自分たちで作ろうと考えていました。しかし、本来は町民の姿を見せるべきである家宝展の展示に、協力隊が制作したニンギョウマンギョウはふさわしいのか?という疑問を抱き、やはり胄中地区の方々に制作していただくべきだと考え、胄中地区へ足を運びました。

過疎化が進み、藁人形の作り手も少ないことから、初めはなかなか承諾を得られなかったものの、胄中地区の方々に何度も相談した末、ついにニンギョウマンギョウの制作が叶ったのです。そこから、私たちは「もの」を集めていくことに

しました。その結果、取材先の方々から寄贈や借用が叶い、「もの」を集めることができました。

あるべき姿で伝える

最後に「選択」したのは、集まった「もの」や「言葉」たちの見せ方でした。私たちが得た感動を、そのまま伝えたい。そう考えた私たちは、できるだけありのままの形で見せるように、工夫をしていきました。

団子さしは、私たちが取材に伺ったときに見た形のまま、植木鉢から大きな枝が生えているような形に。

七日堂裸詣りは、体がそこにあるかのように。鉢巻は、頭に巻いているかのような形を作り、下帯は、協力隊の体実際に巻いて形を作っていました。

センドムシの麻殻のたいまつは、実際に手に持っているように。火をつける位置を上にし、斜めに持ったような形で空中に展示しました。

ニンギョウマンギョウの藁人形は、男女二体の、対であるように。横に並べるだけでなく、ほんの少し角度をつけて、寄り添い合うような形で展示しました。

そうして取材で見た光景のまま展示していくと、そこはまるでお祭りの空間そのものようでした。

無数の映像や写真の中から、私たちがすくい上げ、幾つもの「選択」を経て完成した、「やないづの家家宝展2021」の展覧会。私たちの想いが皆様の心に届いていれば幸いです。

(文責 谷野しずか)





4月



4日 大般若会〈小巻地区〉
8日 花まつり

5月



5日 端午の節句
6月頃 サナブリ(早苗振り)
〈西山地域では六月頃〉

6月



1日 衣替え
晦日 大祓い



10月



朔日 神送り
17日 山の神講〈藤地区、砂子原地区等〉
20日 恵比須講
23日 センドムシ〈砂子原地区〉

11月



8日 粳通しかけ

12月



9日 大黒様の年取
15日 恵比須様の年取
24日 煤掃き
27日 煤の年とり
31日 暮勘定、大祓、節買
その他 歳暮



その他 豆ぶっつけ(小巻の婚礼行事)

柳津町年中行事一覧

※2021年に行われた日付で記載しています。
太字部分は日付が年ごとに変わる行事です。

1月



- 1日 元朝詣り
- 3日 綱打ち講中〈安久津地区〉
- 4日 四日堂詣り
- 7日 七日堂裸詣り
- 13日 団子さし
- 14日 鳥追い
- 15日 小正月(女正月)
- 歳としの神(日付は地区による)
- 24日 愛宕様のお参り
- 25日 文殊講〈西山地域〉
- その他 道具の年取、年祝

2月



- 1日 二月初午
百万遍〈西山地域等〉
- 2日 ニンギョウマンギョウ〈胃中地区〉
- 3日 節分
- 15日 涅槃会(ねはんえ)
- 2月頃 山の神講〈西山地域〉

3月



- 3日 ひな祭り、天神様
- 24日 春の地藏祭

7月



- 7日 七夕祭
- 8日 大日如来尊大祭
- 13日~17日 孟蘭盆会
- 14日~四晩 盆踊り〈郷戸地区〉
- 15日 熊野神社大祭
- 20日 (土用入の日) 虫送り
- 23日 愛宕神社の例大祭〈門前町地区〉

8月



- 1日 八朔
- 10日 霊まつり灯ろう流し
(例年は霊まつり流灯花火大会)

9月



- 1日 二百十日
- 9,19,29日 九月節供
- 30日 九月堂お籠り
天神様祭礼〈藤地区等〉
- 9月頃 神社例大祭〈西山地域〉

参考文献：柳津町教育委員会 『柳津町誌 上巻』 福島県河沼郡柳津町 1977年
「第三章民俗第一節年中行事、第二節民俗信仰」

齋藤清美術館地域おこし協力隊は現在も年中行事の情報を集めています。
お心当たりのある方は、ぜひ齋藤清美術館地域おこし協力隊までお知らせください。 TEL 0241-42-3630

筑波大学×斎藤清美術館地域おこし協力隊協同事業

「祈晴柳津鳥瞰図」

きせいやないづちょうかんず

制作記録

昨年度から続く新型コロナウイルス感染症の猛威。令和三年度も全国で「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」が度々発令されました。この状況は文化面にも深刻な影響を及ぼし、多くの美術館で様々な活動が縮小・中止という憂き目にあっています。

今年で六年目となる筑波大学との協同事業も例外ではありません。本来であれば、学生たちは実際に柳津町を訪れ、当地が育む空気・水・食べ物を味わい、町民と交流することで、町民自身も気づかない町の魅力を発掘し、柳津町をテーマにした新鮮な作品を生み出すはずでした。

しかし、このコロナ禍。「不要不急の」往来は厳しく制限され、学生たちは柳津町を訪れることができませんでした。制作が難航する中、学生と地域おこし協力隊たちはリモートでのミーティングや調査を通して、試行錯誤を重ねていきました。

学生と地域おこし協力隊には共通点があります。それは、ともに柳津町にとっては異郷人であるということ。一方で、地域おこし協力隊は町の住民でもあります。町の中にいる異郷人と、町の外にいる異郷人。両者の視線が交わったとき、新たな柳津町の魅力が見えてくるのではないか。それこそ人と人との交流がままならない今、提案すべき試みではないのか――

今回の協同事業はそこから出発しました。制限下でも、持てる地力と技術を駆使して情報を共有し、制作のイメージを膨らませていく。この地に暮らす者と、そうでない者とのやりとりから、意見の相違が生じたこともありました。そして、コロナ禍の合間をぬって、ついにもにやないづの地を歩き、町民の方々とふれ合えた時の感動。そうしたすべてが血肉となって、協同事業作品「祈晴柳津鳥瞰図」は誕生しました。

六月～八月

リモートミーティング計四回 筑波大学×斎藤清美術館

コロナ禍で柳津町来訪が延期に。実際に柳津町の空気に触れないことには作品案が定まらず、制作は難航。

九月四日

リモート調査 菊地義隆さん「あったどよ」

リモート調査を試みることに。幼いころに聞かされた昔話を書き残す、五疊敷地区在住の菊地義隆さんにお話を伺いました。

九月五日

リモート調査 あかべこ語りの会「昔語り」

リモートで「あかべこ語りの会」のみなさんに柳津町の伝承に関わる昔語りをさせていただきました。

九月五日

リモート調査 武田幹雄さん「町巡り」

リモートでの町巡りに挑戦。観光ボランティアガイド協会長の武田幹雄さんに柳津町を案内させていただきました。

十月八日

柳津町来訪 筑波大学×斎藤清美術館「進捗報告と作品案」

やっと柳津町来訪が叶った制作チームは作品案のプレゼンテーションを行い、美術館の地域おこし協力隊や学芸員とコンセプトをすり合わせていきました。

十月八日

柳津町来訪 金子勝之さん「水と暮らす」

砂子原地区の「ティールーム山ねこ」でお夕飯をいただきながら、オーナーの金子勝之さんにお話をうかがいました。

十月九日

柳津町来訪 天野俊彦さん「善波命と千石太郎」

牧沢地区在住の天野俊彦さんに、西山地域に伝わる伝承について詳しく教えていただきました。

十月十日

柳津町来訪 武田幹雄さん「柳津町の郷土料理」

「河畔の宿 月見亭」の料理長も務める武田幹雄さんに、柳津町の郷土料理について、一緒に作りながら教えていただきました。

十月～十二月

リモートミーティング計七回 筑波大学×斎藤清美術館

作品の方向性が決まった制作チームは、美術館とのリモートミーティングを重ねながら作品を完成へ近づけていきます。

十二月五日

「祈晴柳津鳥瞰図」完成

コロナ禍で作品を設営しに来ることができない制作チームに代わって、美術館の地域おこし協力隊が設営。

十二月十一日 「祈晴柳津鳥瞰図」展示開始

筑波大学×斎藤清美術館地域おこし協力隊協同事業

「祈晴柳津鳥瞰図」

きせい やない づちょう かんず

制作チーム

今年度の協同事業では、

筑波大学芸術系村上史明氏の

指導のもと、

福島県出身の学生が一名、

他県出身の学生が三名、

中国からの留学生三名の

計七名の学生が参加しました。

学生たちは地域おこし協力隊や

町民を通じて柳津町を知りながら、

作品制作に取り組んでいきます。



むらかみ ふみあき
村上 史明

筑波大学芸術系

高校教員、ドイツ・ケルンメディア芸術大学研究員を経て、現在筑波大学芸術系総合造形領域助教。テクノロジーと芸術の関係性をテーマに作品制作を行う。水戸美術館のクリテリウムにて個展「Spyglass」(2008)開催。オーストリアにてアルスエレクトロニカキャンパス展(2011)、つくば美術館にてつくばメディアアートフェスティバル(2015)に参加。第9回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞受賞。



やじま ゆりこ
矢島 由莉子

制作チームリーダー

長野県出身

芸術専門学群四年

ビジュアルデザイン領域



ちょう うき
趙 宇琪

中華人民共和国南京市出身

芸術学学位プログラム二年

ビジュアルデザイン領域



ちょうめいこう
趙 明昊

中華人民共和国青島市出身

芸術学学位プログラム二年

ビジュアルデザイン領域



おう しんえつ
王 新越

中華人民共和国煙台市出身

芸術学学位プログラム一年

総合造形領域



たきなみ けんた
瀧波 謙太

福島県出身

芸術専門学群三年

ビジュアルデザイン領域



いいだ ほのか
飯田 帆香

千葉県出身

芸術専門学群三年

構成領域



みむら いちり
三村 一梨

東京都出身

芸術専門学群三年

総合造形領域

斎藤清美術館と筑波大学の連携プロジェクトは

2016年から継続しており6年が経とうとしています。

東日本大震災による復興支援をきっかけとしてはじまったプロジェクトでしたが、現在は風土・文化などの日本が育んできた地域資源の価値を見直す教育プログラムの位置付けへと移り変わりつつあります。

筑波大学芸術専門学群で開講された授業「ローカルデザイン演習」を履修した大学生達は、フィールドワークや対話を通じて、文化が育んできた地域社会の魅力を発見し、それらを芸術作品によって表現します。

デザイナーや美術教師、作家など、創造的な活動を将来の生業として目指している学生達にとっては、社会との関係において自身の可能性を模索できる貴重な機会となっています。

本年においても、感染症の蔓延による逼迫した状況の中で、茨城から柳津町に来訪した回数は限られてしまいましたが、美術館の学芸員や職員、そして地域の方々の方々の支援によって、作品を形にすることができました。

この場をお借りしてお礼申し上げます。

リモート調査

日時：2021年9月4日（土）～9月5日（日）

場所：柳津町五畳敷地区 / 斎藤清美術館 / 魚淵 / 赤べこ通り商店街 / 圓藏寺 他
（学生たちは各自宅から）

協力：菊地義隆 / あかべこ語りの会 / 武田幹雄

参加者：筑波大学 矢島由莉子 / 斎藤清美術館 地域おこし協力隊 我妻泉香
趙宇琪 谷野しずか
趙明昊 塚原有季
王新越 係長 目黒清志
瀧波謙太 学芸員実習生 久保瑞穂
飯田帆香 齋藤千晴
三村一梨

リモート調査 菊地義隆さん 「あつたどよ」

新型コロナウイルスの影響で柳津町への来訪調査が何度となく延期となった制作チームは、インターネットを利用したリモートでの柳津町調査を試みることに。

柳津の伝承や昔話に関心を持ち、作品に活かしたいと考えていた制作チーム。一番初めのリモート調査となった今回は、幼いころにお母様やご近所のお年寄りが話してくれた昔話を説話集として書き起こしているという、五畳敷地区在住の菊地義隆さんにお話を伺うことにしました。

■取材日時

二〇二一年九月四日(土)

■場所

柳津町五畳敷地区

■インタビュイー

菊地 義隆「菊」 五畳敷地区在住

■インタビュアー

矢島由莉子「矢」 筑波大学学生

瀧波 謙太「瀧」 同上

我妻 泉香「我」 地域おこし協力隊

目黒 清志「目」 斎藤清美術館係長

久保 瑞穂「久」 学芸員実習生

ひとつ語っから、黙って寝ろよ

「菊」昔話はね、親とか年寄りが子どもに、楽しみを与えるなんていうもんでなかったな。ただなんにもねえが。絵本もなんにもねえ。テレビもラジオもねえ。子めらなにやっつかかというところは喧嘩やるわけだ(笑)。そうすつと、やかましいから黙らせるわけだな。むがし語っから、黙って聞けつて。そういうことが一つだな。もう一つは、あのころは着物、母親つうのは。おれはばあさまいなかったからな、親父と二人だべ。そして、子ども五人だべ。その、普通の着物つてのは全部縫ってるわけだ。買うには金もねえし、売りに来なかった。全部反物買って縫ってたわけだ。おれのおが(母)は、毎晩裁縫やってた。夏は外の仕事があつて。で、夜は疲れるから、昔語りやれなんて言ったら、怒られちゃう。黙ってるしかなかった(笑)。で、冬は寒いから、とにかくストーブなんてねえだから。ここで火焚いて、丸い電球の下でやってるわけだ。で、冬寒くてしょうがねえ。そうすつと、凍えて縫えなくなっちゃう。すつと、「今日はだめだあ、早く寝んべ」となつ

から。そうすつと子めらここで火に当たってるわけだから、ぱつと寝床に行つて、「おが、むがし(昔)語れ」と。おがは早くわが眠つてえから、「じゃ、ひとつ語っから、黙って寝ろよ」ということから始まるのが普通。そんで「なに良い?今日はなに良い?」言つて、これが良い、あれが良いつてなる。まあ一つ語ると、あとは寝ろよ、ということにはなつたけど。だけど、それも何年も何年も聞くわけだから。まあ、頭ん中さ残っちゃまっただな。だから、そんな様子で「むがし」つておれたち聞いたの。だから、子どものためにつつう、そんなものではなかった。黙って寝ろつていう。ただ、黙って寝ろつてだけではなかなか寝ねえから。ひとつ語っから、黙って寝ろよつて、言うこと聞かせるために。

おっかねえのがあつたから

【学生の質問…お母様から聞いた昔話をご自身で書き起こされたそうですが、特に印象に残っている昔話は何ですか?】

「菊」特に印象に残つて多つていう話つたつてなあ、おれたちはよくその、これ語れつていうのになつて言つたらなんだべ…:「だんごだんご」、「かおすどきづね(かわうそときつね)」とか。よく語れつて言つたのは、そういうがな(母)そういうものだな。あと、おっかねえのがあつたから。十二月八日、「やさぶるあっぱ」な。「やさぶるあっぱ」つていうのは、昔話の筋で見るとちょっとおかしいだ。その通りにおれたち聞いただけじゃ。「やさぶるあっぱ」つていうのは師走八日、十二月八日は「やさぶるあっぱ」の日つていうことで。温泉に、まあ、おれたちの「むがし」の中では老沢の湯(※1)さ来んだつていう話を言つてたわけだ。老沢温泉に、その斬らつちや手を茹でに来んだ。そのときは、この入り口にざるのようなやつ…:この辺では「ミケ」つていうんだげんじよ、それをかけんだ。それをなんでかけたかつていうと、目つていうわけだ、この穴つぽ。ざるの目がいっぱいあつて見張つてつからよそのうちに入んえつつうこと。それは、おらい(母)おれの家だけのことでなくて、村でかなりのうちでやつたんだ。やさぶるあっぱ」つていう昔話を知つてたかどうかはわかんねえげんじよ。



一体感というが出てくんだけ。だけど、まだ今でも……これ、合併したのは昭和三十年頃だから。何年になったんだ？(笑) まだ、何年にもなったけど、なんとなく柳津、本庁地区っていうのは本庁地区で、西山は西山でって感じ。極力、回るだけではしようがねえけんじよ、そういうものを作ることによって、もっと近く感じられっかって思うだわいな。

聞いたってのが嘘になってしまふ

「瀧」昔話ってイメージ的には教訓とか、そういうイメージがあるんですけど、なにかしらの教訓があるっていうより、どちらかというと直接的に怖くて、子どもをびびらすっていうことが言われてて。さっき子どもたちに話すってなったときに、昔話って結構、他の話でも結末が変わったりとか、ちょっと優しい話に変えられたりすることがあると思うんですけど、そういうアレンジをして話したりすることはあったりするんですか？

「菊」おれら子めらに語るときは、そういう話は出さなかったの。例えば、沼に死体が浮いて、な？そこから帰ってきたら、自分の子どもの首がここ(ふところを指す)に入ってたとか。そういうのがあったの。あるんだけど、そういう話はしなかったの。あの……「カチカチ山」。「カチカチ山」はな、途中でおれが子めらのとき聞いた話だと、ムジナが騙して、ばさまのこと殺して、ばさまをじさま

が食ったっていうことが出てくん。そういうことな、おれたちは聞いたげんじよ。今の子めらにっていうか、おれが語るほうもな。子めらに、じさまがばさまの肉食っただなんっていうことをな、まるつきり語っては……できなくてな。あんま語るほうとしてもやだから。そういう話は最初からやんなかったのな。おれ、そこまで書いてはうまくねえと思つて。こっちさ(最初に書いた説話集)はな、そこ抜いたの。ところがまた、そこを書かないと昔、ばさまから聞いたってのが嘘になってしまふと思つて。今の書き直しには、それ入っちゃの。もっとそこんこまるつきり語つただから。最初書いたときはそこまでは……つて考えたこともあっただ(笑)。だから、今用に直したっていうのはねえな。なにもねえ。

教えてえからばさまたちが喋つたではなくて

「我」お話の中に教訓みたいな、子どもたちに教えるための話はあるんですか？

「菊」ある。この「かおすときづね」だつて、狐がかおす騙して、最後には仇取られるわけだから。そしてあととはな、さっき言つたややこの頭がここに入っていたっていうのは、「かげ(ご)賭け事」だつて。これは、あそこの沼に行つて、女の人が死んで沼に浮いてたんだつて。な？その女の人の頭から櫛とつてきたら一円出すぞつて賭けなんだな。そのい(「その家」)のかあさまが、ちっちゃいやや負ぶつ

て、沼行つて、その櫛取つて来ただつて。したら途中で、死んで浮いてた女が、だらだら着物で追っかけて来ただつて。それで、そのかさまに「これも持つてけ」つて、銭いっぺ(「いっぺい」)入つた財布出しただつて。な？そうすつと、その人は金欲しいから行つたわけだから、一円出すつて。だから、喜んで懐に入つち、帰ってきたら、ここに藁仕事やつた人たちがな、「それなんだ？」と。したら、そっから血が流れてるわけだ。誰かが「背中

のややこ、首ねえぞ」つて。わがふところさは、ややこの首が入つてた。そうすつと、そういう話が終わると必ず、賭け事なんてやるもんでねえぞつて。全部にそういう話があるわけだ。はねえけど。そういう話はおつかなかつた。教訓っていうかな。子めらに対して、ただ、それを教えてえから、ばさまたちが喋つたではなくて、そこまでいくと必ず出ただ。昔の人たち、おらたちに教育なんてしなかつたから(笑)。黙つて寝れば良いと思つてたから。

だから、子どもにこれ聞かせて、賭け事つてのは悪いことだぞつて教えてえからやつたではなくて、そうやって話してつて、最後まで行くと、そういう言葉が出たんだ。「我」でも、そしたら本当に最初につけた人はすこいですよ。それをお話の最後につけておくことで、別になにも思つてない人でも、子どもを自動的に教育できてしまふ……

「菊」まあ、そういうことはあったな。だから、全部にそういうものがついてるんではなくて、これには人は騙すなよ、とか。人を

馬鹿にしちゃんねえんだぞとか。こういうことはやらなんねえんだぞとか。つていうことがあっただ。

誰が持つて来たんだべな？

「矢」質問じゃないんですけど、私、怖い話がたくさんあるんだなつて、びっくりしました。あと、「やさぶるあつぱ」のお話聞いたときに調べてたんですけど、新潟にも似た話があるらしくて、なにかつながりがあったのかなあ、と思つて聞いていました。

「菊」誰が持つて来たんだべな？ここではねえけど、新潟からこっちのほうに大工さんが来たつうことは、前はあつただわな。たまたま大野に行つたときに、「このうちは新潟の大工さんが作つただ」つて。大工さんなんて通うようなかつたわけだから。うち作るなんていつたら一年もかかつたべ。新潟の人だと、そのうちに泊まつて、そうやってやるわけだ。そうすつと、その人たちが向こうの話を知つたら、ここに喋つたりなんかつていうことはあつたかもしんねえしな。あと、あの、まあ、富山のほうからだげんじよ、薬売りつていうのがこの辺回つたからな。家庭の配置薬つてな。薬箱置いてつて、そこに色んな頭痛の薬とか置いてつて、一年過ぎ半年くらい過ぎて来て、飲んだだけ金貰つて。そういう人たちが喋つていつたつてことは、考えられねえではねえけどな。本当にはどうかっていうことはおれんこではわかんねえ。

山のほうの人たちは 「堅えから」って

【学生からの質問…長く住んでいるからこわかる柳津町の魅力などはありますか？】

「菊」これは難しいと思ってんだ、おれは。これは難しい(笑)。答えらんねえと思ってんだ。昔はな、山のほうの人たちは「堅えから」って言われてたんだ。なんていう言葉で言えば良いだ？「堅い」っていうのは、ただ頭が固いじゃなくて、礼儀正しかったり。誉め言葉として、「山のほうの人たちは堅いから」って。たとえば約束を守ったりな。最近はそのような言葉使ってくれる人、誰もいなくなっちゃった。まあ、山のほうって言い方もしたくねえんだらうげんじよ。堅くやる。なんでも約束を守るだとか、そういうことは良いことだと思ってたげんじよ。まあ最近はずっとな、そういう言葉を聞かなくなった。「我」それはこっち、山のほうに住んでる人たちが言いたくないってことなんですか？「菊」いや、他の人がおらあじ(おれたち)のこと山のほうの人とか言いたくない。だから、柳津町の魅力な、なんだべと思う。これは難しいと思う。西山も難しい、魅力っていうのは。西山も前と変わってきたから。昔はやっぱり田んぼ作りっていうのが大変だったから、田んぼ作りに稲作りに、機械が入る前は、みんな助け合っているのがあったのな。ところが機械が入ったら、もう助けに行くこ

だから、遠くからの話つてのがなんでここに
あるのかなって。これは昔話だげんじよ、こ
こには正月にな、「おこづつ」の「っていう行
事があったんだ。これはもともおれが子ど
ものころで終わったはずだ。そのあとはやっ
た記憶ねえから。そしたら、あとのほうでな
んかで見たのは、京都のどっかにそういう行
事があっただ。いや、まったく同じではね
えかもしんねえけど、京都のそういうがなが
あったんだって。京都のその行事、直接ここ
に来るはずねえ。どんな風にしてここさ来た
だべなって。そういうちいちゃい子どもの正
月の行事あっただ。

今の言葉にしたらもつと 軽くなってしまうんでねえか

「瀧」昔話の資料を読ませていただいでるん
ですけど、話し言葉で書かれてるじゃないで
すか。これって先ほどおっしゃった、そのま
ま伝えるっていう心情とかが反映されてるの
かなあって思ったんですけど。どういった意
図で、話し言葉で書かれてるのかなあって。
「菊」言葉な、方言。おれたちは方言ってい
うの、まあ、直しようねえだ。それで喋るし
かねえ。良い言葉、どこに行っても喋って
しまうわけだ(笑)。だから、今の言葉にし
たらもつと軽くなってしまうんでねえか、話
の内容が。ばあとおがは、おれたちと同じ言
葉で喋ってたから。そのころから何十年か、
五十年か六十年経ってらげんじよ。それを今

の言葉にして、ありましたとかそうでしたと
かって、みんなわかるような言葉で書いてし
まうと、話の内容がもつと軽くなってしまう。
そのときの感じが出なくなってしまうべ。そ
れとまあ、こうやって書いておくと、そのこ
ろはこういう言葉使ってたんだっていうもの
が残る。だんだん言葉、今、おれたちの子ど
もとか孫になつてくつと、かなり変わつてくる
わけだから。そんときをやつを書いておくと、
そのころはこういう言葉で喋ってたってこと
が残つから。だから話があんま軽くなんねえ
ように、そんとき言葉で書いた。
「我」確かに。音とかで空気感とかも変わつ
ていきますもんね。

「菊」だからなるべく、その通り、「あつた
どよ」から始まって。「あつたどよ」な(笑)。
これも「むかし」でなくて「むがし」なんだ。

「あつたどよ」語れ」って

「矢」先ほど出てたんですけども、「あつたど
よ」とか、最後の「これで終わんじよ」とか
はついているものなんですか？「むかしむかし」
みたいな感じ？
「菊」昔話って今はな、いっぱいっていうか
昔話の本あんだ。そうすつと必ず、最初のほ
うはわかんねえげんじよ、終わりのほうにな
ると、「これで一つ栄え申した」とか。「栄え
た」っていうな。「めでたしめでたし」。そう
いうものがよく書かれてたのな。「いっちょ
さけた」とか。「栄え申した」とかな。おれ、

なんぼしても、昔話用のそういう言葉、そこ
についたって記憶ねえだ。そうでなくておら
たちはよく「あつたどよ」語れ」って。昔話で
なくて。「おがあ、あつたどよ」語れ」って。
「じゃあ、ひとつ語つから。あつたどよ——」っ
て始まるわけだ。「あつたどよ」っていうの
は「あつた」と「そうだ」と「よ」ってことだべ。
昔、あつたことだぞって。それを「あつたど
よ」って。そう実際始まったわけだ。そして
最後まで行くと、「こんじえひとつ終わんじよ
ぞ」。「こんじえ」っていうのは今でもおれたち使
うだ。これで終わりだぞっていうのを「こん
じえ終わんじよ」っていうのを普通に使ってる
んだ。実際語る中で、そう聞いてた。「む
がし」語れ」とも言ったげんじよ、「あつた
どよ」語れ」って。そう始まんた。「あつた
どよ。昔あるところにな……」そして終わつ
と、「こんじえひとつ終わんじよ。だから黙つ
て寝ろよ」って。

「我」話しのときの、決まり口上みたいな。
「菊」な。必ずそういう出だしたの。だ
から、そういう風に書いたの。その「あつた
どよ」で始まるつづうのは、まあ、おれのは
本にはなつてねえげんじよ、あんまり他のも
ので見たことはねえな。他のは……なにで始
まったべな？
「我」「むかしむかし」とか「今は昔」とか。
「菊」そうだべな。「ざつと昔」とか。そうい
うふうに出てくるけどな。
「我」話し言葉だと、また違った風に始まる
という。

ともねえし、来てもらうこともねえし。助け合いなんていうのがうんと少なくなった。昔はもう当たり前のように、どっかで仕事遅っちゃなんていうと、そんなじゃおれ、行かななんねえってことをやって来たからな。そういうものが変わってきて、な。そんな風になつたから、助け合ってやんなきゃなんねえ仕事にならなかつた。

「我」自分の家でできちゃう、機械で。

「菊」うん。そのうちでできつから、できねえことやつてつと、んなことやんなくて良いべつて。悪く言われつから、な。だんだんそういうふうに変わってきた。前とは違つて。まあ、お葬式なんかもな、家族葬なんてなってきたから。昔は、地区で、みんなで助け合いでやつて来たわけだ。

「我」食器とかも一つのお家でいっぱい持つて、それをみんなに貸してたとか。

「菊」そうだなあ。貸したり借つちやりやつてたわい。やつてたげんじよ、なんにもやることなくなつちまつた。見舞いにも行かなくて良いつてことになつたからな。昔はもうその家のな、うちでお葬式がなんかすつと、全部みんな揃つてねえから、食器を借りたり色んなもの借りたり座布団借りたりやつてたけどな。それが当たり前だった。今はもう、なんにも貸すことも借りることもなくなつちまつた。今は楽になつたげんじよ、そういう付き合いが少なくなつた、な。付き合いつて

いか物の貸し借りもねえげんじよ、人の心もな。じゃあ、手伝い行かななんねえつて気

持ちもなくなつちまつた。あそこできんだから構うことねえだあ、というくらいなんだ。「我」ちよつと寂しいような気も。

「菊」まあ昔から見ればな。ただ、今の時代だからしょうがねえという風になつたげんじよ。今、そういう風になつてきたな。

「我」昔からなら、魅力としては人が助け合つてきたりだとか？雪国だと特に、助け合つて生きていけないから。

「菊」ここなんかは特に田んぼの条件悪かつたから、助けてもらわねえとできなかつた。

「久」どんなことを手伝つてもらつたんですか？

「菊」田植えはもちろんだわな。稲刈りも手伝いがお互いあつたな。稲こきとかな。そういう作業を、お互い手伝つてやつてた。

「久」手伝つてもらつたあとはなんかお礼するんですか？お食事とか。

「菊」田植えの場合なんかはもちろん、食事は昼も夜も、そのうちで出して。だから最高だつたわい、酒飲んで（笑）。集まつてな。

「我」お付き合いにもつながつて良いですね。それは楽しそう。

「菊」そんなことやつてたんだ。だから、あのころから見ると、そういう手間かからなくなつたつうかな。人に世話にならんねえつていう、な。昔、おれたち小さいころは、このうちでも、あそこはいとこだから行かななんねえとかな。この地区全体が、親類は大事にしなんねえぞつていうような空気であつたから。そういうときは行くのは当然だ。近頃はいとこつて言つたつてなんでいとこだつて（笑）。

いやあ、うんと変わつたぞ。あんまり人の世話になんねえようにするべつてなつてきた。

虚空藏様も一つのお寺になつてしまつたつていうかな

「菊」柳津町の良いところ、な。柳津町の魅力つていうのは、もつと広く見てもらわな

いとわかんねえな。おらたち柳津はここが良いとか単純に、たとえば虚空藏様が良いとか、川があつて景色があつて良いつて、それはあんべげんじよ。もつとどういふ風に表現したら良いべかわかんねえな。ここならつていふのはな……ここ行つたらここ寄つてつと、押んでつとよつとかな。昔、虚空藏様なんてなかなか行けねえころは、虚空藏様は大事なお寺だつていふような感じ、おれたちもあつたのな。十三講詣り（※6）は行つてくなんねえとか。ところが、まあ、今でも十三講詣りくらいはやつてるげんじよ、虚空藏様も一つのお寺になつてしまつたつていふかな。

「我」ああ……単なるお寺という距離感に？

「菊」本当は虚空藏様つて言つと柳津の大事な観光と信仰な、柳津は観光と信仰となんかの町つてなつてるけど。虚空藏様が悪いんでなくて、住んでる者が悪いんだげんじよ。一つのお寺つて感じになつてしまつたなあ。

「我」前までの特別な存在つていふ想いが、薄れてきてしまつた？

「菊」だから、なにかのときは虚空藏様なんて

かんで行つてくなんねえつて声は出なくなつ

ちまつたな。大事だけどな、あんな立派なお寺は。あの中の建物だつて、本当に赤べこが引つ張つたかもしんねえげんじよ。けやきの柱、どつから持つて来てどうやつて建てただつて。「矢」すこいちつちやい質問になるんですけど、「じゅうさんこうまいり」つて仰つてたんですけど、「こう」つてどういふ字を書くなつて思つて……

「菊」講演の講、講堂の講、講義の講。「講」つていふのはまとまつてお詣りするなんていふとき、よく「講」つて。たとえば「古峰ヶ原講」つて古峰神社にお詣りに行く講だ。あるいは「山の神講」。この辺では「文殊講」なんて子どもの行事もあつただげんじよ。まとまつてつうことどねえかな。たぶん、その意味はな。だから「十三講」は、数え十三の年の人が虚空藏様をお詣りする。これはまとまつてつうことどねえげんじよ、そんなお詣りするつていふ。

「我」講のひとつなんですな。

※1 老沢（おいざわ）温泉旅館…五畳敷地区にある温泉旅館のこと。

※2 胄中地区のニンギョウマンギョウ…p. 305

※3 砂子原地区のセンドムシ…p. 565

※4 歳の神…p. 245

※5 野老沢相撲甚句…野老沢（こころざわ）地区に伝わる伝統芸能。

※6 十三講詣り…数え年で十三歳のときに圓藏寺へお詣りに行くこと。

リモート調査 あかべこ語りの会 「昔語り」

義隆さんのお話を聞いて、昔語りが語られた寒夜の情景や、それを思い返す郷愁に触れた制作チーム。

二日目のリモート調査では、現代でも語り継がれている柳津町の昔語りを実際に聞いてみることに。語ってくださったのは、柳津町の昔話や伝承を、生きた会津弁で語る活動を続けている「あかべこ語りの会」のみなさん。語られるお話はまさに口伝のものが多く、資料調査では得られない貴重な経験になります。画面越しに昔語りを聞きながら、制作チームは会津弁の持つ重厚な響きと、あたたかな空気感を味わいました。

■取材日時

二〇二一年九月五日(日)

■場所

齋藤清美術館

■インタビュイー

田崎 次子「田」「あかべこ語りの会」会長

金坂富巳子「金」「あかべこ語りの会」会員

目黒 恵 「目」同上

■インタビュアー

矢島由莉子「矢」 筑波大学学生

瀧波 謙太「瀧」 同上

【語っていただいたお話】

目黒恵 『虚空蔵様のご利益 五年の命』

元話：会津美里町の藤本輝吉さん

芳賀知悦好『かみなりの婿になった孫左衛門』

元話：柳津町誌

金坂富巳子『赤べこ伝説の秘話』

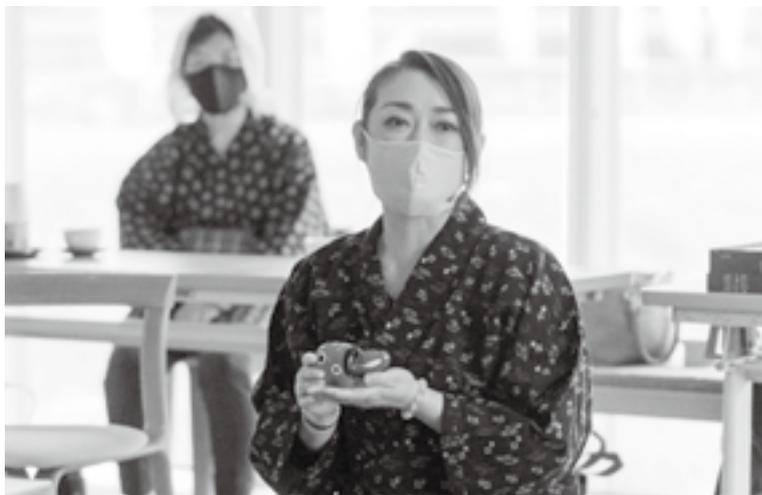
元話：柳津町内の古老の言い伝えより

田崎次子『虚空蔵様のご利益 人の足跡は小判』

元話：会津美里町の藤本輝吉さん

田崎次子『虚空蔵様のご利益 二人の前世』

元話：磐梯町の鈴木輝雄さん



それが、語りなので

「瀧」赤べこ伝説の話の、正しい話っていうか、伝説の詳しい話はどこに載ってる……？
「金」今その、「どこからともなく(赤べこ)がやってきた」って言うことに共通したのが、十年くらい前なんですけども。色んな話が点在していて、しっかり一つにしましょうということ。でも宝海上人(※1)は、実際の方で。基本的には、史実に基づくものがあった。でもそれが、語りなので。こうじゃないと間違え、ってことはなくて。みんな喋る人によって少しずつ変わって行くんですけど、大本の、芯は変わらない。っていうのが、昔語りになります。

虚空蔵様は身近っていうか

「瀧」虚空蔵様の存在が、その……距離というか。すごい偉大な存在なのか、身近な存在なのかっていうのは、どういう感じなんですかね？

「金」私たち子どものころなんかは、「人に頼かれっから気をつけるよ」ってくらい、人がドドドドッて流れるくらい、ほんとに賑わっていて。柳津っていうとその、お寺さんを中心にして、行楽。お詣りと共に、ピクニックだったりね。女の人が旅行なんか許されない時代でも、お詣りに行くことで行けるような。そういうことで、偉大な存在。昔から柳津の人はね、圓藏寺っていうものは、本当に大切

聞く人たちの年齢によって、
変えたりするんです

「矢」赤べこ伝説の話で、慶長十六年とか細かい年号が出てきたと思うんですけども、他のお話とかも、その辺りの年代ですか？
「金」はい。昔語りと、伝説って二つあって。私が語らせていただいたのは伝説の話なので、そういう年号が入るんです。普通の語りに関しては、年号、年代をね、そんなに入らないで。また、聞く人たちの年齢によって、変えたりするんです。

にしてきたところだと思えます。

「目」私は、虚空藏様は必ず、元朝詣りはつきものというか。小さいころから父に連れられて。あとは七日堂(※2)は必ず。カメラの方が、真ん中の柱にやぐらみたいな組んでたんですけど、そこに乗っけてもらって、見た記憶があります。だから、虚空藏様は身近っていうか。子どもが入学したときはお詣りに、保育所に行くにしても入園式のお詣り、お詣り、ってやってたので。自然に虚空藏様にお詣りってというのが、ありましたね。

「田」柳津だけじゃなくなって、地方近所の全部の信者から、疫病になったとき、焼けたとき。みんなに声かけると、喜んで寄進して来られたの。だから、虚空藏様は町だけのもじゃなくなって、国の宝物みたいな。私はね。感じてるんです。

心の道徳みたいな形で

「瀧」こういった活動をされてる、理由みたいなものって……？

「田」昔はテレビだのラジオだのいないときに、語り継がれて、年寄りから、聞いている話なんですよね。それが心の道徳みたいな形で、あたしらに浸透してるもんですから。今もそういうのが必要じゃなかったってことで、七重先生(※3)と話して。あたしも、やってみたいなと思って。今あの、語りあうってところがなくなってるんですよ。語り部っていうところ、形になっちゃいますけども、自然と語れる形。生活。そういうスタイルが欲しいなと思っただけですから、私はそのつもりでやっています。私は基本的なものを習いながら、そこからあんまりずれないように。がんばって語り継いでいきたいなと思ってます。

「瀧」ありがとうございます。

「田」虚空藏様に、ぜひ来てくださいます。

※1 宝海上人(ほうかいしようにん)…慶長時代に圓藏寺の副住職であったといわれる。宝海上人が七日七晩の護摩祈祷を行うと赤牛が現れて、圓藏寺再建のための材木を運んでくれたという「赤べこ伝説」が伝えられている。

※2 七日堂裸詣り…p. 125

※3 五十嵐七重(いがらしななえ)さん…

「あかべこ語りの会」で講師を務める
奥会津の語り部。



リモート調査 武田幹雄さん 「町巡り」

昔語りを聞いて、古き柳津町の姿に思いを馳せた制作チームは、さらに広く、現在の柳津町の姿も知るため、午後から町巡りへと挑戦することに。

インターネット接続の不安定さもあり、リモートによる画面越しの町巡りは難しいものとなりました。柳津町観光ボランティアガイド協会長の武田幹雄さんにお話を聞きながら、制作チームは途切れがちな映像からなんとか柳津町を読み取ろうと試みます。

幹雄さんは、柳津町のことならどんなことでも答えてくれます。昔の町の景色、今の町の暮らし、柳津町に自生する植物の名前まで。そんな柳津愛溢れる博識な幹雄さんのお話は、制作チームがより深くリアルな柳津町を知る手助けとなりました。



取材日時

二〇二一年九月五日(日)

場所

魚淵・赤べこ通り商店街・圓藏寺 他

インタビュイー

武田幹雄 「武」 観光ボランティアガイド協会会長

インタビュアー

矢島由莉子「矢」 筑波大学学生

三村一梨 「三」 同上

我妻泉香 「我」 地域おこし協力隊

そういうしきたり守んないと
悪いような気がするじゃない

「矢」 小さい神社みたいなのがあったと思うんですけど、そういうのってお詣りしたりとかもするんですか？お供えものしたりとか。

「武」 それはね、各地区にある氏神様っていうんですよ。だから、そこだけじゃなくて神社は各集落にあって、そこではそれなりの氏子がいって、神社を守っています。神社の維持っていうのは氏神様がいて、氏子がいって。

それでその氏子が、色んな年中行事を司るっていう形だから。まあ神社によって違いますけども、年間五、六回はある。お祭りごととか、法然祭りとか、あとは……祈願祭、それからおこもりとか。そういうふうなのが結構ありますので。神社はどちらかというと教えじゃなくて行事をきちんとつないでいくのが、神社のやり方ですから。その神社を中心としてやってく形ですね。それをやっぱり、ひとつの村の集約させる印として置いておかないとバラバラになっちゃいますから。みんなこのためにやるんだよって。草刈りだっってそつ、このためにやるんだよって。

「我」 氏子さんが中心になって草刈りとかお詣りも？お詣りは頻繁にやるんですか？

「武」 お詣りは個人任せです。でも、今になって、我々の時代から若い人たちは、やんない。もう現実、わかっている(笑)。

「我」 お供え物がたまに上がってたりはしますよね。

「武」 それは我々より年寄りでしょ。
「我」 お供え物はやっぱりあわまんじゅうとか上がるんですか？

「武」 狐さんだから狐の好きなもの……脂っこいものなんでも良いんじゃないの。
「我」 おいなりさんとか？

「武」 そんな良いものあげないよ(笑)。今はほかの動物に食い荒らされるから、すぐ下げるのがルールなんだ。各集落に一つずつ、お稲荷さんとはいかないけども。あっちの集落、うちらもお稲荷さん持つてるよ。立派な神社。狐と犬は仲悪いから、お稲荷さんいるから犬飼うなっていうけど、うち飼ってる。飼うなって言ってるけど息子たちが飼うって言うから。お供え持って神社持って行って、すみません許してくださいって。で、下げて来たんだけど。一応はね、なんかそういうしきたり守んないと悪いような気がするじゃない。世の中、そんなのは俺たちの時代までかもしれないけど、結構そういうのあるよ。





柳津町来訪

日時：2021年10月8日（金）～10月10日（日）

場所：柳津町砂子原地区 / 喫茶去 / 河畔の宿 月見亭 他

協力：金子勝之 / 天野俊彦 / 武田幹雄

西山温泉 滝の湯 / 西山温泉 旅館 中の湯 / 西山温泉 老沢温泉旅館

参加者：筑波大学 矢島由莉子 / 斎藤清美術館 地域おこし協力隊 我妻泉香
赵宇琪 谷野しずか
趙明昊 塚原有季
王新越 学芸員 伊藤たまき
瀧波謙太 係長 目黒清志
飯田帆香
三村一梨

柳津町来訪 筑波大学×斎藤清美術館 「進捗報告と作品案」

リモート調査後、多くの町民の方の協力で柳津町への知識が深まった制作チームでしたが、やはり実際に柳津町を訪れないことには実感がつかめず、作品制作が難航していました。

そんな中、十月、新型コロナウイルスの第五波が縮小し、制作チームによりやく柳津町来訪のチャンスが訪れます。初めに制作チームは斎藤清美術館を訪れ、まずは進捗報告と作品案のプレゼンテーションを行うことに。美術館の地域おこし協力隊や学芸員と話し合い、作品の展示が隣接する「やないづの家宝展2021」この調和や、柳津町らしい作品とはなにかを考え、コンセプトを固めていきました。

■日時

二〇二二年十月八日(金)

■場所

斎藤清美術館

■発言者

矢島由莉子「矢」 筑波大学学生

趙 明晃 「趙」 同上

瀧波 謙太 「瀧」 同上

三村 一梨 「三」 同上

我妻 泉香 「我」 地域おこし協力隊

谷野しずか 「谷」 同上

伊藤たまき 「伊」 斎藤清美術館学芸員

これまでの活動の内容を振り返って

「瀧」進捗と展示案をご報告させていただきたいと思います。これまでの活動の内容を振り返って紹介していきたいんですけど、五月は柳津のこと調べたり、どういう作品を作りたいかっていう、イメージをとにかく出して、絵巻物でストーリーを伝えようとか。柳津各地に、オブジェクトを配置して、アプリを使ってモニターを集めるみたいなのをやってはどうか、っていうのが出たりしました。



で、六月で題材を決めよう。この斎藤清の元々ある絵(※1)を、参考にしながら、太陽という共通点を見つけて、百鬼夜行と関連づけて、柳津の伝承たちを登場させようという話に、最初はなっていました。で、どんなキャラを登場させようかっていうことで、色んなキャラを考えたりしました。これは伝承だったり、お祭りがモチーフだったりするものもあります。最終的に、七日堂裸詣り(※2)の石段登りを、モチーフにしようという話になりました。こういう形で提示させていただいたんですが、この時にいただいたご意見が、祭りについての展示なので、妖怪というイメージが明るい雰囲気にならないんじゃないかというところだったり。そもそも斎藤清の、柳津の中であるという性質に、妖怪という架空の生物が噛み合っていないんじゃないか。斎藤清の

画風を使うことに意味はあるのかということだったり。伝承をそのまま表現しても、より、学生の見方だったり、入ったほうが良いんじゃないか、というご意見をいただきました。



それを踏まえて、色々考えたんですけど、十三講詣り(※3)をモチーフに作るうという話になりました。柳津の伝承たちが人間と同じように虚空藏菩薩様にお祈りしていたり、信仰していたりしていたら、見えないものとながってるような、ものが得られるんじゃないかという話になりました。ストーリーを考えました。架空生物そのものが主役ではなく、その町民だったり、町の雰囲気だったり、そういうのを、表せるような、作品が作れたら良いんじゃないかなという風に考えて。





「矢」 圓藏寺の写真とかを参考に描いた柳津の鳥瞰図で、伝承たちで活気づく柳津町を見下ろす構図で表現する映像作品を予定しております。小型モニターを用意してきました。鳥瞰図をプロジェクトで投影して、小型モニターで細かい映像を見せるという案にしました。鳥瞰図の中でランドマークだったりと、クローズアップして望遠鏡で覗き込んでるようなイメージで、細かいアニメーションを見せるような案を考えました。アニメーションのイメージはたとえば、お供え物を食べる伝承生物とか、人間の写真に映り込むだったり、日常に伝承生物が登場するみたいなアニメーションを、一連にしています。今後のスケジュールについてなんですけど、こんな感じで……展示の二週間前には、完成させたかなと思っています。

「我」 鳥瞰図で、町の人たちの生活と関わっていくっていうのを考えていたっていて、すごい家宝展ともマッチするような感じで、うれしかったです。ありがとうございます。なにか気になることとか、ありますか？

「谷」 ちなみに……この映像のストーリーというか、どのキャラクターが出てきて、どの伝承の話を使ってっていうの、決まったりしますか？

「瀧」 大筋のストーリーっていうのはなくて、一つ一つの画面のストーリーなので、それを考えていこうと思うんですけども。登場する伝承だったり、っていうのは、今考え中。「我」 小型モニターそれぞれに、伝承ってこれになりますか？

「瀧」 ああ、そうですね。

「我」 小型モニター自体はいくつぐらいになるんでしょうか？

「矢」 このスケジュールの時点では、六つ。

「我」 じゃあ、六つの伝承をクローズアップするみたいな感じですか？

「瀧」 やっぱ鳥瞰図という関係上、そこまです細かい人とか、細かいアニメーションを描いても仕方ないんじゃないかっていう話になって。モニターの中に細かい生活が見えるようにして、鳥瞰図は風景が動いているという……

「伊」 その小型モニターが六つで、大きな画面の中に展示されるのね。

展示の一つとして マッチングするのか

「伊」 ちょっと、良いですか？ 根本的な内容から行きたいんですけど、俯瞰図があって、そこにあたかもこう望遠鏡というか、覗くみたいに見てみたら、そこに町の人たちと伝承たちが関わっているのが見えるっていうのは、おもしろいと思うんですけど。この映像作品って、我妻が今やっている「やないづの家宝展」っていう展示があって、その中の一つとして、お願いしてやってるものなんですよね。家宝展っていうのは、結構町民目線というか、今に生きているお祭りとかをテーマにしているものなんです。なので、その展示のそばに伝承っていうのを置いたときに、展示の一つとしてマッチングするのを考えてなきゃいけないと思うんですけど。あともう一つ。お話を聞いて疑問に思ったのが、伝承と町民の人たちが関わってるアニメーションが、たとえば釣りをしている人に狐がなにかしてるアニメの案を出してたと思うんですけど、狐がなんで出てくるのか。その狐が柳津のなんの伝承なのかっていうのが、わかるようにしないと。この映像ってなんなんだろう？ なんの作品なんだろう？ っていうのが十分に伝わらないと思うんですけど。だから、アニメーションも大事だけど、たとえばパネルであるとか。それぞれのアニメーションに出てくる伝承たちが、そもそも柳津のなんなのかっていうのがわかるようにしないといけない。



一番はその……家宝展との関わりで、本当に調和してくるのかなっていうのが、私的には疑問かな。たとえばなんですけど、実際にはお祭りをしているところに、その伝承たちが実はちゃっかり参加してるとか。そういうイメージにしたら家宝展と絡んでくるかなと思うんです。今の町民が関わっているお祭りに、その柳津の伝承たちもそばで見守っていて、関わっているんだとか。なんかもうちょっと家宝展となにかつながるようにしていったほうが、私はやっぱり展示のあれとしてはおもしろいかなというか、思うんですけど。

「瀧」 はい。じゃあ、家宝展とのつながりの話なんですけど、何度かミーティングを繰り返した上で、学生の、私たちの、自由な発想とかだったっていうのを、最初に求められているという話を話されました。自分たちの見方だったり。その上で、家宝展とかにあまり縛られなくて良いということ言われて

いたので。

「伊」あ、本当に？そんなんだ。

「瀧」はい。で、斎藤清美術館の、斎藤清にも縛られなくて良くて、比較的その、作品と展示をあまり関連づけなくて良いよって話し合いがあったと思うので。その上で、町民との関わりみたいなのを、一切ないのは、中でやってる展示と関わりがないのはどうなのかってという話はあったんで。元々の案が、柳津の伝承だけが出てくるって話だったんですけど、それに加えて町の風景だったり、その中で圓藏寺のほうを覗くと、そこでお詣りをやっていたりっていう、小さな要素は入れようっていうことになっていったんですけど。で……やっぱり、こっちで話していて思ったんですけど。家宝展をやっているから、そのアニメーションというのは、遊びがないんじゃないかっていう話があった。そういう形になっていったんですけど。

「伊」なるほど。ただ、後でぜひ会場見ていただきたいんですけど、家宝展の舞台になる展示場所と、それから映像を流そうと思ってる展示場所ってものすごく近いんですよ。あそこが一つの展示場所みたいになりがちな感じなんです。私が展示をする側として見ると、やっぱり見たときの感じっていうのは考えちゃうんです。どっぷりとしたお祭りの展示があり、もう一方では柳津の伝承なんだろうなっていう作品があるっていうのは、見たお客さんが「これ、なんなんだろうな？」って思わないのかな？って、考えちゃうわけ

ですよ。やっぱりその調和性というか、共通するなにかっていうのがあったほうが良いのになって私は思います。

舞台が柳津ってというのがわかるものがやっぱり大事

「伊」さっきも言ったように、お客さんは必ずしも柳津町民ではないので、これは柳津の伝承であるとか、柳津の祭りなんだっていうのが、わかるような工夫っていうのは、入れてほしいです。

「瀧」はい。なんの伝承だったかっていうのを、絵だけで説明するのはできないと思うので、出る場所だったりとか、そういうところを関連づけて、足りないところはキャプションだったりでちょっと説明して。でも、全部説明するわけじゃなくて、他のも見てみてくださってという形で作るのが良いのかな。

「伊」逆にあんまりアニメーションでやっちゃうと野暮ですもんね。やっぱり作品なので。作品として見せたい、それはよくわかるし正しいので。ただ、やっぱりコンセプトがあるわけですよ。そのコンセプトもちゃんと、見た人に伝わった上で、なるほどこういうアニメーションなんだねってなるのが理想的なので。具体的にそういう形に落とし込んでいくかは相談だと思うんですけども。そこだけはちょっと、守ってほしいかな。思います。「谷」すみません。さっきのキャラクターのページ見せていただいても良いですか？ニン

ギョウマンギョウウ（※4）っぽいものいるなって思ったんですけど、これは……



なんかこういう風に、お祭りも映像の中に出てきてくれたら、全然不自然じゃないかなって思ったんですけど……その、ニンギョウマンギョウウ以外で映像で使えそうなお祭りってありますか？

「瀧」そうですね、えっと……よく話に出てきたのが、団子さしだったり。ああいうのはビジュアル的にわかりやすい、というのはありましたね。一応、今は伝承をもとに、ってなってるんですけど、最初のほうは地域自然なんかもキャラクター化して良いんじゃないかって、冬まつりだったりとか。なんかそういう案も、出てきたほうが良いのかもしれないですね。もしかしたらその、あまりやりすぎるとずれてしまうと、それこそ作品のテー

マがよくわからなくなってしまっかなっていうのはあって。個別にしていたんですけど。それでしたら、たとえば、実際にどうなのかは、あんまりわかんないんですけど、鳥瞰図見たときに、提灯があったりとか。催し物の慣行みたいな、町全体がお祭りをやっているよ、みたいなのを、全部見せるっていう感じでも……

「伊」みなさん的にはどうですか？どちらかというとやっぱり、日常的な中に伝承が潜り込むっていうのにしたいのか、もうちょっと祭りとか、柳津観っていうのが、なにかの中に伝承が加わってるっていうのが作りたいか。どっち作りたいと思いますか？

「矢」個人的な意見になってしまっんですけど、お祭りに参加しているのかすごく、おもしろいと思うので、私はそれが……コンセプトにも近づけると思いますが、やりたいことにもそんなにずれないのかな。

「伊」そっか……ずれない感覚があるんだしたら、お願いする側としてはね。言っちゃうとさ、釣りをしているっていうのは柳津じゃなくても良いわけじゃない？只見川だって明らかにわかるシチュエーションだったらまだしも、釣りだけの画面では柳津ってわからない。これの一つ大事なのは、このアニメーションの舞台が柳津っていうのがわかるものがあるってことか、柳津特有の風景とかね。その中にこう、伝承が紛れ込んでるっていうほうが、ああ今の伝承って柳津の町や風景に溶け

込んでいるんだっていう、感覚が伝わるのか

など思いますね。もしそこに、自分がやりた
いっていうことに、そんなにズレがないって
いうのであれば、そういうのを可能性として
考えてもらえると良いかなって言うのはあり
ますね。さつきチラツと出たと思うんですけ
ど、祭りの準備をしているところに紛れ込ん
でるとかね。団子さしをやっているときに、知
らないうちにつけた覚えのない団子がささっ
ていたとかさ。そういうのだとより、生活と祭
りにつながるのかなというのは、思いました。

季節とかを表現しないと

「趙」すみません。日常のほうじゃないと、
一つ心配なところがありまして。それはその、
祭りって一年をかけて、色々こうあるの
……やっぱり鳥瞰図を描くので、季節とかを
表現しないと……

「伊」私もそれ、実は思いました。逆にね、
家宝展のほうも……展示って冬なんですよ。
十二月の十一日から展示が始まるんですね。
で、家宝展の展示のテーマって実は冬のお祭
りになるんですね。とすると、冬の雪景色に
してもらおうとかね。俯瞰図も正直、どの季節
のを描くのかなと、思いました。

「瀧」祭りとかを入れるときは……その日、っ
ていうのが決まってくるので、その日の季節
にしたほうが良いと思います。

「伊」だど、さつきも言ったように準備……
とかね。あと祭りじゃなくても、柳津らしさ

が出れば良いと思う。

「瀧」たとえばなんですけど、その日って決
まって、なにかの祭りの全日をやるっていう
形と、その町の中に、別々の色々なお祭りが
混在している状態とか。別々のお祭りが混
在するってなったときは、季節は、なんとも
とれないような季節にして。

「我」季節に合わせるなら、映像も変わらな
いと不自然だとは思ってますけど……でも、
それは作業量が膨大に……

「伊」でもさ、それは一気にやることはない
んだよ。展示は十二月十一日だから、冬の風
景だけは十二月の展示に間に合わせるよう
にして。企画展の展示替えが二月十四日かな。

だからその俯瞰図のところだけ、変えるとか
ね。あとはそしたら、展示のしつらえとの揃
えかな。たとえばさつきの、準備したいなの
にやるっていうのであれば、まあ季節に拘ら
なくても……

「我」そうですね、お祭りのというよりも、
藁でしめ縄を編んでるところとか、そういう
なにかと特定できなくても、しめ縄編んで
るなら春の行事の雰囲気を出せるし。お祭
り！っていうふうには、ガッツリ見せるほど安
直ではないけど、日常なんだけど実はその日
常は、お祭りに含まれてるみたいにな……

「瀧」準備だったら、いつしても良いですよ。
「伊」できればそれも、やりすぎちゃうと、
どこでもやってるだろというふうになっちゃう
うから、どっかには柳津のっていうのを出し
てほしい。

「我」キャラクターがくることによって、こ

れはニンギョウマンギョウだよねって。そこ
で柳津だっというふうな決定づけられる。

「伊」キャラクターで出すのはありだよな。
ニンギョウマンギョウはわかりやすいキャラ
クターだもんね。

「三」先ほど話にもありましたけど、キャブ
ションをもし別でつけるんだしたら、答え合
わせみたいな感じにもなりますよな。

「瀧」なにをさせるかみたいなのに、一個一
個のアニメーションに関わりがあったほう
が、良いなっていうのは思いましたね。なに
げない日常にキャラクターたちが出てくる
……そのバランスは、個人的には好きです。

「我」その、いかにもお祭りしてみたいです
のだと、確かにくだいような気はする。

「伊」それで言うと、選ぶものも、マイナー
なものもあっても良いと思うんですけど、い
わゆる本当の柳津のお祭りとかも何点か入れ
てもらえるとバランスが良いかな。

「三」全部が主役級のものじゃなくて……
「伊」このお祭りは知ってるよ。あ、こんな
のもやってるんだ、とかそういうのかな。

「瀧」いくつか知ってるのがあれば、他もそ
うなんじゃないかって……

「伊」そうそう。そんなとこかな……あとは
スケジュールかな、気になるのは。それが終
わるか、ちゃんと(笑)。

今後のスケジュールについて

10/15(金)	絵コンテ
10/22(金)	ラフ進捗確認
10/29(金)	ラフ進捗確認2 線画進捗確認
11/5(金)	ラフ進捗確認3 線画進捗確認2 着彩進捗確認
11/12(金)	線画進捗確認3 着彩進捗確認2
11/19(金)	着彩進捗確認3
11/26(金)	最終調整 完成



「谷」これたぶん、絵コンテが一番大事で、
それ決めちゃうと戻れなくなっちゃうので、
絵コンテができたなら私たちに見せてもらえ
たらうれしいです。多分そこでまた意見が出て
くるかなとも思うので。でも今、私たちが話
したのを踏まえて、今日宿に帰ってからも
良いので、こういうふうにはやっていたら良
いよねみたいなのを考えてもらえたら良いん
じゃないかなと思います。

「我」絵コンテ後に一回、ミーティングでも
良いし。

「谷」うん、それは必要。

- ※1 《雪夕陽》(1975紙・木版)のこと。
- ※2 七日堂裸詣り…p. 125
- ※3 十三講詣り…数え年で十三歳のときに
圓藏寺へお詣りに行くこと。
- ※4 宵中のニンギョウマンギョウ…p. 305



それを踏まえての再考



- ループする映像を作るという案は変えず、妖怪、糟いイ、
斎藤清の絵柄を使うという点を変える。
- 百鬼夜行的なイメージから、十三詣りをモチーフにした

→ 伝承たちが人間と同じように虚空から知恵をもらい、
一人前になる というストーリー

柳津町来訪 金子勝之さん

「水と暮らす」

作品案についての議論は白熱し、制作チームが美術館でのプレゼンテーションを終えた

ころには、すっかり夕方に。宿に荷物を置いた制作チームは、会津柳津駅から車で三十分ほどの場所にある西山地域へと向かいます。

そこで一行をあたたかく出迎えてくれたのは、砂子原地区で民宿と「ティールーム山ねこ」を営む金子勝之さん。

西山のおいしい水で育った無農薬野菜や、厳しい会津の冬を楽しく過ごすための保存食を取り入れたお料理をいただきながら、勝之さんのお話を伺いました。



■取材日時

二〇二二年十月八日(金)

■場所

ティールーム山ねこ

■インタビュアー

金子 勝之「金」 砂子原地区在住

■インタビュアー

矢島由莉子「矢」 筑波大学学生

三村 一梨「三」 同上

飯田 帆香「飯」 同上

我妻 泉香「我」 地域おこし協力隊

目黒 清志「目」 斎藤清美術館係長

【砂子原地区熊野神社前】

見せたいのはこの水なの

「金」 神社に何って、とりあえずお詣りをして。それで、見せたいのはこの水なの。この水量を見てほしい。こういうのが三つ四つある。いつもここで足を洗って、ここで大根洗って、そして顔を洗って、この水を飲んで。手を入れてみて。

「矢」 冷たいのかな……わあ、わあ！冷たい！びっくりした。

「三」 思ったより冷たかった。凍りそう。

「金」 とりあえずさ、ここ、砂子原っていうところはすごい水が豊富な。ものすごい豊富で、この水なしにはこの作物は考えられないわけだ。ここに居る人たちも、この豊富な水のおかげで住んでいられていうところもあるわな。体の六十パーセントは水なんだから。水のおいしさが体のおいしさ、ん？違うか(笑)。食べ物のおいしさだ。

「三」 育てられて食べられちゃう(笑)。

「金」 これがなんと沼沢湖って金山にあつて、こっちの方角に金山、直線距離にしてたぶん五十キロはないと思うんだけど。その伏流水なの。わかったかな？百年くらいかけてここに出てくる。あの山の中腹に行くと、めちゃくちゃい大石があつて、その下から湧き出てくる。一年中だよ、これ。ちようどこが海拔四百メートルなんだけど、沼沢湖ってなんぼも違わないんだ。ただ、なんつうの？毛細現象っていうの？それでここに湧き出てくる。沼沢湖のある周りさ、伏流水がほつぽうに出てるのさ。だけど、伝ってくる中の岩によって、味が違う。伏流水の中でもこの水はおいしいの。



【「ティールーム山ねこ」内】

「金」 どなたかこの茶碗にさ、ちょっとお湯を注いであげて。熱いからね。うちの一番のご馳走はね、白湯なの。お、手つき良いぞ。

「三」 どれくらい入るんですかね、これ？

「金」 半分くらいで良いと思う。熱いからね。いっぱいやるよね……このくらい少し。少なきゃ一回やれば良いじゃない。少しずつ。これでみんな飲んでください。

「飯」 自分では自分で注ぐ？

「矢」 できるかな？怖い……

「金」 猫舌の人は先。とりあえずうちが一番おいしいのは、白湯なんですな。これ以上おいしいのはいからね(笑)。うちが一番おいしいと思うんだけど。

「矢」 飲める。良い温度だ。おいしい。

「金」 どう？あんま感動してねえか？

「我」 おいしい。落ち着いちゃって。

「飯」 リラックスタイム……

「金」 毎日子、朝起きて毎日こう飲んで、毎日うまいって思うんだ。それは実は健康のパロメーターでもある。水がまずいときはね、健康気をつけたほうが良い。体どこか調子悪いとき。そういうときは気をつけて。

「目」 水はどこから汲んでくるんですか？先ほどの？

「金」 あの水が実は水道なの。同じ水使ってる。

「我」 ああ、水源が一緒？

「金」 同じ水なの。水道で使ってる、オーバーフローしたやつが、あの水。すごいことなの。

柳津町来訪 天野俊彦さん

「善波命と千石太郎」

ぜんなみのみこと せんごく

来訪二日目。午前中は只見線のビュース
ポットや久保田三十三観音などを見て回った
制作チーム。午後は、二手に分かれて調査を
することに。

温泉宿中心に西山を巡り、背景写真等の作
品制作に使えるような素材を集める撮影チー
ム。町民にお話を伺って、伝承や柳津町につ
いての知識を集める取材チーム。撮影チー
ムは西山へ残り、取材チームは柳津の町中へと
向かいます。

圓藏寺の入り口近くにお店を構えるお食
事処「喫茶去」で取材班を迎えてくれたのは、
西山の伝承「善波命と千石太郎」について詳
しく、「喫茶去」のオーナーでもある天野俊彦
さん。

現在の会津美里町に遷座された伊佐須美神
を守護するために、大和朝廷から遣わされた
善波命と、当時この地方で広く勢力を振るう
豪族であった千石太郎。二人の当地を巡る戦
いは熾烈を極め、「善波平」「千石」「斬伏峠」
など、西山の地名に多く痕跡を残しています。
戦いは善波命の勝利に終わりましたが、二人
は西山の人々にとって、いったいどんな存在
であったのでしょうか。

■取材日時

二〇二一年十月九日(土)

■場所

喫茶去

■インタビュイー

天野 俊彦「天」 牧沢地区在住

■インタビュアー

瀧波 謙太「瀧」 筑波大学学生

我妻 泉香「我」 地域おこし協力隊



地元の住民を守っていた

「瀧」千石太郎の話。地名になったとか、そ
ういう戦いがあったっていうのはわかったん
ですけど、この話の千石太郎はやっぱり、西
山のみなさんから見て、どういう存在とい
うか、どういうふうに使われてるのかなって。
善波命も神社を守って、来てて。話を読んだ
ときに、どっちが悪いとかどっちが善いとか
いう話じゃないような気がしてて。

「天」どう……なんでしょうね。あんまり聞
いたことないですね。たぶんね、たぶん、善
波命のほうが悪いんじゃないですか。侵略だ
からね。神様、伊佐須美神を擁護するために
来たわけでしょ？伊佐須美神がたとえばね、
たとえば人だとするじゃないですか。その人
が、ここに来て。その伊佐須美様っていうの
は、その当時の大和朝廷かなんかから来た人
じゃないかと、私は思うんですよ。だから、
ある意味侵略者ですよ。千石太郎はその地域
の豪族だといえど、侵略者から地元の住民を
守っていた……じゃないかと。ただ、なんか
でちょっと読んだことあるんだけど……結構
暴れん坊で。まあ、税金みたいな年貢みたい
な、いわゆる上納品？それをかなり貪って
た、というふうな、なんかで見たことありま
すね。果たしてそれだから、善いものなのか。
山賊かもしれないし(笑)。でもね、かなりの
何百人っていう手下っていうか部下っていう
か、いたんでしょうからね。それだけの戦を
したわけだから。とするならば、まあ、それ

なりのものを調達しないと成り立たないです
わね。そのへんは私もちょっとよくわかん
ないです。そこまでは調べたことないし……ま
あ、これだけの雪国なので、どんなあれだっ
たかはわからないですけどね。その当時のこ
とはね。

「瀧」なんか似たような、歴史の教科書に載っ
てる話ですけど、坂上田村麻呂みたいな。シャ
クシャインと戦うみたいなの。

「我」朝敵にされちゃったみたいなの？

「瀧」なんか、そういう話に似てるのかな。

「天」かもしれないね。まあ、そういうこと
で地元の豪族と戦ったのが善波命ということ
だけ。その地元の豪族は千石太郎と。千石太
郎の、その由来の地名が西山は至るところに
残っていると、いうことですよ。



柳津町来訪 武田幹雄さん

「柳津町の郷土料理」

来訪最終日。午前中は圓藏寺や魚洲など、柳津の町中を歩いて巡った制作チーム。午後には、リモートでの町案内でもお世話になった武田幹雄さんのもとへ向かいます。

一行が訪れたのは、「河畔の宿 月見亭」。幹雄さんは、観光ボランティアガイド協会会長でありながら、お宿の料理長も務めているのです。今回幹雄さんに教えていただいたのは、制作チームが来訪前から関心を寄せていた柳津町の郷土料理について。実際に「こづゆ」を作りながら、郷土料理だけではなく、冬を耐え抜くための保存食や、会津人らしいおもてなしについても語ってくださいました。幹雄さんのお話からは、料理のことだけではなく、柳津町の風土や暮らしを垣間見ることが出来ます。

■取材日時

二〇二一年十月十日(日)

■場所

河畔の宿 月見亭

■インタビュイー

武田幹雄「武」 「河畔の宿 月見亭」料理長

■インタビュアー

我妻泉香「我」 地域おこし協力隊

三村一梨「三」 筑波大学学生

結婚式とかお葬式、 そのくらいしか出さない

「武」材料見てみると分かるんだけど、末広がりでだから八つの材料を使うのが基本です。これによって使わない場合もある。八種類、これ見て感じたことはない？これ(三つ葉)除いて。昔だと思って、二百年ぐらい前だと思って。江戸時代だと思って。常備ある品なの。そのときは、塩につけたわらびを青み、アウセントとしてそれを使ってた。今は香りが良いから三つ葉使ってます。そして、これは特別料理なので、冠婚葬祭、結婚式とかお葬式、そのくらいしか出さない。今、あとお正月とか。よほど祝い事でしか使わない。なぜかっていうと大変。家庭、お母さんが一人でやるなんてこの材料見たら大変でしょ？これを刻むんだから。他のものも作んなきゃならない。それよりピザ買ってきて焼いたほうが安い、簡単(笑)。ええとね……基本的にこれ、大皿でしょ？結婚式が自宅で行われていたころです。お料理は出る。でも、お料理は全然手をつけない。お料理はうちに持ち帰った。お酒飲むのこれを食べながら。めいめいが

自分で取り分けて、だから、こづゆのことは酒の肴と言っていた。だから、すごいバランスの良い食品なんです。野菜から、貝柱ここにありますが、たんぱく質とあるんで。基本的に酒には良い。



この料理(こづゆ)は、明日も食べて明後日も食べるみたいな感じだから。

「三」だからこんなにたくさん作るんですね。

「我」だから、おせち料理といっしょに作ったり？

「武」まあ、そんなような感じですね。

「三」なるほど！

「武」少し前は何杯もお代わりしても良い料理

だったけど、今はこづゆのこと知らないんで、ガツガツしてるように思われるから、しない。

保存、まったく保存

「武」郷土料理はね、栄養学的にも良い。ここには海がないから海藻類が入ってこないんですよ。まあ、昆布といったってそう入ってこないから。エゴ料理っていうのがあるんですよ。海藻のエゴ草を煮て、寒天状にして食べる。それで、そこに含まれてるヨード分取らないと、パセドウ氏病とか、そんな病気が昔は出たみたいですよ。そのために、その料理が残ってきた。だから、海にはエゴ料理はない。目の前にあんだもん。海藻食べれんだもん。なにもそんな加工することはない。

「我」エゴ料理大変だし……

「武」でもなぜ、あれですよ。私なんて色々考えたんですけど、料理の基本はなんだなんて、味のなんだのそうじゃない。保存、まったく保存。いかに同じ品物が同じ栄養価で長い間保存できるか、保存する技術を持った人が料理人。問題は保存。

「我」どんなにおいしくてもすぐ悪くなっちゃダメってことなんですね。

「武」じゃあ塩漬すれば良いって、病気になるじゃない。なあ？そんな塩辛いものばかり食べたって。そこらへんのバランスが大変。塩抜きをいかにするかも技術。栄養価を逃さないようにした塩漬するのも技術だし。それが本当の料理人だと思う。



筑波大学制作作品

「祈晴柳津鳥瞰図」

今回、制作チームが柳津町の人々とふれ合って感銘を受けたのは、

普段の生活の中でも神仏を身近に感じ、行事や伝承と共存している姿。

そこで、「祈晴柳津鳥瞰図」では、祭りそのものではなく、

祭りの日に向けて準備をする町の人々の姿を描くことに決めました。

「祈晴」とは、文字通り「晴れを祈る」という意味です。

このタイトルには、ハレの日（祭りの日）を待ち望む町の人々の想いと、

柳津町のかげがえのない生活がこれからも曇りなく続きますように、

そんな制作チームの願いが込められています。

制作期間：2021年10月11日（月）～12月5日（日）

展示期間：2021年12月11日（土）～2022年4月10日（日）

場所：筑波大学（制作） / 斎藤清美術館（展示）

指導教員 村上史明

映像機材手配、制作 / 設営指導

チームリーダー 矢島由莉子

キャラクターデザイン「甲冑のニンギョウマンギョウ×善波命と千石太郎」
アニメーション線画「甲冑のニンギョウマンギョウ×善波命と千石太郎」「久保田三十三観音」

趙宇琪

キャラクターデザイン・アニメーション線画「団子さし×奥之院の大力お坊さん」

趙明昊

キャラクターデザイン・アニメーション線画「七日堂裸詣り」

王新越

アニメーション着彩
ビデオ編集

瀧波謙太

鳥瞰図作画 他

飯田帆香

アニメーション着彩
キャプション制作

三村一梨

キャラクターデザイン・アニメーション線画「壺まつり灯籠流し×赤べこ伝説」







「やないづの家宝展2021」事業についてのご意見、ご感想

筑波大学芸術系 村上史明

昨年度の「やないづの家宝展2020」は主に民具と人に焦点を当てた展示でしたが、今年度はまつりや行事などの「コト」を通じて、柳津の人々の生活を浮かび上がらせる試みとなりました。町民の方々には日常の風景かもしれませんが、作品として美術館に再構成されることで、その価値を再確認できる展示になったと思います。

斎藤清美術館と筑波大学の連携事業は、コロナ禍での状況において昨年度に引き続き、インターネットを利用したオンラインでの交流が中心となりました。参加した学生は、福島県出身の学生が一名、県外から三名、中国からの留学生が三名の合計七名でした。今年度の家宝展のテーマであるまつりや行事などを芸術作品として表現するために、学生達の専門分野である、イラストレーションやアニメーションを有効に活用した作品を提案することになりました。最終的な作品の構成は、平面のキャンバスに円形の小型液晶モニタを五台組み込んだ、これまでにない映像とキャンバスが融合した新しい試みとなりました。キャンバスの平面部分は、鳥の視点から柳津町をみたような、鳥瞰図とすることにし、町内に点在している「コト」を一望することができず。そして、小型の液晶モニタには、アニメーションの表現によって、伝統的な行事や史跡の特徴が特徴的に表現されています。はじめと終わりのない、連続したアニメーションには、伝統的に継承され世代を超えて反復される行事に対する学生達の思いが込められています。はじめて柳津に来訪する旅行者にとっても、柳津町の特徴がわかりやすく表現されているものと思います。





制作チームリーダー 矢島由莉子

私が住んでいた地域ではその土地ならではの伝統や文化があまりありませんでした。活動を通して柳津について知り、柳津町独自の祭りや文化がたくさんあること、また、その文化が地元の人たちに馴染み深く根付いていることに驚き、とても素敵なことだなと感じました。「やないづの家宝展」は昔からの慣習や歴史を地元の方々が大切にしてきた柳津町だからこそできる素晴らしい事業だと感じますし、受け継がれてきたものをさらにまた次の世代へと残し、継承していくという観点でも非常に重要な活動であると思います。「やないづの家宝展2021」に参加することができ、とても光栄です。作品制作にあたり、伝承や柳津町についてお話ししてくださった柳津町民の方々、真摯に的確にご意見や助言をしてくださり、リモート取材や資料提供、柳津町来訪などあらゆるところでお世話になった斎藤清美術館の方々には心より感謝しております。柳津町の歴史や伝統の継承に少しでもお役に立てていれば幸いです。

外国人である私が柳津を知ったのは、中国の動画サイトで裸祭の動画を見たからです。タイトルに柳津とあるだけで詳しい説明はありませんでした。正直なところ、最初にこの裸祭を見たときは衝撃的で、ただのイベントだとさえ思いました。2回目に柳津を知ったのは、旅行に行きたいと思って只見線を検索したときでした。しかし、それまで柳津に対する印象は、「この場所は知っている」という程度で、それ以上のことは知りませんでした。村上先生が授業の内容を柳津について教えてくれたとき、数年前に動画で小耳に挟んだ場所や祭りを体験する機会があるのだと、ふと気がつきました。柳津と私は、そういう運命だったのでしょうか。

コロナ禍で柳津の旅が延期になったので、間に合うかどうか心配していましたが、結果的には間に合いました。祭りの時期に間に合わなかったことが少し悲しかったですが、3日間で訪れた場所や体験した活動にとっても感銘を受けました。例えば、最初の夜に民宿に行ったのですが、日本の伝統的な家で食事をしたり話をしたりするのは初めてのことで、人によっては大したことではないと思うかもしれませんが、私にとってはとても興味深い経験でした。

家宝展について2021年のテーマは祭りです。それらは、その土地の伝説や歴史から発展した地域性のある文化遺産であり、その土地を本当に知り、溶け込むためには、その土地の祭りを理解することが不可欠です。このような柳津の祭りの研究を通して、「柳津」という言葉は単なる地名ではなく、千石太郎の伝説や赤べこ圓藏寺の話なども含まれています。また、もっと多くの人に祭りのことを伝えて、面白い話を知ってもらい、より多くの人が柳津に来て様々な風習や伝統を体験してもらえるようにしたいと思います。

今回の「やないづの家宝展2021」に参加できてすごく光栄です。コロナ禍で色々大変でしたが、リモート取材や、日々のやりとりでご意見をもらったり、協力してもらったり、そして10月に実際に柳津地方にご訪問できたことも、心より感謝を申し上げます。私は留学生として、今回の活動を通して、旅行などでなかなか触れられない体験や、ご当地の人との繋がり、深く柳津の文化や歴史についてのことなどの貴重な経験を得られました。初めて学外の方と連携することになり、最初は自分の日本語能力とか、迷惑かけずに接することができるかどうかなどのことに不安がありました。先生とチームメイトから助けてもらって、そしてご当地の方々からも色々お世話になって、順調に今回の制作ができました。不思議なことに、異国の地にながら、町の方から親切に招待していただいて、懐かしい感じもしました。そして、ご当地の伝承や、斎藤清美術館で行われている展覧会の作品などからインスピレーションを受け、メンバーと協力してこの作品を完成したことも、とても勉強になりました。帰国してもこの経験は活きると思います。改めて協力してくださった皆様に感謝申し上げます。

秋のさわやかな日に柳津に行き、保存されている古い日本建築や民俗をたくさん観ました。柳津の道を歩き、独特の丸みを帯びた峰や田んぼを見てきて、斎藤清氏の版画の雰囲気を感じることができました。

制作の過程では、テーマの選定から表現方式まで、各テーマの設定から補完の詳細説明まで、すべての工程を確認させていただきました。毎週のミーティングでは、柳津斎藤清美術館の皆様と積極的かつ友好的に交流し、多くの貴重なアドバイスをいただきました。多くの困難や問題があり、作業量も予想以上に多かったのですが、村上先生もチームも一丸となってすべての問題を解決し、最終的に作品を完成させることができました。

この作品を通じて、地域の方々にも喜んでいただき、日本の原風景を感じることができる魅力的な町、柳津をより多くの方々にも楽しんでいただきたいと思います。

柳津の作品をみんなと一緒に制作した経験は、本当に貴重な思い出と思います。

瀧波謙太

今回「やないづの家宝展2021」の事業に、作品を展示するという形で参加出来たことを心から光栄に思います。

私は高校卒業までのほぼ全ての期間を福島県の白河市で過ごしました。

私にとって会津は身近な存在だったので、柳津町の美術館と連携して芸術的な活動ができるこのプロジェクトをとっても魅力に感じていました。また、私自身も震災を経験しており、当時の記憶を鮮明に覚えている身としては、何か地元で寄与できることはないだろうかと思いついていた次第であります。コロナ禍ということもあり、交流の上で様々な障害もありましたが、実際の美術館に作品を展示出来たことは私達芸術を志す学生にとっても貴重な経験となったと思います。

「やないづの家宝展2021」は「まつり」をテーマとした展示で、私達学生も様々な資料を共有頂いたり、実際に住民の方々への取材に立ち会うこともありました。私含めた七名の学生を中心に制作した「祈晴柳津鳥瞰図」でしたが、こういった皆様の協力無しにはとても成立には至らなかったように思います。改めて斎藤清美術館の皆様、柳津町の住民の皆様には心より感謝申し上げます。

飯田帆香

今回、このような魅力的な展示に、学生として参加させていただくことができて、とても嬉しく思います。今回私たちが制作した作品は、自分たちだけの力では作り出せなかったことでしょう。斎藤清美術館の皆様、地域おこし協力隊の皆様をはじめ、柳津町の皆様にはたくさんご協力、アドバイス等をいただき、感謝をもしきれません。たくさんの方の貴重なお話を資料、そして私たち学生にはない視点でのご意見をいただいたり、町を訪れた際も、行く先々で親切にしてくださいました。おかげで、調査としての有意義さだけでなく、柳津の町の魅力をより深く知ることができ、制作ももちろん、来訪やミーティング等も含め、全体を振り返ってみても、とても楽しかったです。作品にもいい影響が出たのではないかと思います。改めてお礼を申し上げます。

自分たちの作品以外の展示もとても興味を惹かれるので、展示期間中に、ぜひ美術館に足を運べたらいいなと思います。そうでなくても、また柳津の町に遊びに行けたらいいなと思います。今回私たちが作ったこの作品が、柳津の町おこしに少しでも貢献できていましたら幸いです。本当にありがとうございます。

三村一梨

はじめに今回このような形で本事業へ参加させていただいたこと、深く御礼申し上げます。「やないづの家宝展2021」開催に際し、学生らしく自由な表現をということで始まった本年のプロジェクトは現在の感染症の影響を受け困難な場面も多かったように思われます。我々学生にとってこれまで縁のなかった地域を題材に用いた制作というのはやはり現地調査無しにはイメージが固まらず、制作期間の大半を構想にしか当てることができなかったため歯痒い思いをする期間が続きました。ようやく来訪が叶ったのは締め切りまで約2ヶ月となった昨年10月でしたが、重なった延期の分その感動は大きく、制作への強いエンジンとなりました。それまでぼんやりとしていた作品像が、現地の空気や住民の方々の温かさに触れることで具体的に固まっていく感覚を体験できたことは今回非常に大きな収穫になったと感じています。私が担当したアニメーションには赤べこが登場しますが、この発想は柳津地域の至る所で会った「やないづ赤べこ親子」の像をはじめ、柳津の生活の一部となっている赤べこという存在を実際に目にすることで生まれたものです。今回の我々の作品が「やないづの家宝展2021」、ひいては柳津地方の歴史や文化を語り継いでいく一助となれたのであれば光栄に思います。最後になりますが、「祈晴柳津鳥瞰図」の制作にあたりお忙しい中現地での取材に快く応じてくださった地域の方々、また来訪が叶わない中でもオンライン来訪をはじめ最後までサポートをしてくださった斎藤清美術館の方々に深く感謝申し上げます。

やないづの家宝展 2021 活動報告書

2022年3月発行

ご協力いただいた
みなさん
(敬称略・順不同)

小池勇一
船木キミ子
長谷川静江
長谷川恒正
高森正純
新井田順一
新井田雄
山内拓也
塩田恵介
山名定喜
金坂富巳子
鹿野隆
原忠
長谷川一三
斎藤泰子
菊地義隆
武田幹雄
金子勝之
天野俊彦
矢島由莉子
赵宇琪
趙明昊
王新越
瀧波謙太
飯田帆香
三村一梨
斎藤千晴
久保瑞穂

安久津地区のみなさん
檀ノ浦地区のみなさん
冑中地区のみなさん
小巻地区のみなさん
寺家町地区のみなさん
一王町地区のみなさん
門前町地区のみなさん
砂子原地区のみなさん
柳津町商工会青年部
柳津観光協会
あかべこ語りの会
西山温泉 旅館 中の湯
西山温泉 滝の湯
西山温泉 老沢温泉旅館



写真提供

新井田順一 / 斎藤千晴 / 柳津観光協会

編集

我妻泉香 / 谷野しずか / 塚原有季

印刷
発行

陽光社印刷株式会社
やないづ町立斎藤清美術館
〒969-7201
福島県河沼郡柳津町大字柳津字下平乙187
TEL 0241-42-3630
FAX 0241-42-3631



やないづ町立

斎藤清

美術館

KIYOSHI SAITO

MUSEUM OF ART, YANAIZU